姫様のご採択

川崎真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫様のご採択

【Ｎコード】
Ｎ２７５５Ｑ

【作者名】
川崎真人

【あらすじ】
根暗少年の初恋と戦いを描いたハートフルボッコラブストーリーです。

プロローグ（前書き）

アクセスありがとうございます。

プロローグ

とびっきり素敵なものを作ろう、と思った。
きっとあいつを幸せにするのだ、と思った。それができるのは、きっと自分だけなのだから。
いつか世界で一番美しいものは何かと問われて、かつて生きていた彼の母親は、その回答に酷く困っていたように思う。困ってはいたが、誤魔化すことはせず、あくまでも真剣に考えてくれる母が、彼は好きだった。
『花火、かな』
母は確か、そう答えてくれたように思う。それから母は、頬を赤らめながら、今では知り合いの名前を呆然と羅列することしかしなくなった旦那との馴れ初めを語ってくれた。その時の記憶があるから、彼は父親のことを一度として殴ったことがない。
『ひまわりの花火って、あるのかな？』
あいつは確かその時、そう言っていた。
ある訳ないじゃん、と母親はそう言って笑っていた。あいつは花を含めて、この世に存在することごとくのものを好きである。けれど、その名称を知っているひまわりだけは、そんな彼女にも特別な花だった。
そんな訳で、彼はひまわりの花火を作ることに決めた。
作り始めたのが五月の頭で、様々な試行錯誤をして出来上がったのが九月である。その間中、学校には月に十回もいかなかったけれど、父親はとんちんかんだったし、母親はもういなかったので、それを咎める者は彼の嫌いな教師しかいなかった。
そして彼は、ひまわりの花火を打ち上げた。
ひまわりの造花の傍で、家の庭から。黒い屋根を飛び越して空中で破裂した花火は、もしかしたらひまわりに見えなくもなかったかもしれない。

彼はすぐに、二階の彼女の部屋に飛び込んだ。
九月なのに偉く肌寒い部屋で震える彼女は、感動と興奮をちりばめた表情で、今の何、と言った。
『ひまわりの花火だよ。お兄ちゃんが作ったんだ』
彼が言うと、すごいね、と彼女は答えた。
『良いか。お母さんは死んで、お父さんはもうダメだ。おまえを幸せにするのは、僕だ。だからおまえは、僕の言うことだけを聞いて、良い子でいるんだよ』
分かった、と彼女は言った。
良い子にしてたら、またあれを見せてくれる？　と彼女は尋ねた。
『もちろんさ』
彼は答えた。彼が、小学五年生の頃の話である。

一章

鏡の前に立ったのはただの感傷だった。ていうか自分の姿なんて、多分一年くらい見ていない。

不健康に青白い顔を、生まれてから多分一度も櫛を入れたことが無いボサボサの髪で覆い、目にクマまでこしらえたその姿は、まあどう見てもただの陰気な少年であった。誰かに着せられたように新品の学生服に身を包み、これから始まる高校生活への憂鬱に、肩を落とす痩せた影はつまりぼく。

流石に虫とかは浮いていないだろうな、とか思いながら髪の毛をわしゃわしゃかき回す。さらに手櫛で適当に髪を整えて見るのだけれど、長らくの不摂生の所為で傷んだ髪は、ぼくの性格を現すようにでろりと怠惰に折れ曲がったまま。

春休みの間中一度も外に出ずに絵ばかりを描き続けた結果、形成された目の下のクマ。澄ましているつもりでも、どこか卑屈な表情になる。こんな奴と仲良くしようなどと考える人は、多分いない。

鏡の前でしばらく考えて、一人納得する。きっと、こんなところでこんな風に納得して来たからこそ、こんな人間になってしまったのだろう。

まあ、それで困ったことはとりあえずないから、良いや。

思いつつ、自分の部屋に戻った。部屋には物置と化した勉強机の引き出しから催涙スプレーを取り出してポケットへ。昔から弱虫だったぼくだけれど、強くなる為の努力ではなく、弱いままで大丈夫な方法を考えたのだ。だから何にも変わらない。

全ての教材を詰め込んだ鞄。持ち上げて家を出る。自転車には乗らない。というか乗れない。だから、高校は家から一番近いところでとても助かっている。歩いて十分。すごく楽。

その校門くぐる。広いがあまり綺麗ではない校舎。人がやたらと集まっているところがある。そこに貼られた紙に向かい、何やら隣

り合って騒ぐ男女一組。
　女の子の顔を見る。まあまあ上等。頬の肉の付き方が素晴らしい。ガラス球のような瞳、という表現が当てはまるけれど、すごく濁った灰色だ。表情、何かを誇示するような具合。新しい生活への不安と期待、それに伴う虚勢。初々しくてなんか腹立つ。幸せそうでとても苛付く。
　などと、万が一心の声を聞かれてしまっては、ぼくはおそらく、物理的な暴力にさえ晒されることになるだろう。我ながら激しく陰気な思考であった。
　ちょいとごめんよ。
　心の中で呟きながら、男の方の肩を抱く。すごい目で見られる。それはすごい目。何も言わず、男の肩を使って軽く跳躍。ぴょんぴょん跳ねる。紙に書かれた内容を頭に焼き付けて、自分の名前の位置を把握。それじゃあ行こうか一年二組。この校舎の、きっと二階にあるのだろう。
　文句を付けるような男の視線。ちょっと戸惑う。ぼくは臆病。おろおろ。どうしよ。男が口を開こうとして、そしてその視線を首ごとずらす。何があったか、ぼくもそれに習う。
振り返った先には妖精がいた。
なんて、あまりに陳腐な感性をしていると思う。
　困ったように人ごみから距離をとるおそらくは新入生の女の子。肩は小さく、手足は折れそうに細かった。肌は白磁よりはガラス。背は低め。大人しそうで、でも華もある印象で、僅かに怯えたような、清楚な表情をしていた。ふわりとして櫛の通りの良さそうな長髪を見て、ぼくは妄想する。アニメみたいな金髪だったら、どこかのお姫様みたいだろうな。
　美少女だった。男は目を奪われている。隣の女、その男に無表情な視線。怒ってるよりは嘲ってる具合。その隙にぼくは、男の視線から逃げた。
　クラス分けの表の前には多数の人。背伸びをして、表をちらちら

見る女の子に、ぼくは声をかけた。
「君の名前は？」
背中に何か感じる。何だろうと思いつつ女の子の様子を窺う。ちょっと怯えている。名前を訊かれたからというより、ぼくが寄って来たことの方だろう。分からなくもない、こんな見ず知らずの、どんな下品なことを考えているのかもしれない輩がひしめく状況で、とびきり陰気そうなのが歩いて来たのだから。
女の子は柔らかな笑顔を見せた。怯えの表情を残したまま浮かべる、まったく純粋な笑顔である。それだけで、ぼくはひょっとしたらこの子は少し変わっているのかもしれないと、そんな風に思った。
「円居忍（まどいしのぶ）、です」
「それじゃあ二組だ」
きっと驚かれると思ったが、知っているものは仕方がない。少女は口先を少しとがらせただけで
「ありがとう」
そう言った彼女の表情に、驚きとかそういうものは含まれていなかった。何か考える素振りは見せたかもしれない。そうぼくが思ったのは、女の子に背中を向けて、脱兎の如く校舎に突撃している時だった。
言葉を声に出したのは、何ヶ月ぶりだっただろうか。そんなことを思いながら。

いつだったかは忘れた。でも、いつかこんな会話があったことを覚えている。
選択美術の授業。ぼくはぼくなりに活き活きと、楽しくイラストを描いていた。絵を描くのは好きである。ぼくにはそれしか取り得がないとも言える。だからこれだけはずっと好きでいて、これだけはずっとがんばって、将来はこれをして生きて行こうと、決めていた。
「ねぇ。あなたってオタクよね」

と、声をかけて来た女の子がいた。オタク、その言葉は何と無く知っていた。自分のことをそんな風に思ったことはなかったのだけれど、当時のぼくは今のぼくよりもさらにひねくれていたので、確かこんな風に応答した。

「ぼくに反論の権利は与えられないのだろう？」

女の子の背後で、とても楽しそうな笑い声が起こる。何がおかしいのだろうとおもったが、すぐにぼくがおかしいのだと気付いた。

「うんうんそうよ。与えられないわ。ところでさ、じゃあんた、アニメの女の子に欲情したりとかすんの？」

そんな下品なことを言うからには、この子はきっと下品な女の子なんだろうなぁとか、そんなことを思いながら、ぼくは答えた。

「しない」

「嘘。だって、こんな絵を描いているじゃない」

言って、女の子はぼくが描いていた絵を取り上げて、後ろのギャラリーに見せる。すごく愉快そうな笑い声がふたたび起こった。

ぼくが描いていたのは、駅を背景にした少女の漫画だった。頭の中に思い浮かんだものを、可能な限り忠実に、美しく表現したい。そう思ってずっと絵を描いて来たし、それをこんな絵、と言われると、あんまり良い気分にもならない。

「紙に描かれた女の子は、芸術だよ。愛するべき存在ではあっても、そこに白濁液を飛ばす行為は関係ないさ」

再び、背後で笑い声。どうも、ぼくが何かを言うと、それだけで周囲は笑うようになっているのだろう。

「じゃああんたは、こういう子が、好きなんだ」

「君よりはね」

笑い声。ぼくを直接相手にしている女の子の笑いが、一番大きかった。

「それじゃあ。こんな風に、二次元の女の子みたいに可愛い子が実際にいたら、付き合いたいとか思うの？」

言いたいことは、何と無く分かった。

「いる訳ないよ」
と、ぼくが答えると、今までで一番大きな嘲りの笑い声が起こった。

どうしてこんな、ふつうなら思い出したくもないことを思い出したのかと言えば、記憶の中の女の子が予想したことが、ぼくの中で実際に起こったからである。
教室の真ん中の方の席になってしまったことにも困っているのか、体を縮こまらせておどおどとしている円居忍。その視線は机の下側、自分の膝のあたりに集中していて、周囲と目を合わそうともしない。
教室中を見渡せば、皆なかなかしっかりした奴らだった。新しい環境で友達を作ろうと、人に声をかけて、楽しいお喋りに興じている。
最初の頃は照れもあったのだろう。だが始業式も終わって、校舎の見学も終わり、高校生活も起動に乗り始めるのではないかという頃合。クラスが打ち解けるのも時間の問題だ。みんな明るくて、良いクラスだと、担任の先生は言っていたような気がする。
男の子は能力の高いのを、女の子は容姿の優れたのを、率先して自分達の集団に引き込みたがる傾向があるようだ。グループはいくつかあるのだから、自然、上位の軍団と下位の軍団ができる仕組みである。自分から仲間を作りにいけない人間でも、自分の席に座って媚びるような視線を周囲に振りまいていれば、レベルのあった誰かしら声をかけてくれなくもない、そういうルールだ。
ぼくのような最底辺に、誰からも声がかからないのは当たり前のことだ。だがしかし、円居さんに一切声がかからないのは、どういう訳だろう？
少し考えて、彼女が周囲をまったく見ていないからだと、ぼくは悟る。自分の手の中で、おそらくは携帯電話を懸命に操作しているのだった。
ところで。ぼくは携帯電話というのが好きではない。何故なら、

誰もが使っているものを、ぼくが誰もと同じくらい上手く扱えたことはないからだ。仕事で息子に顔をあわせる時間も無い母が、心配だからとぼくに携帯電話を持たせたがっているのだが、そんな理由で拒否をしている。

もちろん、そんなコンプレックスに塗れた理由を、この口で言うのははばかられるところ。なので、母さんにはいつもこう言っている。

「外にいる時まで、他人と繋がっていたくない」

すごい皮肉だと自分で思う。

円居さんは、ぼくとは違った思想の持ち主らしい。外にいる時どころか、クラスが始まっても、遠くの友人と携帯電話で繋がっている。白くて美しい指を、ボタンの上に這わせて、少しぎこちない感じに操作する彼女は、どこか真剣な表情をしていた。

「ねぇ。いつもケータイ弄ってるわね、あんた」

等と言いながら、円居さんに声をかけた人がいた。なんだか、攻撃的な声色である。

こういう時、実行者の後ろには一人か二人くらいは、ギャラリーと言うか協力者がいるもので、その時もそうだった。入学式の時の、隣り合った男女の片割れを先頭に、クラスでもおそらくは上位のグループであろう二人が後ろに引っ付いていた。

「うん」

円居さんは、ちょっぴり能天気な感じに答えたのだった。顔をあげて、声をかけて来てくれたことを喜ばしく思うように、綺麗に微笑んでいる。

ちょっとだけ、見るに怖い類の笑顔だな、とぼくは感じた。

「何を見ているの？」

「ごめんなさい。人に教えたくないの」

おずおずと、そう答える。少女達は三人で顔をあわせて、何も言わないまま、先頭の人物が円居さんから携帯電話を取り上げた。あまり印象の良い行いではないな、とぼくは思った。

うっ、と、少女達の表情が歪む。「返して下さい」と、細っこい手を上げる円居さんに、「気持ち悪いよ！」少女は怒鳴るように言って、教室を出た。

「……困ったなぁ」

残念そうな顔をして、円居さんはそのまま席に座っていた。手元から携帯電話が失われたことを、憂えているのだ。だが、少女達を追い駆けることを、円居さんはしなかった。

きっと、いつか返しに来てくれるって、心の底から信じ込んでいるからなのだろう。

やっぱり変わった子だな、とぼくは思った。

そして、その変わった子のことが、ぼくは少しばかり気になり始めてしまったのであった。

いやもう。言ってみればそれは、低俗極まりない情欲に過ぎない。端的に今のぼくの精神状態を説明してしまえば、クラスにかわいい子がいて、その子に好意のようなものを抱いている、ということである。

かつて、美術室で言われたことを思い出したのは、そういう思考を辿ってのことだ。だが実際問題、仮に運良く女の子と劇的な出会いをしたとして、そのまま女の子と仲良くなれる訳でもない。そんなみじめなぼくに対する嫌味が、彼女のあの言葉だったのである。

ぼくを一人の男としてみるに当たって、魅力となる点はおおよそ皆無だ。頭脳面、教養面、思想面においておそらく平均を大きく下回り、人格面では最底辺を這っている。そんなぼくが彼女を所有する資格があるとしたら、それはもう、ぼくが彼女を愛することくらいしか、ないのである。

そう思って、彼女の絵を描いてみたりすることもあった。

誰が見てもそれは、あまり健康な行為ではない。だがしかし、ぼくは自分の心の中に芽生えた何か美しいものを、とりあえず捻出しないと気がすまない人間なのだった。そうして紙の上に表示された

その美しいものを、ぼくは改めて堪能し、満足する。彼女の絵を描くに当たって二晩ほど徹夜してしまったが、それでも相応しいものが出来上がらなくて残念だ。

だがしかし、それはあくまでも芸術でしかなかった。ぼくが彼女に対して抱いたのは、唯一美しいものに対する支配欲程度だったということが、悲しいことに、証明されてしまったことになる。例えば、ぼくに彼女のことを愛したいとか、彼女にぼくのことを愛して欲しいとか、そんなロマンチックな感情は、皆無だった。

などというと、自分のことがよっぽど夢見がちというか、頭の沸いた人間のように思えて来てしまう。

結局。あれこれ考えた結果、いいや考える前から、ぼくは彼女に対して積極的な行動を起こすのを、放棄していた。どうしてなのかと言えば、面倒臭いというか、単に勇気が無いからなのだが。

あんな優れた造型の美少女だ。

ある画像掲示板に掲載された、ある女子高生の絵。あれに付いていたコメントに『ちょっと告白して来る』という、下品なセンスの利いた一文があった。きっと、そんな調子で彼女に声をかける男がいることだろう。それをどうするかは彼女の勝手だが、少なくとも、ぼくを受け入れて、他を拒絶するということは、ありえないのだし。

自分自身がどこまでゴミ虫なのか。それを知っていることだけが利点の根暗少年は、潔く諦めて自分の世界にでも閉じこもるべき。

そういうことだ。

「ふざけんな！」

と、ぼくは廊下の壁を蹴り飛ばした。

「ふざけんな。ふざけんな。ふざけんな」

壁でもどこでも、力の限り蹴っ飛ばしたりしたらかなり痛いことを知った。

「ちくしょう。ちくしょう」

別段、何が悔しいという訳でもない。ただ何と無く、頭に血が上った。

そんなある種、建設的理由無く暴力を行使する迷惑さんのようなことを思いつつ、ぼくはひたすらに壁を蹴り続けた。痛みが気にならない訳ではない。きっと、足が痛むから、壁を蹴るのだろう。

自分にできることは何だろう？

こんな自分にでも、できることは何だろう。

結論することもせず、ぼくは不器用な足取りで廊下を走り始めた。

たどり着いたのは音楽室。おそらくここだろうと当たりは付いていた。

綺麗に並んだ机と椅子。その中に、秩序の崩れた空間を発見して、ぼくは一人でほくそ笑む。それは誰かしら数人がそこで遊んでいた後のように見える。

無造作に近接しているそれらの机を少し調べてやると、真白い携帯電話を発見する。レゴブロックの形をしたストラップが一つだけぶら下がっている。本人が購入したものではなく、誰かからの貰い物であると予想。こんな使い込まれた携帯電話に、ストラップが一つだけというのは少し変だ。レゴが大好きなのだというのなら別だが。

携帯電話を開いて眺める。待ち受け画面には、ぼくよりも少し年上程度の少年が指を組んで佇んだ姿があった。とりとめて特徴の無い代わりに、造型的な欠点が皆無な、血の凍るような美少年。そしてこれの撮影者はちょっとばかり、不器用な人物だろう。

この少年について考察を進めることは、今はしない。あまりするべきでもないだろう。

携帯電話など手に取ったことは一度もないので、まずは思いつくままにボタンを押してみるしかない。そう思い、がちゃがちゃしているとどういう訳かオセロのゲーム画面が現れた。記録を見る。上級編に四回、勝利している。勝率は三十パーセント未満とあまりやりこんでいる様子は無いが、敵機全滅回数が一回だけ、あった。これは本人だろうか。

せっかくなのでやってみる。相手になってくれる人もおらず、オセロなんてルールを知っているだけでやったことはなかったが、上級編を選択。……勝利。

「早く帰りなさい」

背後から先生の声がかかった。ぼくは振り向かずに「分かりました」と返事を返す。音楽室は鍵が壊れているので、時々見周りの人が来るのだ。

さて。こんな無駄なことをやっていることもない。ぼくは操作を再開する。大分、慣れて来て、ぼくは画像が入ったフォルダを開くことに成功した。

中学の時のものだろうか、テストの範囲表を撮影したものが残っている他は、『お兄ちゃん』というタイトルのフォルダがあるだけだった。これは一体なんぞ、思いつつフォルダを開く。おびただしいほどの画像があった。

おびただしい、と表現するのが正しい。何故なら、飛び出したのはそれらの画像が百足や蛇や猫の、虐殺された死体だったからだ。そうでもなければ、たくさんの、とかの表現を頭の中でぼくは好んで使う。おびただしい、というと縁起の悪い物がひしめいている印象になってしまうからだ。

ただその画像フォルダは実際に気色の悪い物がいくつも、本当にいくつも並んでいたので、ぼくは相当に驚いた。気味の悪さ、それだけを考えて撮影されたそれら。首から腰までの皮膚を刃物で割って、内臓を曝け出しにした猫。頭から尾までの皮がはがれ、その先端に釘を打ち付けられてぶら下がる蛇。思い付くかどうかは別として、実行するには少々の勇気が必要だろう。

それらの撮影にはある程度技術が感じられたので、待ち受け画面の少年を撮影したのとは、また違う人物の写真であることが分かる。そこで、ぼくはいくつかの仮説を立てた。

１　待ち受け画面は持ち主が撮影したもの。これらの画像は、『お兄ちゃん』という人物から送られて来たもの。

２　待ち受け画面は持ち主以外の誰かが撮影したもの。これらの画像は、持ち主が『お兄ちゃん』という人物に送る予定、既に送られたもの。

３　待ち受け画面は持ち主が撮影したもの。これらの画像は、技術の上がった持ち主が撮影したもので、『お兄ちゃん』という人物に送る予定、既に送られたもの。

４　待ち受け画面は持ち主以外の誰かが撮影したもの。これらの画像は、『お兄ちゃん』という人物から送られて来たもの。

何れの場合も、この『お兄ちゃん』という人物について考察する必要がありそうだ。１と４の場合、その『お兄ちゃん』という人物は、持ち主に対して画像を消さないように強制力を発動している可能性がある。番外一つ、『お兄ちゃん』が持ち主の携帯電話でこれらの写真を撮影していることもありうるが。これはおもしろそうだ。

だがしかし、もう少しで下校時間を告げるチャイムも鳴り出そう。ぼくはポケットにその携帯電話を入れたまま、音楽室を出た。

円居忍がいた。

彼女は例によって困ったような顔をしていた。そこに疲れだとか、或いは悲しさだとか、もっと言えば憎しみだとかそういうものが一切存在していないのが彼女らしい。ぼくの隣を節目がちに通り過ぎ、おそらくは音楽室に入ろうとする円居さんに、ぼくは後ろから声をかけた。

「円居さん」

振り向いた円居さんは、どこかしら怯えていた。けれど同時にぼくに対する好意というか、声をかけられたことへの喜びと言うか、そういったものも覗かせる。

「何ですか？」

「これは君のだろう？」

言って、白い携帯電話を手渡す。円居さんは最初、驚いたような顔をした。それがぼくには、ちょっと意外だった。

「ありがとう」

笑顔。
今までに見たどの笑顔とも、何の相違点も見られない純粋な、美しい笑み。
ぼくは何も答えずに、彼女の脇を通り抜けた。ふつうなら恩義着せがましく「どういたしまして」とでも答えておくところなのだけれど、彼女の携帯電話を探した動機が動機だったので、それはやめた。
「あの。ごめんなさい」
背後から声がかかる。
ぼくは予想した。どこで見付けたの、に始まる様々な質問がぼくに浴びせられることになるだろう。
「何かお礼がしたいのだけれど」
絵のモデルになってくれ。
咄嗟にそう言い返しそうになるのを、ぼくは自粛して
「保留しておいてくれ」
と返した。この場合、お礼を受けるのは正当ではないと思ったのだ。しかし同時に、彼女に何かしてもらえる権利を失うことは、恐ろしい。つまり卑怯者の言い分だ。
「分かった」
言って、彼女はぼくの後ろを歩き始めた。そりゃあ、彼女も靴箱へ向かっていることになるのだから、当たり前だろう。
靴箱に至るまで、会話はなかった。
「それじゃあ。さようなら」
円居さんは急いだように、ぎこちなく走り出す。なので、ぼくはその背中を付けることができなかった。

その日の早朝、ちょっとしたハプニングがあった。教室にあぶらむしが出現したのである。つまりごきぶりだ。
きゃーきゃーと、怯えているのか喜んでいるのか分からない少女達は、どこか楽しげにそいつから逃げ惑う。せっかくだから良いと

ころを見せれば良いのに、あぶらむしを潰そうとする男子はいない。と、教室を見回すと三人の女の子の他には、あぶらむししか教室にいなかった。

まったく、どうしたってあのあぶらむしは人間の前に姿を表したのだろう。人間の前に現れるからには、汚物そのものに向けられる視線と歓迎、つまるところ姿を捉えることすらしてくれずに逃げ惑われた挙句、有志によってスリッパでデストロイ、ティッシュやノートの切れ端に包まれてトイレへ埋葬、または箒などで乱雑に外に履き出されるというそんな憂き目にあうことは必至なのだ。

あぶらむしは教室の床を凄まじいスピードで這い回り、高校生達に不愉快と喧騒を撒き散らした挙句、何らかのシンパシーを感じてくれたのかどうかは分からないが、ぼくの足元に向けて走って来た。ぼくはその姿をぼんやりと見詰めつつ、円居さんの携帯電話にはたしてどれくらい、こいつの写真があっただろうか。そう言えば彼女、まだ学校に来ていないなと、そんなことを考えていた。

「早く捕まえて！」

そんな声が聞こえて、ぼくの顔にポケットティッシュがぶち当たった。足元のゴキブリを処分しろ、とそう言いたいのだろう。

「可哀想だとは、思わないのかい？」

ぼくが言った。一瞬、教室の空気が凍り付く。

何を言っているのだこいつは、とでも言った具合だ。何故なら、彼女らにとって、あぶらむしは生きている価値のない動物だからである。

「分かったよ」

醜いものを処分する役割はこの根暗少年が引き受けるとしよう。でかいあぶらむしをとりあえずティッシュで捕獲する。本当は素手でやった方が早いのだが、人前でそんなことをすれば大いに引かれること間違いない。それくらいの理性的判断はぼくには行なえる。

さてこいつを握り殺して良いものだろうか。生きる価値がない、とは言ったところで、こいつが死んで悲しむ奴がいるかはともかく、

喜ぶ奴は教室中にたくさんいる。それはつまり、それだけこいつが価値のある生命だということにならないだろうか。ぼくのように、死のうが生きようが誰もなんとも思わない奴と比べれば。

「待って」

と、声がかかった。

「それ、この中入れてくれない」

にやにやと、性格の悪い笑みを浮かべる少女の姿があった。……昨日、円居さんと携帯電話で騒動があった、彼女である。後ろには昨日と同じように、二人の女子が愉快そうに立っている。

彼女は椅子を引いて、机の中を指差している。それは円居さんの机だった。

あぶらむしが汚いのは、あぶらむしの所為じゃない。人間が出すゴミの中でしか生きられない彼らは、人間が出すゴミの中で汚れ、そしてその人間に嫌われる。

この場合、悪いのはもちろんあぶらむしである。人間に嫌われたくないなら、もっと清潔なところで生活すれば良いじゃないか。それができないのであれば、あぶらむしは人間との共存は無理。

言い訳だ。

ぼくは自分に向かってそう言った。

と、教室の扉が開いた。

既に話を聞かされていた人間は、皆一様に円居さんの方を見て笑った。その笑いに含まれるものが分からないでもあるまい。円居さんは一瞬、呆けたように目を丸くしたが、自分の方を見る彼女らに優しく笑いかけた。この子は良い子なんだけれど、人間として持っているべきものを、ひょっとしたらどこかに落っことしているかもしれない。

何と言うか、生まれてから一度も人と会わされたことが無いような。

「おい」

自分の席に座ろうとしている円居さんを見ながら、いじめっ子が

ぼくにそう言って目配せした。ぼくは首をかしげながら、円居さんの隣に歩く。
「おはよう」
円居さんの笑顔。
このクラスの、他の誰に向けるものよりも、彼女の人間らしいところが詰まった表情だった。
その時ぼくは、二つのことを決意した。
ぼくの態度が解せないのか、首を傾げる円居さん。ぼくは能面みたいな顔のまま、机の中に手を突っ込む。
「……？　何ですか？」
敬語だった。
ぼくは笑った。
さようなら。ありがとう。
言わなかった。ぼくは自分の席に戻る。おろおろとぼくの方を見ながら、その拒絶を受け取ったのか、円居さんは俯きがちに自分の席に座り、机の中を見る。
「……っ！」
自分の机の中から出て来たその生命体に、絶句する円居さん。堪え切れずに湧き出すいじめっ子連中。
自己嫌悪とか。
罪悪感とか。
そういうことをまったく感じなかった訳ではない。それどころか、ぼくは傲慢にも、周囲から受ける侮蔑の視線に対する怯えや悲しみと言ったものも、感じていたのだった。けれども、そういうものは心のどこかに蓄積されて、後から思い出して首を括りたくなるような、首を括る気力を作ってくれるような、そんな感情でしかない。
今のぼくの心の中を支配していたのは、生きて来て一度も味わったことのない、このゴミ虫には相応しくないほどに人間らしからぬ、真っ当な感傷。
失恋だった。

ぼくの頭の中は、いつも無意味なことをごちゃごちゃ考えているできの良くない頭は、驚く程に空虚に満ちていた。ただ、脳味噌が溶けて体の中に雫と滴るような、絶望的な無力感だけがあった。
それでも視線は円居さんの方にあった。
どうしてだろう。そんなの、卑怯者のぼくがやることじゃない。目を逸らして、自分の世界に逃避していたいのだ、本当は。
蒼い顔をして、円居さんはぼくの方を見ている。
どうして目を逸らせないのか。自分でも分からなかった。
「良いですよ」
……。
……今、何て言った？
円居さんはそれっきり何も言わない。こっちを見ようともしない。ただ机の中に手を突っ込んで、自愛に満ちた笑みを浮かべたと思うと、手を引き出して、それを見詰めた。
教室の空気が変わる。
それは異常な状況だった。可憐な少女の白い指先に、醜い醜いあぶらむしが乗っかっている。もっとも奸悪な理由で自分達種族を殺す人間という生き物の指先だというのに、あぶらむしはまるで母の手の中にあるように、じゃれるように触覚を動かした。
……大変だったね。
……いいよ。慣れてるから。
あぶらむしを指先に乗っけたまま、円居さんは教室を出る。その姿は途方もなく高貴で、本物のお姫様みたいだった。途中、扉の前に立っていた少年が、悲鳴を提げそうに後退る。
騒然とする教室。何てこった、と声が上がる。何々？　と途中で入って来た生徒に説明する者がいる。ホームルームの時間になって、教師に説明する者がいる。
気が付けば、ぼくは机に突っ伏して泣いていた。
……ゴキブリ手に乗っけて、階段降りていた。

……外の換気扇のあたりで見た。
……先生も引いていた。
……ありえないわ。
……ねぇ。あいつのケータイってさ。
……気持ち悪い。
……なんて奴だ。
机に突っ伏していると、聞こえて来るのはそんな言葉だった。性別も立場も関係なく、どこからでも聞こえて来るその話題。人達が、ここまでこういうのが好きだとは思っていなかった。
それからもいじめっ子連中は、円居さんの昼食であるサプリメントを踏み潰したり、髪の毛を引っ張ったり、やりたい放題やっていた。
最早、それを見咎める人間がいないことを、知っているからだろう。ただ、円居忍に注がれる侮蔑の視線が、程度が違えど自分達にも同じように注がれていることには、気付かないらしい。
小学生の頃から、この辺の匙加減は変わっていない。いくら常識を身に付けたって、いくら大人になったって、やりたいことはやりたいし、正当化する理由を見つけたらやってしまう。
「こっち来いよ」
言って、いじめっ子の一人が円居さんの髪を引っ張った。円居さんは寂しそうな顔をして、席を立つ。そのままどこかへ連行されて行く。
メモを持って出かける。
数える中庭の茂みの中で、トイレの窓から、ぼくはその様子を覗き込む。取り囲むように悪辣な言葉を吐き出して、背中に四回、顔にも一回。やることがいちいち酷すぎる、円居のさん容姿に対する嫉妬もあるのか？　そこに男がやって来た。助けるでもなく、一緒に笑っている。ひょっとしてこいつは、入学式の日にぼくの前に現れた奴ではなかろうか。いじめっ子のボーイフレンド。踏み台とかにはちょうど良さそうな、背の高い男。

男が暴力を加わる。これは酷い、後から目立つ場所に傷を加えることも躊躇しない。バカだ。特に細かく表記する。痛みに顔を顰め、悲しそうで、寂しそうな顔をする彼女を見ながら、男は楽しそうだ。すごく、楽しそうだ。

何をどうされたら、どれくらい痛いのか、こいつらは分かっているのだろうか。人に殴られて、痛いという感覚を、彼らはどれくらい理解しているのだろうか。

理解していて、茂みから出られないぼくは、いったいどれくらいの下種なんだろうか。

言い聞かせる。

ぼくにもできることがあるのだと。だからぼくは、数時間も経ったにも関わらず、ここでこうして生きながらえているのだから。

……だけれど。

あの時の円居さんの言葉を思い出す。何度となく、思い出してしまう。そんな自分は、はたして本当に、決着を付けられている訳ではないのだろう。

だから。これから、少しずつ、じわじわと、絶望が浸透していくのだろうなと思った。

そして、その翌日の朝のことだ。

昨日一晩中、自宅で、学校で、ゴミ置き場で、或いはと思い公園で。そこのゴミ箱の奥に、何でか知らないがいるわいるわ。

合計で四十四匹。わる三。十四から十五匹。

ちょっと足りないと思ったので、途中から百足やカナブンも捕らえていった。この際、小動物なら何でも一緒だろう。それらの入った虫篭を、いじめっ子の下駄箱の中に無造作に放り込む。

食べ物があった方が良いだろうと思って、スリッパの上にはビスケットを砕いておいた。温かい方が良いだろうと思って、季節外れのカイロまで用意した。靴箱は蓋が閉まるので、大丈夫だと思った。

驚愕し、ものすごい形相で悲鳴をあげ、泣き出すいじめっ子の仲

間達を階段の踊り場で確認しつつ、ぼくは考えていた。カイロはちょっと余計と言うか、虫達にとってありがた迷惑な部分もあったかもしれない。

色々な種類の虫に食われて、ぼくの手はすっかり腫れてしまっていた。これで自身に対する制裁行為は良いかな、と自分には甘めに結論を下す。

それから、円居さんに暴力を振るった男のところに行った。ぼくは自分の非力を知っていたので、ポケットにはホームセンターで買った刃物も加えておいた。もともと人を攻撃する為のものではないから、使ってもきっと、大丈夫かな、とか思ったのである。

教室に行ってもいない。靴箱を調べたが、学校には来ていないらしい。なので街中、ぶらぶら探し回ってみると、そいつは一人でのこのこやって来た。校門で待ち伏せすればよかったなと、思った。男はぼくの方を見ると、気さくな、自分の犬でも見るような表情で近付いた。流石に刃物は奥の手だよなぁ。何かないかなと思いながら、老朽化して道端に転がったコンクリートブロックを持ち上げて、男の顔に叩き付けた。流石にこんなのは、ぼくでもやられたことないなぁと思いながら、顔のつぶれたその男を後はしこたま殴った。円居さんがこの男に何をされたか記したメモに従って、そのままやり返す計画だったのだけれど、すぐに忘れてしまった。幸いにして、ぼくを止める人は一人もいなかったので、始業チャイムが鳴る時間が過ぎても、それを続けることができた。

「……止めろ。そいつ死ぬぞ」

言いながら表れたのは、何故かパジャマ姿の、ぼくより背の高い女の子。不摂生な髪をしているけれど、それでも綺麗な、そんな同い年くらいの子だった。

「ああ。やめるよ」

言って、しこたま蹴り付けていたその頭から離れる。女の子は息を荒げて、ぼくの方を睨むように見る。

「おまえが、姫の言ってた例の……ええと何ていったっけ？　お

まえ名前何ていうんだ？」
「教えたくないよ。ぼくは自分の名前が嫌いなんだ。君は？」
「あたしも嫌いだよ。自分の名前」
「ふうん。それで、何ていうの？」
女の子は面食らったように頭をかいた。「変な奴だな」
「とにかく。おまえちゃんと学校行ってるんだろう？　そいつはあたしがやったことにするから。もうそんなこと、やめろよ。おまえ以外誰もそんなこと、望まないんだから」
「やだ。もっと殴りたい奴がいる」
反射的に、何と無くそう答えると、女の子は心底疑問に思っているような表情で
「本気で言ってるのか？　おまえ」
そう、無邪気に問い掛けてきた。
ぼくは少し怯んで、俯きがちに首肯した。女の子は考え込むように首を捻ると、妙案を思いついたように
「じゃああたしがやっといてやるから！」
身を乗り出すようにしてそう主張した。
「本当？」
「本当だ」
「なら良いよ。……それで、君の名前は？」
再び面食らったように、女の子は後退って、それから
「久重里（くじゅうり）……久重里シノブっつーんだ」
と、歯切れも悪く言った。

二章

何だよその名前。

自分で嫌う要素が見付からない。あまり頭の良さそうな子ではなかったから、ひょっとしたら苗字の漢字が書けないのかもしれないとか考えてほくそえむ。流石にそれはないか。

どことなく円居さんと関係のありそうな子だったし、しのぶという下の名前は咄嗟の嘘だろう。咄嗟に出たのだとしたら無理があるので、久重里は本当の苗字。名前の方に何かあるに違いないとか思いつつ、いい加減に考察を進める。

すぐにやめた。

分かる訳がない。

円居さんとしのぶちゃんを並べて絵を描いていると朝になったので、ぼくはすぐに支度を始めた。とてもかったるい。昨日はちょっと、ひさしぶりに激しい運動をしすぎたのだろう。

後のことはやっておいてくれると言ったしのぶちゃんなのだけれど、ぼくが指定したいじめっ子女子達を、ちゃんと後ろからぶん殴ってくれたらしい。そんな噂を耳にした。ちなみに、下駄箱の中の虫達については、それは円居さん本人の仕業と言うことになったらしい。「あれやったの、おまえ？」と誰かに訊かれて、「へ？　……ああ、うん。そうです」と、本人が歯切れ悪く答えていたのだから確かだ。

教室での彼女のイメージは完全に固定されてしまったことだろう。それについてはすまないと思うのだけれど、あえて自分から名乗り出すことはしなかった。円居さんが自分から復讐したということになれば、いじめっ子集団もこれ以上円居さんに手は出しにくくなっただろうから。

これでぼくの願いの内、半分は叶えられたことになる。

とりあえず、教室の真ん中の席で、周囲に遠慮するように携帯電

話を操作する円居さんの、彼女なりに平和な姿が見られて良かった。
綺麗な顔にはまだ、痣や擦り傷が剥き出しで。白い手足も観察すれば傷だらけなのだけれど。まったく下手糞なやり方だと思う。ぼくが小学生の時のいじめっ子の方が、まだしも上手かったぞ。
あれと同じだけの痛みを、いじめっ子全員に味わわせてあげたいのだけれど、しのぶちゃんとの約束があるのでそうもいかない。
ぼくがしたことは、円居さんを守る行為ではなかった。それは復讐であり、言い換えれば子供の仕返しだ。もっと単純に言うなれば、腹が立って殴りかかったという、それだけに過ぎない。
図らずも彼女が陰湿ないじめから解放されたのであれば、それはそれで良いことだ。
やっぱり、彼女は広い教室に一人きりなのだけれど。まあ、あの子のことだから。ぼくが何をしようと、同じような状態になったともいえる訳だけれど。結果として、ぼくが彼女に孤独を与えたことに変わりはない。
大きな集団の中で感じる孤独ほど、つらい孤独はないのだから。それを彼女に与えてしまった、ぼくはきっと、やっぱり、彼女に一番害を成した人間だ。
そして、そのぼくが教室の中でどのようなポジションに落ち着いたのかと言うと、クラスの小間使いだ。
「パン買って来て」と言われればおつりをごまかし、「ジュースを買って来て」と言われれば缶をへこませて持って来る。そのたび殴られ罵られ、そんな無能な使いっぱしり。
しかし連中も、人をバカにしたら、手痛いしっぺ返しが待っているかもしれないことを、円居さんの件で学んでも良さそうなものである。
まあ、ぼくに限ってそんなことはない。できるのはただの陰湿な仕返しだ。
その日、女の子達に言われて数点のパンとジュースを買いにいかされていた帰りだった。ぼくは閉まっていた家庭科室の窓を壊して、

中に侵入した。それから床に落ちていた裁縫針をいくつも拾い上げ、レーズンパンの中に次々刺し込む。危険だが、針の頭は露骨に並んで見えているので、これを飲み込んだりするのはよほどの間抜けだ。
我ながら、根暗で陰気で後先考えない仕返し行為だ。まったく、自分で自分に呆れてしまう。
それから外に出て、中庭に煙草の吸殻を発見する。拾い上げて、ペットボトルの中にたっぷり粉を落とす。そして何度か振る。こっちは一口くらい飲んでもらおうというのだ。ふふふ、楽しみだぞ。
「何をしているんですか？」
後ろから声がかかって、小心者のぼくはそれに竦み上がった。
「……円居さん？」
昼休みは一人で部屋でサプリメントを食べている彼女が、そうしてこんなところにいるのだろう。考えて、それからぼくは彼女から目を逸らした。
ぼくは彼女に、失恋をしたのだ。
そう自分に言い聞かせる。
「どうして、目を逸らすんですか？」
そう訊かれた。ぼくは逃げ出した。
「待ってください！」
等と言っても、逃げ足はぼくは速いつもりだ。がんばって走る。勝てそうな気がする。やった、などと思っていると、何もないところで足を取られて転んだ。
間抜けすぎる。きっと焦っていたのだろう。
「大丈夫ですか？」
心配そうにぼくを抱き起こす円居さん。頬は赤くって息を切らしている。可愛いなぁ、ものすごく。本当に目に毒だ。
そんな状況に、彼女の息遣いに、ぼくのことを思いやるその行動に、ぼくの胸は高鳴った。そして、ぼくは本当にこの子が好きなんだなぁと、そんな当たり前のことを思う。
すると途端に、情けない涙が溢れて来た。

「どうして、泣くんですか？」
疑問と、自分にどうにかできないか、という純粋な好意の詰まったその声。
きっと彼女は、泣いている人を見ると、誰にでもこんな言葉をかけるのだろう。それがどれだけ傲慢なことなのか、この無邪気な彼女には分からない。
でも、良いのだ。
それが円居忍という、ぼくの好きな女の子なのだ。
この子のことを、ぼくは世界で一番好きなのだ。一番好きなこの子のことで、失敗してしまったのだ。
「転んだから」
ぼくは答えた。
「嘘です」
円居さんは言った。
「嘘を付くのは良いの。それが、あなたの為になるんだったら。でも、偽っている自分が分からなかったら、あなたはきっと、堕ち続けるだけよ」
その言葉に、余計に涙が溢れた。
君のことが好きだ、と、言いたかった。
けれどそれは、失恋だとか、何だとか、そんなことを考える以前に、ぼくには絶対に言えない、言っちゃいけないことで。
ぼくは泣きながら、赤子のように口にした。
「ぼくは君に、酷いことをした」
「そうです」
円居さんは頷いた。
「だから。わたしを見ているのが、つらいんですか？」
「つらいよ」
だから逃げ出した。
「わたしは赦すと言いました。伝わらなかったのなら、もう一度言います。あなたは、悪いことをしたけれど、わたしはそんなの、

気にしてないよ。赦してあげる。だって、あなたは赦されるべき人だもの」
「ダメなんだ」
そんなことを言うから、ダメなんだ。
「嬉しくないんですか？」
心からの疑問。
そう、この子はこういう子なのだ。そしてこの場合、おかしいのはぼくの方。
「嬉しいよ」
「だったら。その嬉しいのを受け入れましょう。嬉しいことから逃げちゃダメ、戦うのは一番ダメ。どんなことでも、受け入れて、好きになるの」
「君はそうして、痛いことも、苦しいことも、受け入れているのかい？」
「はい」
円居さんは、どこか物憂げな表情で答えた。
「憎んでいないのか？　君にあんな仕打ちをした連中、嘲った連中、救わなかった連中。このぼくを、一瞬でも憎んでいないのか？」
「……良く、変わってる、って言われるの」
頷いてからそう言った表情は、どこか寂しげであった。
「おまえは人間のできそこないだって、そこまで言われることもある。でも、わたしは誰のことも憎みたくないし、嫌いたくない。だって、皆が皆を好きな方が、幸せ。そうしょう？」
「……そうだね」
それはきっと、正しすぎる程正しいことだ。
「でも。悪い感情は自然に沸いて来るものさ。君をいじめた奴らも、ぼくも、心の中にそういうのを発生させる、制御の利かない装置を持っている」
「悲観は自然的です」
円居さんの表情が明るくなる。

「けど、楽観は意思的なもの。笑おうと思えば、どんな時でも、笑えるよ。開道君」
お花畑のような、なんて皮肉を込めて表現したくなるような、そんな円居さんの笑顔だった。
「……ねぇ。円居さん」
「何ですか？」
ぼくはへらへら笑いながら言った。
「苗字嫌いだから、呼ばないでくれない？」
「うん。分かったよ」
そう言った円居さんの表情は、今までで一番魅力的だった。

「ところでさ。あのいじめっ子連中が君の携帯電話覗き込んで、不愉快な顔をしていたけれど。あれは何だったの？」
「お兄ちゃんが、虫とか殺したりした画像を時々送ってくるんだ。それを見られたんだと思う」
何て兄貴だよ。
「つまり。パターン1が正解か」
「パターン1？」
「気にしないで。それで、その画像はやっぱり削除している訳だ」
「ううん。せっかくわたしに送ってくれるからには、意味があると思うの。だから、削除なんかしません。お兄ちゃんに怒られるのも嫌だし、ちゃんと一つずつ見てるよ」
さいですか。
「そのお兄ちゃん、というのはどんな人物？」
「見ますか？」
携帯電話を取りだす円居さん。写真、あるんだ。
「是非に」
「すっごく格好良いですよ」
自慢の兄ということらしい。待ち受け画面に設定されていた。
どんなブラコンだ。

これはこれでジェラシー。なんて、何言ってんだ俺。
「確かに綺麗な人だね。君に似ているかも知れない」
最初に見た時、気付いているべきだった。
「わたしと違って、すっごくできが良いんです。学校は県で一番良いところで、生徒会長で、運動もできて」
それはすごい。その写真に唾でも吐いてやりたいほどだ。
などと、円居さんと楽しくお喋りができるのも、席替えの結果隣同士の席になれたからに他ならない。
席替えの際、担任の先生は生徒の自主性を尊重したいとか頭の沸いたことを言い出したので、生徒は好きな人同士で同じ席になろうとがんばった。実力者が無言のまま、そうでないものから席を取り上げる、という図式である。そのあたり、このクラスの粗野なところが現れている。
その中で、ぼくは元の位置を絶対に譲らないぞと、皆から文句を言われながら岩のように構えていた。人に言われて移動なんぞしたところで、行った先でまたしても変なところに飛ばされることになるのはやむをえない。
嫌なことは嫌だという。円居さんから教わったことである。
でもその円居さんと言えば、誰かに言われて、或いは言われる前から席を移動させ続ける。自分の希望というのも、これと言ってないのだろう。あったとしても、友達と一緒にいたいという人達の邪魔をしてまで、通すわがままではない訳だ。
そしてもちろん、好き好んでぼくの周りに集まる人もいない。せっかく与えられた使い走りの役割も、飲み水を全て泥に変えたり、サラダに雑草を混ぜたりなどの気の利いたサービスも通じず、残念なことにクビになってしまった。
たとえ最後尾の席であっても、他があるならぼくの隣になど来たくはないのだろうか、知らないが。円居さんは奇跡的に、或いは必然的に、ぼくの隣の窓際最後尾の席に腰をかけることになった。ぼくにとっては、一晩中神に感謝したいくらいの幸運だと言える。

サプリメントをぼりぼりと、リスのように頬に押し込みながら食べる円居さんを観察しながら、ぼくは至福の気分であった。この子、食べているところを人に見られたら、その隙に殺されると思っていそう。きょろきょろと、少し歩くたびに首を捻って周囲を見まわしたり、この子、ぼくと同じか、それ以上に周囲に怯える仕草が多いんだよな。

「何を考えているの？」

おずおずと声をかけてくる円居さん。ぼくは言葉を選ぶこともせずに、端的に答えた。

「どうしてサプリメントなの？」

「何でだろう？」

円居さんは首をかしげた。

すごい哲学的で難解な問いでもぶつけられたみたいな、そんな表情である。

「じゃあアユムさんは、どうしてそのお弁当を食べるの？」

ぼく糊弁当を覗き込みながら、神に疑問を返すような円居さん。

ちなみに、アユムさんというのはぼくが指定した呼称だ。苗字と同じく名前も大嫌いなのだが、ならば適切なあだ名も見付からず、結局名前で呼んでもらうことになったのは良いけれど、アユム君なんて呼ばれたら照れ臭い。そういう思考を辿った結果の、着陸地点がこの呼称。

「安くて美味い」

「でも。お惣菜なんて、体に悪くないですか？」

カロリーメイトよりマシだよ。

この子、自分のことには無頓着な癖、人への疑問はのびのび口にして来るんだよなぁ。その全てが相手を思いやったものだから、悪い印象は与えないのだけど。まあ、たまにえぐいことあるけどな。

「自分で料理ができる訳じゃないし、ぼくの為に料理の時間を割いてくれるような人も、いないからね」

こんなことを平気で言う。

だから友達できないんだよなぁ、と苦笑する。そんなぼくらのやり取りに、どこか気味悪がるように耳を傾けるクラスメイト達。何というか、この教室の隅っこだけ、すっかり隔離されてしまった具合だ。

円居さんには悪いことをしたと思う。この子、ちょっとマイペースで、空気の読めないところはあるかもしれないけれど、本音で向き合ってくれて、とても良い話し相手なのにな。本人がそう意識して立ち回れば、友達だって作れるだろう。

今となっては、手遅れか。

「それじゃあ。わたしが何か作って来ましょうか？」

おずおずと、そして無邪気に、円居さんはそう提案した。

ぼくはむせた。

それはもう。このまま死ぬんじゃないかと思うくらい、むせた。

「……何を言って？」

「わたし、料理はできるんです。実力は、その、誰も褒めてくれないけど」

僅かに卑屈な感じがする言い方だった。

いいや。この子が作ってくれるのであれば、日の丸弁当だろうが単三電池弁当だろうが、嬉々としていただけるつもりなのだけれど。

「良いのかい？」

いくら小心のぼくでも、これを逃すつもりにはなれない。

だってお弁当だよ！

円居さんの手作り弁当だよ！

「うん。アユムさんには、色々お世話になっているから」

「気持ちと弁当はいただく。でもそんなのは、全部帳消しにしておいてくれ」

全部自分でやったことだしなぁ。

つーかそもそも動機が不純。改めて御礼を言われたが、釈然としない感じがした。

ちなみに、円居さんの復讐をぼくが実行したことについては、彼

女自身から遠慮しがちに、やんわりとお説教を頂いている。あんな事態が起こるくらいならいじめ殺されても良かった、くらいに思っているらしく、そのあたりやっぱり「変わった子」そして「厄介な子」なのだった。

それでもこうして、ぼくと話すようになったことを、喜んでくれているのかもしれない。

流石にそれを訊く気にはなれないが。訊けば素直に答えてくれるだろうけれど。

「何か好きなもの、ありますか？」

「塩」

「分かりました」

綺麗に微笑む。

まかせておけ、と言った具合である。

ごはん。梅干。玉子焼き。ウインナー。鮭の塩焼き。ゴボウのサラダ。リンゴ。

あれ。ふつうだ。

などと思ってしまった自分を恥じる。弁当の半分塩でもう半分ごはんでもごはんの上半分塩で良く見ると下半分も塩でできていて弁当箱も塩でできていて、みたいなのを想像しなくもなかったのだが。

「どうですか？」

「うん。とても嬉しいよ、如何にもお弁当って感じで」

「食べてみてください」

ぼくは頷いて、小さく「いただきます」を口にしてから箸を取った。この挨拶は、サプリメントを食べる時円居さんがいつもそうしているので、ぼくもそうしていることである。

玉子焼き、しょっぱい味付け。塩を指定しただけある。流石にどれも塩で味付けられている訳ではあるまいと思いつつ、ウインナー。うん、粗挽きのコショウがかかってる。あらゆる食べ物の中で、こ

れが一番好きだったり。鮭、何かソースがかかってる。食す、美味。甘辛い味付けだ。ゴボウのサラダ。心配だった鮭との相性も万全。たんぱく質に馴れた口の中に、良い感じで利く。

「おいしいよ」

それにしても、幸せな気分だ。

生きてて良かったとか心の底からマジで思う。

なんか泣けてくる。

「良かった！」

円居さん、素晴らしい笑顔。

今までに一度も良い感想を貰ったことが無い、とでも言った具合だ。

「これから作って来ても良いですか？」

「それは、実に手間になると思うのだけれど」

「良いんです。毎日お兄ちゃんとお父さんの作ってますから、同じことです」

「へぇ」

それじゃあ今日は、あのお兄さんもぼくと同じものを食べていることになる訳だ。

何を考えているのかしら。しかしあの兄貴、随分な幸せ者である。今時ライトノベルでもなきゃ、妹に昼食の面倒を見てもらえる兄なんていない。

「それじゃあ。円居さん、自分の食事はどうするの？」

「わたしはこれがあるから」

カロリーメイトを取り出す円居さん。

今日はチョコレート味。四つの味でローテーションしているので、何と無くカレンダーに使える。

「……ああ、そう」

この弁当、勧めるべきかな。

いいや。彼女はぼくに作ってくれたのだし、これからも作ってくれるのなら、最初の日はぼく一人で食べるべきかな？

そのあたりは、ぼくにはちょっと分かんないんだけれど。
「ちなみに。今朝は何を食べたの？」
まさか、三食カロリーメイトということはあるまい。
「玉子の殻と野菜の秦です」
当たり前みたいに答えやがった。
何てこったい。
「何か残り物があれば食べるんだけれど。今朝はお兄ちゃんもお父さんも、お腹空いてたみたいで」
大丈夫か、この子の家庭。
円居さん自身、自分の生活に何の疑問も抱いていないみたいだからな。妙に突っ込むのも悪趣味だし。
というかこの弁当、余すべきか？
余せばこの子は、きっとこれを食べるだろう。けれどしかし、それは彼女に対する冒涜行為に他ならない。
「……？」
ぼくが固まっていると、円居さんが心配そうに声をかけて来た。
「どうしたんですか？」
「いいや。三囚人問題について、ちょっとね」
弁当が口に合わなかったのかと思われてしまいたくはない。ぼくは笑顔で梅干を口に運んだ。
とても酸っぱいが、確かに甘い。
白ごはんをかき込むことでちょうど良く食べられる感じ。良い梅だな、これ。
「ところで。円居さん、暇があれば携帯電話触っているけれど、お兄さんから受信する以外に何をしているんだい？」
ぼくが訊くと、円居さんは一瞬目を丸くして、それからポケットから携帯電話を取り出してこちらに差し出した。
「アユムさんも、どうですか？」
「……は？」
「わたしの友達だから、あの子もきっと大丈夫だよ」

メール画面を差し出される。新着メールが二件。
「友達と話をしているのか」
「ええ。家からほとんど出ない人で、きっと友達もわたししかいないから。だから、アユムさんも、その、彼女の助けになって欲しいの」
「ふうん」
知り合って間もない人に、頼むようなことなのか、それ？
案外、彼女の中で、ぼくとの距離は近いものがあるのかもしれない。そんな都合の良いことを思いながら、ぼくは携帯電話を受け取った。
送信者の名前は『しのぶちゃん』。
操作方法は知っている。割とどうでも良いことが書かれているその文章に、ぼくは早速返信する。
『名前教えて』

『名前教えて』
『しつこいわ！』
と、円居さんの友達でいつかの久重里シノブちゃんは、数秒の間もおかずに返信して来た。画面の向こうでは、きっと顔でも赤くしていることだろう。
『こんな夜中にメールすんな！　つーかどうしておまえがあたしのアドレス知ってるんだよ？　姫の奴が教えたのか？』
『円居さんの携帯電話に表示されていたのを見ただけだよ。ところで名前教えて』
『うるさいな』
うるさいと思っているなら返事をしなければ良いのに、思いながら、ぼくはキーボードを叩いてメールを送信。内容はもちろん
『名前教えて』
『黙　っ　て　ろ　！』
文字毎にスペースを空けて来た。文字列全体の面積が高まること

で、何というか迫力が増している。ぼくは苦笑しつつも、そのナイスなアイデアを真似っこする。
『名　前　教　え　て　！』
『い　や　だ』
円居さんに訊けばすぐに分かることなのだけれど、この子から直接聞き出すのがまた、楽しいのだった。ぼくは相当に愉快な気持ちで、次に何と送ろうか頭を捻る。
『姫から聞く限りじゃ、ていうかあたしと会った時の印象でも、おまえはそんなお調子者じゃなかったぞ』
考えていると、しのぶちゃんからそんなメッセージが届いた。目を丸くしつつ、ぼくは端的に疑問を示す。
『そうかな？』
『ああ。最低でも、そんな楽しそうに話す感じじゃなかったな。自分の意見を口にしないで、人の表情とか窺って楽しんでる具合でよ』
『円居さんから聞いた？』
『まあな。あいつはそんなおまえのこと、好きだって言っていたが。おまえら、ちょっと似てるし』
……何だって？
円居さんはそんなことを言ってくれたのか。好き、というのははたしてどういう意味で？　いいや、きっとぼくが望むような意味合いはどこにもないだろう。
あの子は博愛主義者だから、ぼくのことも好いてくれている。そういうことだろう。第一そういう好きでもなければ、しのぶちゃんに伝わったりはしない。
『まあそんなことは良いよ。名前教えて？』
『あたしの反応窺って、おもしろがってねぇか？　おまえ』
『正解だよ』
しばし沈黙があって、そして。
『あたしは舞姫ってんだ』

と、そう返って来た。
『何で話す気になったんだよ？』
『別に。良く考えれば、おまえに隠している意味ないだろ？』
と、自らの知性をひけらかすような文章を送信するしのぶちゃん。確かに君に名前を訊かずとも、円居さんに尋ねればそれで済んでしまうのだけれど。
『良い名前じゃないか。確か、鴎外の作品にもそういうのがあったはずだよ』
あらすじを聞く限りでは、あまり幸せなお話でもなかったようだが。読んだことがないから良く分からない。
『何だよ、その鴎外ってのは』
名前くらい知ってろよ。
きっと、この子は鴎外を『カモメガイ』と変換したんだろうなと思いながら、ぼくは返信する。
『ほとんどの鳥類の起源がカモメなのは知っているかい？　鴎外というのは、鳥類の中でもカモメ目に属さない生き物のことを指す言葉で、鴎外の鳥、みたいな使い方をする。舞姫というのは、日本に生息する数少ない鴎外の鳥の一種さ。美しい鳥だよ』
流石にこのでたらめに騙されてくれたりはしないだろうなと思いながら、ぼくはさらなる返信を待った。待つこと二十秒ほど。
『へぇ。おまえ良く知ってるな』
素直な感心が返って来た。鴎外の作品、というフレーズをぼくが使ったことは忘れているらしい。
画面の向こうで感心するしのぶちゃんを想像する。噴出しそうになる。やはりぼくはあまり性格が良くないらしい。
『そうかな』
『いいや知らんけど。あたしが頭悪すぎるだけだと思う』
それはそうかもしれない。
『円居さんとは、いつもこうやって話をするのかい？』
『そうさだな。中学まではずっと一緒で、まったくの二人きり。

それが一番、あたし達には幸福だったんだけれどな』
『でも、高校で別れてしまった』
『あたしと一緒のところに来い、って言ったんだよ。けれど、もう甘えていられないからって、姫の奴』
いじけたような文面。表情も声質も伝わって来ないただのメールだというのに、この子の気持ちなら手に取るように伝わって来る。ある意味では、これはしのぶちゃんの才能であると言えた。
『前から、円居さんは敵を作りやすかった？』
『そうだったな』
『それで、いつも君が彼女を守っていたという訳だ』
『そのつもり。あたし頭悪いから、喧嘩しかできなかったんだけれど』
そんなことは、関係が無いと思う。
友達の為に他人と殴りあうことができるなんて、何と幸福なことなんだろう。円居さんも、良い親友を持ったものだ。
『もちろん。これからも姫をいじめる奴いたら、殴りに行くぜ』
『それは頼もしいね』
『ついでにおまえも殴るけどな』
その文面に、ぼくは苦笑する。
捻くれて、不器用で、そして多分頭も悪くて。でも自分のしたいこと目指すところに辿り着いていける。伝えたいことが伝えられる。そんな子に思えた。
さあ何と返信するべきか。捻くれていると言う意味で言えば、ぼくはきっとこの子の数倍数十倍である。キーボードに指をおき、淡々と文章を作成する。
『ぼくにできることならするよ。ぼくは円居さんのことが
指を止める。
やってしまうところだった。
恐ろしく油断していた。メールで人と話すのが、こんなに痛快だとは思わなかったのだ。そもそもぼくは面と向かって人と話す時、

こうも饒舌になることはできない。増して、ぼくの話し相手となってくれるのは、ぼくの好きな円居さんなのだ。
円居さんは人の心を開かせる人物だ。あれほど受容性に満ち溢れた人はいないと思う。けれどそれ以上に、ぼくは臆病で、頑なだった。
『ぼくにできることならするよ』
そう送信する。ふつうなら、こんな白々しい台詞、ぼくは絶対に口にしない。口にできない。
ひょっとしてぼくは、話すよりは文章を作る方が、得意なのではなかろうか。そんなことを思った。
『ねぇしのぶちゃん』
そう書き込んで、しまった、とそう思う。
『何だよ？』
ぼくは円居さんのアドレスを訊こうとして、やめたのだ。少し考えて、ぼくはぎこちなく、一分以上かかってメールを送信した。
『円居さんの家って、どこ？』

しのぶちゃんの説明は分かりにくいことこの上なかった。とんちんかんな問答の末、『鳥みたいな屋根のスーパーの、向こうの右のもう一つ向こう』というフレーズで、ようやく円居さんの家の位置を掴んだぼくである。
今すぐにでも駆け出したいところだったが、まずは文面を作成しないことにはどうしようもない。ぼくは絵を描く時と同じかそれを上回る集中力を発揮して、陰気少年の矛盾と倒錯に塗れた悶々たる思いを、Ａ４用紙十枚に渡って書き綴り、素早く印刷した。
コンピューターを五年以上に渡って所有しながら、ローマ字入力のやり方も知らなかったぼくであるが、直感と観察でそれはどうにかなった。表示したい一文字が現れるまで、根気良くキーを叩き続けるだけである。それでも手書きより大分早い。しのぶちゃんとの会話もそれでどうにかしていた。

書き上げた頃にはすっかり朝で、しかも原稿を読み返している内に眠ってしまったので、彼女の家に向かうのは昼下がりの時間帯になってしまった。学校を無断で休むことになったが仕方が無い。念の為メールをチェックしておくと、しのぶちゃんから二通のメールを受信していた。

『学校行けよ』

これが二回。

『円居さんには心配ないって伝えておいて。寝坊しただけだから』

何度オウム返しの返信をしてやろうかと思ったものか。ぼくはそう送信しておいて、パソコンを落とした。しかし円居さん、ぼくのアドレスを直接訊き出しはしなかったんだな。それはそれで、彼女らしいとも言える。

いつかのしのぶちゃんのようにパジャマで外出することもせず、ぼくは一応、学生服に着替えて家を出た。

徒歩で四十分ほどの道のりの間中、ぼくはアスファルトの地面が飛び上がるような、ふわふわとした不安を抱き続けた。いつもならぼくに安心感を与えるはずの曇天も、ただの不吉であるように思える。それでも、ぼくは一度も止まることなく歩き続けた。

円居さんの家に着く。

それは豪邸と読んで差し支えない迫力満点の大きな家屋だったが、見る者を威圧するような黒い屋根が少々悪趣味に見えた。張り巡らされた白い丙からは危険な程に鋭利な槍の装飾が光り、その周囲と庭には無数の造花が設置されている。

生き物のような黄色をした郵便受けを探し出し、ぼくはそっと、甘えに似た確信を抱きながら郵便受けに用紙を入れる。甘えに似た確信、というか甘えそのものだ。こんなぼくのあんな陰湿な長文を全て、受け入れて欲しいなどと、彼女に甘えているだけに過ぎない。

ぼくは郵便受けから手を引き抜くと、逃げるようにその場を走り出した。今から行っても学校にはきっと間に合わないだろう。というか、もう円居さんが帰って来る時間に近い。

その時。
ぼくの頬をぬるりと、長い腕が通り過ぎて、ぼくの口元を覆った。柔らかく優しい、しかし抗いがたい類の不気味な腕力に引き寄せられたかと思うと、硬さを感じさせる人の胸部に背中が触れる。
「君が歩君だね。少しだけ、時間良いかな？」
振り向くと、見知った顔がそこにはあった。
円居さんの携帯電話の待ち受け画面に設定されていた、あの美少年。円居さんの、お兄さんであった。

「はじめまして。僕は円居愛と言って、高校三年生。女の子みたいな名前だけれど、このとおり男だ。君の友達、円居忍の兄で、君のことは、妹からうるさいほど良く聞いているよ。妹がお世話になっているみたいだね」
円居愛と名乗った少年は、ぼくを即座に近所のデパートに連れて来たと思ったら、今度は内部の地下一階の喫茶店の席にぼくを座らせ、迅速にブラックコーヒーとショートケーキを二つずつ注文して、それから気立ての良い声でそう自己紹介した。
「最初に理解しておいて欲しいのは、僕は妹から、君の話を良く聞いていて、君のことを好ましく思っているということだ。そしてこれから君がどんな言動をしても、その好意はほぼ揺るがないものだと思ってくれて良い」
おかしいと思ったことはいくつかある。まずはそれを訊くべきか？　差し当たって、どうして自宅に連れてこなかったのか、というのは円居さんの私生活に関わっていそうだし、是非訊きたいところなのだけれど。
「……」
ぼくがそんなことを考えていると、円居愛は物憂げな調子で店の壁を数秒、覗き込んで、今度は照れたように頭をかきむしる。
「……ごめんよ。ちょっと説明の仕方が妙だったね。でも、僕は本当は、もう少しきさくで話しやすい人物なんだよ？」

と、反省した様子でそう口にする。
「それで。お話なんだけれどさ。まずはこの手紙、とても悪いけれど、これを妹に渡すことは、できないんだ」
言いつつ、円居愛はぼくの書いた手紙、Ａ４用紙十枚をびりびりと四つに割って、自分のポケットにそれぞれ入れた。
とても無感動になることなどできやしない。ぼくは目を見開いて、それから身を乗り出す。円居愛は静かに微笑んで、ぼくをたしなめるようにこう口にした。
「話を聞いてくれ。まず、君は僕の妹のことを好いている。そうだね？」
何でそれを、こいつに言われなければならないのだ。
「もちろん、僕は百パーセント君の味方だ。だから言う」
悲しそうな、寂しそうな、そんな声色で円居愛は口にした。
「相手は僕の妹だ。円居忍にこれ以上好かれない方が、君の為だよ」
「……」
ぼくは何も言い返さなかった。
円居愛はぼくの様子を見て、僅かに罪悪感に駆られたような表情になる。
「ごめんよ。でも、あんな風に手紙を破いたのは、そうするのが一番良いと考えたからなんだ」
ぼくは思った。
この人、ちょっと円居さんに似てる。
「君は僕の妹のことを好いている。けれど、君自身は自分のその感情を、あまり高貴だったり、清らかだったり、ロマンチックなものではないと、そう思っている」
「……」
「まず最初、君は妹の姿形の良さに惹かれた。兄の僕がこう言ってしまっても、誰にも難色を示されない程度に、忍はかわいい女の子だよ。同意してもらえるね？　そして、君は妹のことを目ざとく

観察するごとに、彼女のことがもっと好きになったんじゃないか」
そうだ。
彼女の全ての行動、仕草、表情、言葉。ぼくはそれら一つずつ見聞きする度、更に強く彼女に惹かれて行った。これまでの、ぼくの無感動な人生の中で、味わったことのないときめきだったのだ。
「君の思いはとても純粋で、そして繊細なものだったと思う。そんな君の心、限りなくピュアーな精神が瓦解しかけてしまうような、恐ろしい出来事があった」
身を切るように、円居愛はそう口にする。
その時僕は、この円居愛が本心から僕のことを慮っているのだと言うことを理解した。
だからと言って、この男のことを好きになるには、手紙を破いた行為が今はまだ重すぎる。
「その時のこと、あまり繊細な事件なだけに、僕がそれを知ったのはつい最近のこと。僕の妹にとっても、あれは軽んじられるような出来事ではなかったらしい。つい最近まで、僕に話してくれなかった。それはともかく」
円居愛は眉に皺を寄せて、どこかしら責めるように
「君は妹の机の中に、汚い虫を入れたそうだね」
その声色は、妹を思いやる兄としてのものだった。
「……すいません」
「それが聞きたかった」
あっけらかんと、最上級の笑顔で、円居愛は僕に答える。
「妹にそんなことをしても良いのは、世界に僕だけだからね」
だから、君は僕に謝る義務がある。
円居愛がそう言った時、注文していたコーヒーとケーキが届いた。
「何でも良いと言っていたが、本当にこれで構わなかったかな？」
「……ええ」
食べる気、無かったからな。本当はコーヒーは苦手なのだけれど、最早、出されたからには頂くことにしよう。

この男からぼくが感じ取ったのは、彼が円居さんの兄で、円居さんが言うとおりの人物だということ。
気立てが良く、胡散臭いが根は正直者で、若干自己顕示欲が強く、大いに独善的で人の気持ちを考えず、しかし優しく、ある程度正しく、懐は広いが融通も利かず、無邪気で相当に残忍で、とんでもないレベルのシスコンだ。
「君が妹に抱く想いが、男が女に抱く感情の中でも、恋心という形に変異したのは、その事件によってだと。僕は睨んでいる」
どうかな？　と、真剣な面持ちで円居愛はぼくに尋ねた。
ぼくが黙って首肯すると、円居愛は今度は真剣というよりも深刻な面貌になり、それからどこか憂鬱そうに
「僕の妹は、常識的に考えると大いに異常なことだが、如何に気持ちの悪い動物でも虫でも、或いは彼女自身に害を成した攻撃者に対しても、平等に博愛を発揮する。妹から直接訊いてはいないのだけれど、ひょっとして忍は、そのゴキブリを見ても気持ち悪い顔一つせず、優しくどこかに放してあげたんじゃないのかい？」
「……正解です」
「その時、君は妹に恋をした。……妹の行為は優しさとも言えるし、非常識で、ちょっぴりばかり狂っているとも、言えるだろうね」
円居愛はそこで言葉を区切り、口を付けようと思ったのかコーヒーカップを一瞥し、しかし手に取ることをせずぼくの方を向いた。
「はたして君は、どうして妹のそんな行いに、恋をしたのだろう？」
「……分かりませんよ」
「そう」
円居愛は深く首肯した。
「分かっていれば、こんな手紙を寄越したりはしない」
ぼくの彼女への思いは、あまりに非論理的で、疑問と矛盾に満ちていた。
彼女のことをどれくらい好きなのか、これだけははっきりしてい

る。
大好きだ。
だけれど。それだけで終わらせたくない。それでは、彼女に対する、ぼく自身に対する背徳行為になってしまう。
そんな子供のような、自分でも良く分からない思いが、ぼくにはあって。
それら全てをひっくるめて、ぼくの、彼女への想いだった。
「君の手紙には、現時点での、君の思いの全てがこもっていた。だからこそ、僕があんな風に引き裂いた時に、君はあんな風に憤った表情をした。そして僕は、君の思いの深さを知った」
円居愛は寂しそうにこちらを見やる。
哀れむようにも、それは感じられなくは無かった。
「君の中の矛盾、葛藤、好意、全てを忍は受け入れただろう。そして忍は、きっと君のことを愛したはずだ。だからこそ、僕はこの君の手紙を、裂いたんだ」
「どうして？」
「君が円居を忍を愛したのは、彼女なら君のことを愛してくれると、そう思ったからだよ」
突き刺さるような声だった。
円居愛は寂しそうな顔のまま口にする。
「君は劣等感に満ちていた。君は自分のことを汚い虫けら程度にしか考えていなかった。汚い虫けらはあらゆる存在から毛嫌いされる。君は誰も自分のことを愛してなどくれないと思っていた。そうだろう？」
「……どうして」
ぼくはその場で暴れ出したい衝動をどうにか押さえ込みながら、円居愛に吼えた。
「どうしてあんたがそんなこと知ってんだ？」
「君は赤裸々だ」
円居愛は、ぼくの手紙が入った自分のポケットを叩きながら、言

った。
「最初の一枚で、君がどういう男なのかは、ほとんど理解した。……というか、君、十枚は書きすぎだよ。最初の一枚の半分で、君の気持ちは痛いほど伝わるよ」
聖女に赦された罪人だね、気分としては。円居愛はそう呟いた。
「ゴキブリを愛せる彼女なら、自分のことも。君はそんな風に考えた。恋が始まるには、ほんの少しの希望があれば十分だからね」
円居愛は、これまでに無い真剣な表情で
「こればっかりは、君自身で気付くことは、非常に難しかったはずだ。そして気付いた今、どうするべきか自分で良く考えてみると良い」
「……」
円居愛は、そこで言うべきことは全て終わったとばかりに、ようやくコーヒーカップに手をつける。ぼくもそれに習った。
人肌に近く、飲みやすい。しかし、苦い。
「偉く落ち着いているね」
「そうですか？」
ぼくは言って、苦笑した。
円居愛は、眉を僅かに動かしただけで、何も言ってこなかった。その仕草は、不気味さを感じ取った風でもある。
「ぼくが円居さんに受け入れてもらうのは、それは、関係としては相当に一方的です。ぼくは彼女に選ばれず、あくまで彼女の博愛の一貫として、愛される」
円居愛は目を丸くしてこちらを見る。
「それで良いのかい？」
「分かりません。ただ、ぼくは彼女に愛される為に、彼女を愛したことになる。……そんなのは、ぼくに対してだけではない。彼女の為にも、深い背徳だ」
「そんな風に考えるのは、きっと君だけだよ」
円居愛は薄く笑った。

笑って、それから優しい声で
「君は、彼女の優しさに、そのまま惚れた。それだけさ。だから君がすることは、彼女の優しさが本物かどうか、それを確かめることだけ」
円居愛はフォークを手に、注文したケーキの苺へと突き刺した。
「しかし。君は良く怒り出さずにぼくの話を訊けたね。さあ、これを早く片付けてしまおう。行くところがある」

それから円居愛に連れて行かれたのは、西条デパート十一階、つまり最上階に位置するペットショップだった。
「妹の遊び場と行ったら、昔からこの西条デパートでねぇ。お金も持っていないくせに、雑貨屋やここペットショップに現れては意味も無くぶらぶら」
色取り取りの生物、という印象が獣臭い臭気と共に撒き散らされる、素晴らしいペットショップと言えた。奥の壁には無数の水草と熱帯魚が並び、入り口付近にはお客を歓迎するかのように、紐で足を括られたふくろうなどが鎮座している。粗末な檻の中で暴れる猿、犬、ゾウガメまで。
「こっちだ、こっち」
何かを企むような表情をして、円居愛は嬉々と店の奥の空間に歩く。熱帯魚のコーナーを脇に進み、入り口からは確認できなかった、店全体から見ても尖出しているスペースへと辿り着く。
壁に埋め込まれるように、ガラスのケースが並んでいる。
その中で蠢いているのは、ヘビ、ムカデ、クモ、ミミズ。どうやらゲテモノコーナーということらしい。なるほど、そう言った需要も世の中には、十分にあると訊く。
「この通りさ。どうだい、この視界の隅にでも存在していてほしくない、気持ちの悪い生き物達」
犬や魚と同じ生き物だというのに、店の奥に追い遣られる哀れな連中、と表現するのも、それはそれで傲慢か。こいつらにしてみれ

ば、店のどこで扱われていようと関係の無いことだろう。
「昔はね、妹もこういうのを見て泣き出す感性を持っていたんだ。いつの頃から、ずれたのかどうかは、僕にも分からないけれどね。それでも一応、ある程度常識的に振舞うことはできたし、何せ小さな子供だろう？　僕はそれを、単なる優しさとしてしか、見えていなかった」
自嘲するように、肩を竦める円居愛。
「あの子の外観が優れていたことも、悪い方向に作用した。嫉妬を覚えたクラスメイトの目の仇にされたあの子は、しかしそいつらと戦うことも、逃げることも、屈することさえ、しなかった。でもどれもしないんじゃ、攻撃に晒され続けるしかないよね？」
ぼくは静かに首肯する。
「初めてあの子が不自然な怪我をしているのに気付いた時は、それはもう大騒ぎだったさ。僕は冷静に行動することなんて、できなかった。妹を泣かして良いのは僕だけだ。連中をぶちのめしたさ。後先のことは、忘れて」
それは君も同じだよね、と親近感のこもった視線で円居愛はこちらを見る。
何と無く、ぼくはそれに答えることができずに、目を逸らした。
「店員さんを呼んでくるから、ちょっと待っていてくれないかな？」
円居愛は言って、近くにいた女性店員に声をかける。その態度は、どこか愉しげで、とても無邪気なものだった。
「もう少し、待っていてくれ」
呼び止められた女性店員は店の奥に引っ込んで行く。円居愛は、無数にあるガラスケースの一つを指差した。すると、その明かりが消える。
「藁の中にいて分からなかったと思うけれどね。この部屋の住人は毒ヘビの一種で、暗いところでは大人しいが、明るいところでは好戦的だ。動く者を見ると、とりあえず噛み付こうとする。扱いに

は厳重注意ってね」
暗い中で、女性店員が藁の中に隠れていた白いヘビを棒で引き擦り出すのが見えた。そしてそのまま、小さな箱の中に誘導する。
円居愛は無邪気な足取りで、残酷な悪戯っ子の表情を浮かべてレジへと向かう。小さな箱を受け取って、店員から何やら話を聞いている。それが済んだと思ったら、円居愛はぼくの手にその箱を握らせた。
「さっきのヘビだ。プレゼントするよ」
……どうしろっていうんだ。
「軽蔑しないで聞いてくれ」
円居愛は、どこか楽しげに
「僕はこの二年程、妹の携帯電話にムカデやヘビの画像を送り続けている。適当に虐待して、可能な限り気持ち悪くしたのをね」
それなら、知っている。ぼくが円居さんと少しは仲良くなれた、そのきっかけと言えるかも知れない。あのフォルダ。
「妹はね、それをきちんと整理して保存しているんだよ。理屈は分からなくても、感じてはいるんだろうね。それがあの子にとって、必要なものだって」
「どういうことですか？」
「荒療治ってことになるのかな」
円居愛は、誇示するように笑った。
「あの子にああいう画像を送りつけて、あの子がそれを『気持ち悪い』って思ったとする。あの子はその画像を消すか、僕に文句を言うか。それは分からないが、でも、僕はあの子に正常な感性が芽生える瞬間を、きっと見逃さない」
「……つまるところ、気持ち悪がってもらう為に、送っているんですか」
「そうだよ」
あっけらかんと、円居愛は答える。
「あの子は優しいからね。気持ち悪いという理由で写真を消すの

は、被写体や送信者に対する冒涜だと捉えているんだろうね。だから、あの子の携帯電話から僕の画像が消えたことは、一度も、ない」
妹の携帯電話を覗いているのか。
碌でもねぇな。ぼくに言えたことじゃ、ないが。
「それで。ぼくにどうしろと？」
そう言うと、円居愛はやはり、無邪気に笑って
「その中身を妹の机の中に入れておくと良い。僕が赦す」
「嫌です」
「そう言うなって。君の為に、言っているんだよ」
唇を歪めて、僕の表情を窺うように円居愛。
「言いかい。最高なのは、君がきちんと失恋することだ。それをしないにしても、あの子がどういう人間なのかを、あの子がどれだけ、人間のできそこないなのかを、あの子を愛するつもりであるなら、君は知っておかなくちゃいけない」
「ふざけるな」
ぼくは円居愛に向けて、毒ヘビの箱をぶん投げた。
噛まれて死んでしまえば良い、そう思っての行為だった。だが円居愛はまずは一歩引いて、それを足で救い上げ、頭で一度受け止めてから受け取る。そんなふざけた演技に興じた後は、人懐っこい、どうだと言わんばかりの視線でこちらを捉えて。
「残念だな」
言いつつ、円居愛はどこか、楽しそうな表情を崩さなかった。
「けれど。これは忘れないでおいてくれよ。相変わらず僕は君のことが好きだ。今日の内に、余計に君のことを好きになっているかもしれない。だから、僕はこれからも君の為に行動する。良いかな？」
しばらくぼくが何も答えないでいると、円居愛はその日で初めて、人間らしく顔を顰めたのだった。それから寂しそうに「手間を取らせたね」と紳士的な風に口にして
「それじゃあ。またね」

言って、ぼくの前から姿を消した。
毒ヘビの箱を抱えて。

「昨日はどうして学校来なかったの？」
単純な疑問を口にするように、首を傾げながらそういう円居さんに、ぼくは相当な罪悪感を覚えることになった。叱られると思ったんだけれどな。
「寝坊だよ。間に合いそうに無かったから、何もしなかった」
「気をつけてくださいね。アユムさんがいなかったら、わたし寂しいから」
そう、漏らすように口にする円居さん。
再び罪悪感。思えばぼくの話し相手が彼女だけであるように、彼女の話し相手も、ぼくだけなのだ。ってことは、この子、昨日は相当に孤独な一日を過ごしたんじゃないかな。
「ごめんよ。お弁当、無駄になったんじゃないか？」
「いいえ。わたしが食べたから」
なら良かった。
「代わりにカロリーメイトが一日分余ったから、帰りに公園の鳩にやらない？　楽しいよ」
一日分余ったって。それを今日食べれば良いじゃないかとか、そんなずれたことを考えながら、まあ円居さんと一緒に公園に行けるというのは、非常に魅力的な提案に思えた。
昨日のことは、忘れよう。
もう一度、ちゃんと良く考えて、そして最適な手段で気持ちを伝えよう。
「鳩か……きっと鴎外の鳥に含まれるんだろうなぁ」
呟くと、円居さんはそこで思い出したようにぼくの顔を覗きこみ、若干口を尖らせながら言った。
「しのぶちゃんに変なこと吹き込んじゃ、ダメですよ。あの子、何でも信じちゃうんだから」

告げ口しやがったか。
「なんかね。あの子が良く分からないことをわたしに自慢し出したから。『鳥って全部カモメなんだぜー！　知らなかっただろ！』って。誰から聞いたのって言ってみたら、あなただって」
「……ごめんなさい。でも、すっごくおもしろかったんだ」
「そうね。分からなくはないけどね」
円居さんは悪戯っぽく笑って
「でも会話が終わるまでに、騙してたよって教えてあげなくちゃ。あの子が恥をかいちゃうよ」
それがおもしろいんじゃないですか。円居さん。
「ところでさ。しのぶちゃんって、円居さんのこと『姫』って呼ぶよね。どうして？」
前々から、何となし疑問に思っていたのだ。円居さんの名前を同解体しても『姫』にはなりそうにない。また、円居さんの立ち振る舞いからそうあだ名するのにも、しのぶちゃんにそういうセンスがあるようには思えない。
「あの子、自分で『シノブ』って名乗ったでしょう？　でもそれってわたしの名前。それで、わたしはしのぶちゃんの名前で呼ばれているの。『舞姫』だから『姫』ね」
交換している、ということになるのか。
なんか微笑ましいな。
「それっていつから？」
「小学生の時から、ずっと。しのぶちゃん、自分の名前嫌いなんだって。すごく素敵なのにね」
「素敵だから嫌いなんだと思うよ」
ぼくが言うと、円居さんはなんだか目を丸くした。
そりゃまあ確かに、この子にはきっと、分かるまいか。
「名前と言えば。昨日、君のお兄さんに会ったんだよ」
「そうなんだ！」
両手を合わせて、嬉しそうに声を高くする円居さん。かわいいな

あ。
「どうだった？」
「変わった名前だね」
「そうかな。お母さんがね、一番好きな漢字を使ったんだよ」
「……君に与えるべきだったよね、それはきっと」
何度愛ちゃんと呼びたくなったことか。円居さんのお兄さんで、あの気さくな性格だ。あんな張り詰めた空気でもなければ、きっと呼んでる。本人もあれで結構、気にしてると思うし。
「それじゃ、君の名前はどうやって決められたの？」
「お兄ちゃんもわたしも、名前に心があります」
へぇ。
円居愛。円居忍。なるほどね。
「それは良い名付けだね」
「そうでしょう。お母さんなんだよ、考えてくれたらしいの」
嬉しげにそういう円居さん。自慢の母親、ということらしい。
その大切な名前をしのぶちゃんにくれてやったのは、それだけ彼女に対する友情が深いということなのだろう。人が自分の為に施してくれたことを、例えそれがどんなことでも、この子は簡単に手放さない。
「それで。お母さんは何をしている人？」
「今は死んでるよ」
あっけらかんと言う。
この子にとって、これは何ら特別なことではなく、単純な報告でしかないはずだ。だからぼくも、それに相応しい反応を見せる。
「そうなんだ。お父さんは？」
「アパートの兼営。家で寝てても儲かって退屈だって、良く言ってる」
それは随分と、羨ましいことである。
「わたしも良くお手伝い、するんだよ。アパートの人達から、家賃をね、取りに行くの」

「へぇ。それはいつからだい？」
「小学三年生の時が最初かな？　しのぶちゃんも、良く手伝ってくれるよ」
子供にやらせんな、そんなこと。
と言うか、この子にはそういうの、かなり向いていないんじゃないかなと思う。まあでも、高校生の子供がいるおっさんが行くより、こんなかわいい子が来てくれた方が、まだしも払う気が起こるというものだ。
子供には預けられん、っていう言い訳使う外道がいるかもしれないけど。勝手に色々心配したけれど、滞納する人って、やっぱりいるのかな？　漫画とか読んでると、アパートで家賃と言えば、そんなイメージしかない。
「アユム君のご家族は、何をしていらっしゃるの？」
「母さんは会社勤め。父さんはポケモントレーナー」
「ポケモンってかわいいから、わたしも好きだよ」
父さんはポケモンの新作が出るとぼくの分まで買って来る。キャラクターデザインは秀逸だし、おもしろいんだけれど、しきりに対戦をしたがるのは止めて欲しい。勝てんし。
円居さんに固体値厳選の話はできないよなぁ、とか、そんなことを考えていると、チャイムが鳴った。
こんな取りとも無い風を装った会話でも、円居さんと交わす一語一語は、ぼくの一生に残るべき、最高の思い出だ。ぼくはこれを他の何より優先して守っていかなくちゃいけないし、その為には、どんな犠牲も辞さない覚悟だ。
根暗少年には珍しいくらい、真面目にそう思う。
その日の天気は昨日に引き続いて曇り。雨が降りそうなのは相変わらずだけれど、その日は雷が少し、鳴っていた。授業中、窓際の席に座る円居さんは時々空を確認しては、雷が鳴る度に驚いて顔を上げ、いけないいけないと真剣な目で黒板の方を向く。
二時間目の国語。いい加減に雷は止んで来て、円居さんも少し安

心して気が抜けていたらしい。ぼぅっとしていて、教材を机に並べるのを忘れてしまっていた。

「円居さん」

挨拶も早々に教室を巡回し始めた女性の国語教師は、ちょっぴり陰険な目で円居さんの方を見てそう言った。円居さんはびっくりして肩を竦ませる仕草の後「す、すいません」と鞄の中に手を突っ込む。必要なものはなかったらしく、首を捻って次に自分の机の中に手を入れた。ぼくなんかは全ての教材を机に入れているのだけれど、彼女はそうではないらしい。

その時だった。

円居さんはおっかなびっくり、目を丸くして僅かに背もたれへ仰け反った。「どうしました？」国語教師の声。ゆっくりと机から引き出された円居さんの白い腕には、しなやかで細長い一匹のヘビが絡まって、枝でも伝うように円居さんの肩に向けてくねっていた。

「きゃあっ！」

最初に叫びをあげたのは国語教師だった。円居さんの一番近くにいたのだからそれは仕方がないことかもしれないが、しかし悲しいかな、そのヘビは明るさや人の動きなどの刺激にとても敏感だ。すくみ上がるように首を動かし、周囲を警戒し、威嚇するように牙を立てる。

大丈夫だよ。

円居さんはヘビの方を見やり、そして優しく微笑んだ。すると、ヘビは一瞬、迷うような仕草を見せてから、ゆっくりと口を閉じようとする。円居さんがヘビに向けて優しく手を差し延べようとしたその時

「いやぁー！」

叫び声が聞こえて、円居さんの周囲の席に座っていた何人かの男女が椅子を蹴るようにして飛び上がり、逃げ惑う。そこには国語教師も混ざっていた。さらに追い討ち、そこで雷が鳴る。そんな音の刺激に、ヘビは再び気を荒立てて、目を合わせた時に生物としても

認識したのか、そのまま円居さんの首に向けて、飛びかかる。
それを認識するまで何もできなかった自分が酷く情けなく思う。
円居さんなら、きっとこのヘビを手懐けてしまうだろうと思ったし、そっちの方が捕獲よりもずっと安全だという打算もあった。
しかしである。こいつが物音に敏感だなんて、俺は聞いてねーぞ！
間に合ってくれ。それを願うことしかできない。最悪道連れになる覚悟で、ぼくはヘビの首根っこに向けて手を伸ばす。
がぶりと。
本当にそんな擬音が、指から頭に、鼓膜にまで伝わって行った。
噛まれた？
ヘビの顔全体を、ぼくの手は覆ってもいる。けれど同時に、中指を思い切り噛まれてしまっている。ぼくは何とか、握りこぶしを作ってヘビの動きを一旦止めた。
皆の逃げる音。半径二メートルには、すぐに誰もいなくなるだろう。
それを確認して、ぼくは自分の体の異常に気付く。
……ちょっ、毒回るの早すぎだ。
立ってらんねぇぞヘビ公。ああダメだ指も動かん、このままじゃ逃がす。
意識も薄れて……まったく。これじゃダメじゃないか。
ぼくに何かあったら、円居さんが悲しい思いをしてしまう。

などと言っても、やっぱりペットショップで扱われている程度の毒ヘビ。いくらぼく程度と言っても、人間一人を死に至らしめることなどできないらしく、当たり前だが気が着いたらぼくは病院のベッドで眠っていた。
「アユムさんっ」
ああ～この声で目を覚ませて幸せだなぁ。医者のおっさんの汚い手で揺り起こされるとか絶対勘弁だし。
思いつつ、声のした方を見る。円居さんがぼくの方に手を出した

り引っ込めたりをしていた。体に刺激を与えれば毒が回る、ということだろうか。
「大丈夫。もう起きたよ」
と言ったのはぼくではなく、円居さんの隣で仁王立ちするしのぶちゃんだった。
「……何でいんの？」
おい。
最初は円居さんの無事を訊くべきだろうが。まあ見た感じ大丈夫そうだけれど。
「姫が電話で、泣きながらまくし立てて来た。尋常じゃなかったからあたしも病院に来た。そういうこと」
さいですか。
「アユムさん！」
円居さんが赤い目でこちらを見ている。すごく心配してくれているらしい。うっわ嬉しい。
「あのね、ありがとう。大丈夫？」
涙声でそう言ってくれる。死ねる。
「ああ。ごめんよ。心配かけたね」
と言って、ぼくが勤めて優しく笑いかけると、
「そんなこと……」
円居さんはしゅんとした感じに目を伏せた。かと思うと、すぐにあらゆる生き物を安心させる柔和な、包み込むような物腰を取り戻し
「体は大丈夫？」
「平気だよ」
ちょっと手足が動かなくて、頭ががんがん鳴っていて、嘔吐感がこみあげてくる程度。君に心配してもらったらすぐに直るのさ。
「ところで。先生達はどうしたんだい？」
「もう帰ったよ」
肩を竦めて、しのぶちゃんが言った。
「時計見えるか？　もう一時回ってるんだぜ」

マジですか。
がんばって首を動かして時計を探していると、円居さんが携帯電話をそっとぼくの枕元に置いた。ふむ、確かに一時十七分。
「……どんだけ寝てたんだよ」
「毒の強度よりもおまえの体質の問題らしいぜ。アレルギーがどうの、あたしには良く分からなかったけれどな。ふつうは半日以上気絶したり何て絶対にない、ちょっと手足が痺れる程度だってよ」
「そっか」
じゃあ君達二人は、半日以上の間、そこにいてくれたのか。
嬉しいな、と、無邪気に思ってしまう。まあ良いか。
「アユムさん。すっごくありがとう。どうお礼をしたら良いのか分からないけれど」
「じゃあ絵のモデルになってくれ」
ようやく言えた。
いやまで。これはお礼を要求するべき場面なのか？　どうなんだろう、自分で勝手にやったことのような気もするし、円居さんの為にしたような気もするし。
「姫にも感謝するんだぜ」
と、そこでしのぶちゃんが言った。
「ヘビは倒れたおまえをもう一度噛み付くつもりだったらしい。それを、姫が持上げたら大人しくなったんだと。ふつう、目の前で噛み付かれた奴が気絶してんのに、そのヘビに手を伸ばしたりできるもんか？」
ふつうは無理である。円居さんの為でもない限り、ぼくならそもそも、見殺しにする以外の選択肢を考えすらしない。心に染み入る話である。
円居さんをさっさと安心させて、二人にお礼を言う為。ぼくは気力で体を起こした。「おい大丈夫かよ？」やる気もなさそうにしのぶちゃんが言って、円居さんはぼくが起きるのを手伝ってくれる。格別な感触だなぁ。

「……？」
起き上がると、心配するような、制服のままの円居さんの顔がある。隣には天下無双のパジャマ姿をしたしのぶちゃん。そしてその後ろには……。
「ヘビ？」
虫篭の中でとぐろを巻く、白いヘビの姿があった。
あいつはひょっとしてあの忌々しい……。
「皆にはどこかへ逃げたことにしています。じゃなきゃ、きっと殺されちゃうもの」
円居さんは、ぼくを抱き起こした状態でおずおずと口にした。
良かったかなぁ、怒られないかなぁ、といった思考が伝わって来る。背後で、しのぶちゃんが苦笑するのが分かった。
ぼくも一緒になって苦笑する。
やっぱり、円居さんはこういう子だ。
ぼくの好きな円居さんだ。
彼女にとっては、自分に噛み付こうとした毒ヘビだって、ぼくと同様に慈しむ対象だ。
それは逆を言えば、彼女がぼくに向ける慈愛は、あの毒ヘビに対して向けるものと、大差がないということ。
それが、円居愛がぼくに対して、身を持って知るべきだと言った、彼女の性質。
その為に、こんな手の込んだ嫌がらせまでしたのだ。そしておそらく、彼の考えるシナリオの中では、ヘビに噛まれる役割はやはり円居さんのもの。自分に噛み付いたヘビのことを心配する彼女を見せ付けて、ぼくの彼女に対する不信感を煽る作戦だった、という訳。
「ふざけるな」
頭に血が上って、ぼくはついそう口にしてしまう。
「……ごめんなさいっ」
涙目で手を合わせる円居さん。やっちまった。
「違う！　違うって！　君のことを言ったんじゃない。ぼくは君

のやることを一つでも否定したりはしないから！」
「……何げにすげーこと言ったよな、今」
しのぶちゃんが呆れるように言った。
「本当ですか？」
潤んだ目で見詰められて、ぼくは相当に焦りつつ
「ああ！　もちろんだ。あのヘビはぼくが飼うよ！　もっと良いゲージも買って、名前だって決めよう！　何が良い？　君が決めて良いよ」
ぼくがまくし立てると、円居さんはすぐに明るい顔になって
「本当？　それじゃ、明日までに考えとく」
無邪気にそう言ったのだった。

ヘビの名前は『ヒカル君』に決まった。雷が鳴った日に出会ったからだそうで。明るさに弱く、暗闇をこそ天国と思うこいつには、相当に皮肉な名前であると言えた。
「それで。そのヘビは姫の兄貴が仕掛けたものなんだな？」
「おそらくはそうだと思う。机に入れたのが本人だとは、限らないけれどさ」
退院の前日。平日の昼間っから見舞いに来てくれたしのぶちゃんに、ぼくは事件の前日にあったことを話していた。彼女には、言っておくべきことだと思ったのである。
「でも証拠は抑えている訳だよな。警察突き出すべきだろ。このチャンスに」
このチャンスに……それは、今までにこのようなことが何度かあったのではないかという、そんな疑問をぼくに抱かせるに足る言い方だった。
「それがさ。気付いたことなんだけれど、そのヘビ、もしかしたら、西条デパートの最上階で売っていたものとは、違うかもしれない」
「……は？」

「暗いところで一度きり、一瞬だけ見えた、頭の鱗の模様。それが少しだけ違っているんだよね」
「……良くそんなの覚えているな」
感心したように、しのぶちゃん。
「仮にお兄さんを糾弾したとしても、『僕が毎日可愛がっているこの子が、何かしたのかい？』とか、デパートで買った方のヘビを指さして笑うだけさ」
そうやって他人をあげつらう為に、わざわざ変装して同じ種類のヘビを買いに行くくらいのことはしそうだ。気さくな風でいて、彼はそれくらいには陰険な人物だと思える。こんな煮え湯を飲まされてしまっては、最早良い印象を持つ方が難しい。
ただ。あの人円居さんのお兄さんなんだよな。
「……良く分かんねー。そんな面倒なことすんなら、初めっからしなきゃいーのに」
椅子に手をかけて、体全体を仰け反らせるしのぶちゃん。
「まあそれは良いんだ」
良いのかよ
「ああ。小難しく考えて答えが出ないんであれば、その兄貴を殴りに行くだけだ」
「火に油だよ。止せって」
「でもぜってー腹立つ」
それは仕方が無い。けど今は、ぼくらも耐え忍ぶことしかできないだろう。
仮にこのことで奴を弾劾できたとしても、円居さんからあいつを引き離すに至るかどうか。増して、円居さん本人は何をされても変わらず彼を好いているだろうということもある。
「姫にこのこと、おまえは言う？」
「やめとこう」
「それが良い」
しのぶちゃんは納得したように頷いた。彼女との付き合いが長い

だけのことはある。
「それでさ。結局、おまえはどうしてその糞兄貴に呼び止められた訳？」
「……へ？」
いやだから。
「あたし頭悪いけれど、勘は良いんだ。あの兄貴、自分ちと通学路しか通らないからな、基本的に。ということは、おまえ、姫の家に行ったんじゃないか？」
ぎょっとする。勘が良い、というのは本当らしい。ぼくは観念して、認めた
「正解だよ」
「何でまた？」
ぼくは嬉し恥ずかし、手紙と言うか時代遅れのラブレターを出そうとしたことや、それを四つに破られてしまったこと、それから円居愛に言いように見透かされたことなどを話した。
「……おまえ、アホだろ？」
それを聞いて、しのぶちゃんは心の底から人をバカにしたような声を出す。
「何だよ」
「だってさ。おまえ、姫のこと好きなんだろ。だったらそれで良いじゃん。惚れた腫れたに理由はいらねぇ」
ぼくは、そのあまり論理的ではない言い分に、何故か言い返すことができなかった。
その時、病室のドアがノックされる。
「おじゃまします」
おずおずと中に入って、ぼくの脇で微笑む円居さん。
「円居さん……っ……」
「……？」
しまった。咳き込んだ。
緊張のあまり大声。しかも呂律が回らない。大丈夫かよ俺。最後

に水飲んだのいつだっけ？
「何ですか？」
「好きだ」
言っちゃった。
「嬉しいです」
しばしの静寂があって、一瞬目を丸くしていた円居さんは、照れたように、大いに赤面しつつ、そう言って微笑んでくれた。
やっぱり、そうなのである。
『嬉しい』であって、それ以上の言葉は無い。
『わたしもです』はこの人にとっては言うまでもないことで
『お付き合いしましょう』何て感覚は、そもそもこの人には無い。
これで良いんだろうなと、ぼくは気持ちを伝えられたことに満足して、幸福を胸いっぱいに吸い込んで、これまでの疲れを吐き出した。
こんなに簡単なことだとは思わなかった。相当に投げやりだった感もあるが、不思議と迷いや後悔の類は訪れない。
六月の太陽の、鬱陶しいほどの眩しさに目を逸らすと、しのぶちゃんや病室中の視線がこちらに向いていた。
ガラスケースの中で、ヒカル君が呆れたように首を捻った。何も今やらんでも、と言った風だった。

三章

『良かったのか？』

『どういうことだよ？』

『おまえ姫に告ったんだろう？　それならさ。あいつにも相当の振る舞いを求めるべきだろうが。受け入れられるかは、別として』

頭悪いくせに、回りくどい表現するよなぁ。ようするにしのぶちゃんはこう言いたいのだ。『付き合っちまえ』と。

『円居さんがぼくについてどう振舞うのかは、それは彼女の自由だろう？　そもそも男女交際なんて、所詮は他国から輸入されて一時的に流行っているだけの文化さ。それにおけるマナーや風習に、誰もが沿う必要もない。ただ、ぼくは円居さんを好きで、彼女はそれを知っている。これで良いじゃないか』

現実の女性というものを知る以前、すなわち円居さんと出会う前に良くやっていた言い訳を織り交ぜつつ、ぼくは送信する。

『本当にそれで良いのか？』

が、しのぶちゃんの反論はあまりに無慈悲だった。

何と答えよう。思いつつ、ぼくはパソコンの画面から目を逸らした。退院後、円居さんやしのぶちゃんとメールのやり取りをするのが日課となってしまった。

そしてアドレスを教わる時に危惧したとおりというべきか、内気がちな彼女は自分からメールを送ってくることが少ない。それでも、ぼくと会話を持ちたがってくれているみたいで、日によって二時間おきに『ヘビ君の調子はどうですか？』と送信して来る時もある。死ねるほど嬉しい。

『つーか親友のあたしが言うのも難だけどさ。あいつのどこに惚れたんだおまえ？』

『知るかよ』

自分が人に何言ったか忘れているんじゃなかろうか、この子は。

『博愛主義で、ちょっぴり独善的だけどがむしゃらに優しくて、受容性が無限大で、照れ屋で、たおやかでおっとりしてて、正直で、真っ直ぐで、ひょっとしたら被虐癖があって、自分のことに無頓着で、人のことをものすごく理解してくれて、それでいてマイペースで、割と場当たり的で、ものすごいレベルの天然で、強くて、皆の幸せを心から願っている、かわいい円居さんだから、惚れたんだよ』

しばらく、せせら笑うような沈黙があって

『今の文章、姫に送っとくから』

『やめろ』

『いやだ』

『やめろ！』

『い　や　だ！』

『や　め　ろ　！』

その後、しのぶちゃんとものすごくレベルの低いやり取りがあって、結局、その文章が円居さんに知れるのは免れた。

『なら直接言ってやれよ。おまえならその時のあいつの反応、頭の中で千回は再生して楽しめるだろう？』

『口にしている途中でぼくが死ねるよ。こちとらどれだけ内気で陰気で捻くれてると思ってんだ』

『自慢みたいに言うなよ』

そうだよね。

『おまえがあいつを本当に好きなのは分かったよ。姫はふつうにカレシとか作って幸せになるべきだ』

『さしあたって、ぼくとくっ付けようと？』

『さー。それに見合うかどうかだよ』

画面の向こうで、しのぶちゃんがシニカルに微笑むのが分かった。

『ところでさ。前から気になっていたんだけれど。円居さんくらいの女の子なら、今までも食指を伸ばしやがった不届きな糞尿野郎が、何人かいたことだろ？　そういうのは結局、どうなった訳』

と、自然に打ち出した文章は、ぼくにとって割と洒落にならない

大問題だった。言い回しもなんだか陰気な敵意に満ちている。ソフトな文体に変換するのも面倒だったので、そのまましのぶちゃんに送信した。

『あたしが露払いやってたから安心しろ』

おそらくは自信満々だろうしのぶちゃん。

『そうじゃなくて。円居さん自身の反応だよ』

『ふつうに断ってたよ。土谷っつー腹の立つ類のハンサム野郎がいてな。姫の奴を口説こうとしたんだが。姫は何て言って断ったと思う？』

『流石にそれは想像できないかな』

『顔を真っ赤にして、心の底から申し訳なさそうに、こうだ「ごめんなさい。あなたがわたしに望むような感情を、きっとわたしは持てないと思うの」』

ぼくは画面に向かって大いに噴出した。

ざまぁねぇな土谷ぁ！　ぎゃははは。

『こんなこと言われて、その陰険な土谷という男は姫に手を出そうとした。そこで、物陰に隠れていたあたしの登場だ。女子中学生の凶行、同級生男子、全治一ヶ月ってな』

『プゲラｗｗ　ざまぁｗｗｗｗっうぇうぇｗｗ』

『何言ってんだ？』

『悪い。取り乱した』

まったく。我ながら、恐ろしく性格が悪い。

『だから安心しろ。おまえは姫にとって、まったくその気がない少年Ａではないという訳さ。さもなきゃ、あの時にそれはもう残酷なくらいこっ酷く振られてる。おまえがあいつに望むような感情を、あいつも少しは持っているのさ』

『……どうなのかなぁ』

あの女神のような女の子が、ぼくに対して慈愛以外の感情を持ってくれるようには、どうしても思えないのだけれど。

と言うか、しのぶちゃん。全治一ヶ月って、一体何をしたんだ？

『ついで言っておくと。これからはその露払い役を、おまえがしなくちゃいけないことになる。分かるな？』
『やってみるよ』
どうしても陰気な方法になってしまうだろうけどね。まぁ円居さんに手を出す奴が相手なら、いくらでも残酷になれるつもりだ。
『しかし何というのか。おまえ、自分のこと陰気だの根暗だの言うし、実際そのとおりなんだけれど。それでもおまえが考えるほど友達のできにくい奴とは、あたしには思えないんだが？』
と、今までの会話を全て忘却してしまったかのような送信があった。
この子はこれで結構、会話の線引きとかする方だと思っていたのだけれど。彼女的には、これは踏み込んでＯＫということらしい。
『ぼくには先天的な病気があってね。同性の人物の身体的な能力に障害を来たすフェロモンを体中から分泌しているんだ。かつて、これの所為で多くの人間が犠牲になった。そんなことが二度と起こらないように、ぼくは友人を作らないよう努力している』
これはもちろん嘘である。しかしここはあまり頭の周りの良くないしのぶちゃんのこと、その返信は
『なんかすげーな。苦労してんなおまえ』
というものだった。うん、おもしろい。
『冗談だよ』
ぼくは送信する。
しのぶちゃんの言うことは、まあ、酷くナンセンスだ。
性格が悪くて実力も無い男なら世の中にいくらでもいる。そしてふつうは、そういうのはそういうので肩を寄せ合って生きるもの。実際ぼくもそうしていたこともあったのだけれど、その内に一種の同属嫌悪が芽生えて来るものだ。
ぼくの中に、ではない。ぼく以外の、ぼくの仲間達の中に、それは芽生えるのだ。
醜悪な人格の持ち主同士は、皆こいつよりはマシだとお互いを心

中口中罵りあう。似た者同士で何でそんなことしなきゃならんのだと思いつつ、ぼくはその居心地の悪さに押し潰されて、その集団の中でも、淘汰されてしまう。
簡単にその集団から離れることができたのは、ぼくの方も連中をあまり好いていなかったからに違いがないのだが。上っ面の関係を維持できるほど、ぼくは成熟していないということだろう。
『冗談？』
『ああ。君が思うよりもずっとぼくは陰険な根暗なのさ。それよか、どうして君のような明るく活発で、気持ちの強さもある人間が不登校に陥るのかということが、ぼくには不思議でたまらないのだけれど』
若干の沈黙があった。
『だって学校とかつまらんし』
しのぶちゃんからの送信。
『いやいや危機感とかはあるんだぜ？　高校出なきゃ適わない夢もあるし』
『何だよそれ』
『警察官』
けーさつかん。
ものすごく良い夢じゃないか。
まずい、こんな予想しやすいことだとは予想できなかった。
『国家試験の勉強だって、頭悪いなりにやってんだ。日によって続いたり、続かなかったりしながらな』
『どうして警察官なんだよ』
『スリルとサスペンスじゃん？』
スリルとサスペンスらしい。
『新学期になって三日で学校行かなくなったあたしに、姫がやたらと刑事物の推理小説とか刑事ドラマとか勧めてきやがるんで。これは高校卒業して試験受けて刑事になれってお布施だと思った。間違いない』

良くそんなんで伝わったな。流石に付き合いは長いのか。
円居さんはしのぶちゃんに、何か夢を持ってもらいたかったのだろう。そうしたら少しは学校に行くモチベーションも沸くと思ったのだ。そして、しのぶちゃんの適正とか、興味の引かれやすい性格とかも加味した上で、警官を志望させた。
何というか。すごいな、と思う反面、恐ろしくもある。
いくら幼馴染だとは言え、他人の人生をそんな風に決めてしまえるものだろうか。
「まあ。円居さんなら仕方ない」
その行為の根底にあるのは、純度ほぼ百パーセントの好意なのだから。
『じゃあ尚更高校は卒業しろよ』
『そう思ってなるべく通うようにしてんだよ。レベル最底辺の高校だから、テストはちょろくて出席日数さえどうにかすりゃ良いんだが。これが続かない続かない。毎日同じ時間に同じこと、しかもつまらないところでつまらないことをするなんて、なかなかできやしねぇよ』
ううむ。不思議だ。相当ダメなことを言っているのに、心の底から同意できてしまう。
『じゃあさ。何も、最初っから学校に通うことはないんじゃない？』
一瞬の沈黙。
『どういうことだ？』
『いいやさ。これはぼくが小学六年生でひきこもった時、カウンセラーの人に勧められたことなんだけれど。学校に通う意思はある、けどなかなか続かない。じゃあ、まずは学校以外のところに毎日通うようにして、継続力を身に付ける。その後で、学校に行くようにする訳だ』
『回りくどい方法だなー。それ考えた奴絶対頭悪いって』
『確かに、小学六年生のぼくに分かる程度には、あまり優秀でな

い人だったね』
三十近いのに自分のことを『お兄さん』と呼ばせたがった、あの人のことを思い出す。カウンセラーってふつうは女性だろとか今更に思うのだけれど。まあまあ良い人ではあったよな。
『でもさ。学校だからこそ、通う気にならないっていうのもあると思うんだ。そこで、とりあえず毎日何かを達成しているという自信と、単純な早寝早起きを身に付けさせて、最後に持続させるべき努力を毎日の登校に切り替えてやれば、成功するんじゃないかな。よっぽど学校に嫌なことでもなけりゃ』
『そりゃ学校に嫌なことはないけれどさ。良いことも一つもない』
『じゃあまずは少しは楽しい場所に通えば良いじゃない。西条デパートに八時、開店時間ちょうどだ。ぼくの場合、所定の場所でいつもカウンセラーが待っていた』
ちょっと子供扱いのし過ぎだろうかな、とか思わなくも無い。
と言うかどうして、こんなぼくにこう説教染みたことができるんだろう。適当に戯言ほざいてただけにして、謝っとこうかな、と投げやりなことを考えた。
ひょっとしたら、この子とは似た者同士なのかも知れない。
何て、そんなことが頭を過ぎる。
『分かったよ』
と、そこでしのぶちゃんから返信があった。
なのでぼくとしては、それは大いに困った。

「……寝過ごした」
しのぶちゃんと約束をした、その翌日の土曜日。ぼくが目を覚ましたのは九時前のあたりであった。それも自分の意思で起き出したのではなく、円居さんのチャイムで起こされてのことだった。
「しのぶちゃんから話は聞いたよ」
「面目ない」
言って、ぼくは顔を伏せて頬をかく。どうも、円居さんからメッ

セージがあったのを、寝ていて気付かなかったらしい。休日は昼過ぎまで寝る習慣が着いてんだよなぁ。せめて早寝しておくんだった。
「仕方ないよ。今日の失敗より、明日の成功を考えましょう」
円居さんはそう言って爛漫に笑う。それから何やら考え込むように首を傾げて、おずおずと言い始めた。
「アユムさんには、ちょっとした才能があると思うのよ」
「何だよ？　それ」
「ただのメールのやり取りで、偏屈なしのぶちゃんがデパート通いをすることを、決意しないわ」
それは確かに。会話の際、言葉によって相手から受け取れる情報は、せいぜい一割程度だという話だし。文章だけのやり取りにはどうしても限界があるはず。
「それはあの子が単純だからじゃないのかい？」
ちょっと酷いこと言ったかな。円居さんは何かを考えるように、かわいらしく目をくりくりとさせた。
「しのぶちゃんは単純なんかじゃないよ。ものすごい人嫌いで、いつも何かに怯えてる。あの子がわたし以外と打ち解けたのは、きっとアユムさんが初めて」
「まぁ。気は合ったかな」
根本的な部分で愚かだという点と、たいていのことはバカにされても飄々としていられるという点で。
しのぶちゃんと言えば、最初にメールで話をした相手でもある。最近気付いたことは、ぼくは結構なネット弁慶であるということだ。ヒカル君の飼い方について掲示板で訊いていた時なんか、相当にいきいきしていたし。
「アユムさん。あなたってば、表情とか、声調とか、分からなくてもある程度人が分かるでしょう。それってすごいことだと思わない？」
「……いやいや円居さん。ぼくにそんな超能力はないって。ただ、しのぶちゃんがあけっぴろ過ぎるだけ」

「そんなことないよ」
「いやいや円居さん。これは悪い意味合いではないんだ。ぼくはあけっぴろなしのぶちゃんのことを、嫌いじゃない。自分にとって、とても近しい人間に感じられるからね」
ぼくが言うと、円居さんはどうしてか寂しそうな表情で、僅かに俯いてしまった。
あれ？
彼女のこういう、あまり良くない類の表情を、ぼくはほとんど見ることはない。特に、俯くというのは彼女には相当珍しい表情と言える。
「あの……」
円居さんは何故か顔を真っ赤にして、下を向いたまま、口をもにゅもにゅとさせながらおずおずとこう口にする。
「わたしのこと、姫ちゃんて、呼んでくれますか？」
……へぇ？
「確かに。しのぶちゃんのことだけ名前で呼ぶのは、ちょっと変だよね」
今の言い回しも変だが。しのぶちゃんというのは本来、ぼくの目の前で、照れたように赤面して指を絡め合わせている女の子がそうなのだが。
……やばい。
クラっときました。

ふいに思い付いた、というよりは、彼女も違和感のようなものを感じてはいたらしい。
あの告白依頼、ぼくと彼女に対する態度は、ほとんどまったく変わっていない。まあそれはそのはず、気持ちを伝えたからと言って、その感情が余計に強まることはあっても、変化してしまうようなことは一切あるはずもなく。
そして彼女も、女の子として振舞うタイミングをなかなか掴めず

にいた、ということだ。退院してから学校で会えたのはほんの数日だし、それ以外はしのぶちゃんと円居愛のことで密談ともつかない話し合いをしていた。そして仕舞いに、ぼくはしのぶちゃんとデパートで待ち合わせなど行なっている。そういう訳で、彼女の方から行動を起こさざるを得なかった、という訳だ。彼女にしては人間らしい。

「……円居さん、というのは、確かに相当に他人行儀だよな」

それにしても、姫ちゃんと呼ぶのは何かあれだ。照れる。

「ねぇ姫ちゃん」

胸に広がる、練乳をチューブから飲み下すような感覚。

「何ですかアユムくん」

そういう彼女と、赤くした顔を取っ付き合わせて、辛うじて口を開く。

「しのぶちゃんのことなんだけどね。姫ちゃん」

「はい。アユムくん」

「どこにいると思う？」

「ゲームセンターとか」

「分かった。じゃあ姫ちゃん」

「はい。アユムくん」

「そこに行こう」

「そうですね」

さっきから、ずっとこんな感じの会話が続いている。照れが邪魔して長い文章を組み立てられない。姫ちゃん、と呼びかけることを避けながら話すということもできるのだけれど、というかそうした方が精神衛生的には良いのだけれど、何故か口を吐くのはこっ恥ずかしい呼称ばかり。

しのぶちゃんが自分の名前を嫌うのも分かる気がした。

「ところでアユムくん」

西条デパート内部、エレベーターで九階部分に来た時のことだ。

「何かな？　姫ちゃん」

「あの……。アユムくん、自分の名前好きじゃないって良くいうけれど、どうして？」
ああ。そのことか。
「開道歩、漢字に変換するとね。そりゃあもう前向きな感じになるじゃないか」
「うん。とても良いと思うわ」
率直な感想。何とも姫ちゃんらしい。
「小学生の時とか、担任が変わる度に『良い名前ですね』って言うんだよ。で、ぼくも自分の名前に添えるようにがんばる訳。でも、ぼくのもともとのポテンシャルは実際、知れている訳だし、結局先生はぼくのことを忘れてしまう。そういうことがある度、分不相応な名前だと意識させられてね。特に苗字の方」
「でもアユムくん。すごく良い人じゃないですか」
きょとん、と首を傾げる姫ちゃん。
いやいや。あなたは何を仰るのですか。
「あなたの名前を見て、素晴らしいと言ってくれた人がいたから。あなたはそれに沿おうとがんばれたのよ。それって、あなたとあなたの担任の先生が、すごい人だってことでしょう？」
結局、先生の期待には沿えなかったのだけれどね。
ぼくが苦笑すると、姫ちゃんは満足そうに微笑んだ。この子は、例えどんな笑い方でも、ぼくが笑顔を浮かべると喜ぶのだ。
ゲームセンターでは、しのぶちゃんが懸命にといった風にＵＦＯキャッチャーに興じていた。巨大なスヌーピーのぬいぐるみを獲得しようとがんばっている。服装がどこかのセーラー服なのは、気合の表れと見て取れる。
「おはようございます」
姫ちゃんがにこやかに挨拶をした。しのぶちゃんが振り向くと、キャッチャーに摘まれていたスヌーピーが落下する。
「何だおまえら。来てくれたのか」
目を丸くして、驚きと喜びを表現するしのぶちゃん。その人懐っ

こい笑みは、不登校と言う文句に程遠い。
昨日ぼくが推理したところによると、しのぶちゃんが学校に通う目的というのは、様々な外敵から姫ちゃんを守りきることではなかったのだろうか。だから、姫ちゃんと違う高校に通うようになって、学校に通う必要性はなくなった。けれどやっぱり姫ちゃんが心配だから、四六時中メールを送って無事を確認する。姫ちゃんも、きちんとそれに返信する。
「ごめんよ。随分と遅れてしまった」
「いいよいいよ。まさか来てくれるとは思わなかったからな。スヌーピー取れたら姫とどっか行こうと思っていたんだけれど」
「スヌーピーは取るんだ」
「おう。かわいいじゃん」
しのぶちゃんがそんな女の子らしいこと言っているのが、ちょっとおかしい。この子のことは、初めてできた同性の友達みたいに思うこともあったから。強くて頼れる、ぼくよりも背が高い、やんちゃな問題児。
ぼくがそんなことを考えていると、「何だよ」と言った風にしのぶちゃんがこちらを睨んで来る。ぼくは言った。
「もういくら使ってるんだい？」
「二千六百円」
諦めろ。
「しのぶちゃん。ムキになるところがあるからねぇ。五千円くらいにしておくんだよ」
今すぐやめろ。
「大丈夫。次に取る」
言いながら、しのぶちゃんは新たな百円玉を投入する。ＵＦＯキャッチャーが貯金箱に見える典型的瞬間だ。
ボタンを操作し、スヌーピーの鼻っ面にクレーンを移動させるしのぶちゃん。流石に二十七回目と言うだけあって、見事な操作性だ。スヌーピーはいとも簡単に持ち上げられ、そのまま穴に落とされる

のかと思いきや、一秒と持たずにクレーンから取り落とされるのであった。
「ああ～」
残念そうに頭をかくしのぶちゃん。ぼくはせせら笑いながら、しのぶちゃんの脇に立つ。
「ぼくがやるよ」
「おまえが？」
しのぶちゃんは面食らったような顔になった。
「確かに器用そうではあるけれどな。しかしＵＦＯキャッチャーは簡単じゃない。店側との壮大な心理戦なんだ」
スヌーピー一個に壮大も何もないと思うのだけれど。ぼくは自信満々の表情でしのぶちゃんに微笑んで見せて、それから胸を張りつつ、百円玉を投入する。
「良い方法を思い付いた。このスヌーピー、もう穴のすぐ傍にあるよね？」
「そうだな」
「持ち上げて、そのまま落とすだろう。そうすればこのスヌーピーはきっと、右か左に倒れる。右に倒れれば穴に落ちる訳だけれど、君が二十七回チャレンジした内の一回として、そういうことは起こらなかった。おかしいと思わないかい？」
「……！」
「そうさ。このクレーンはね。一度掴んだ獲物を必ず手放す上に、穴とは逆の方向に放り投げるような仕組みになっているのさ」
「ちくしょー！　騙された！」
店側の悪辣なる罠に、可憐な少女は騙され続けていた訳だ。ああ、何と哀しい話であろうか！
「差し当たって。ぼくの作戦はこうだ」
「ふむ」
「スヌーピーの左隣にクレーンを落とし込む。クレーンは獲物を捕らえようと口を開くだろう。その時こそ、スヌーピーはクレーン

が開く力に押されて右へ横倒しになり、穴へと落ちていくということだ」
「おまえ頭良いな！　流石アユムだ！」
「ふふん。それほどでもないさ。それじゃあ、やるよ。まあ、十中八九成功するだろうけどね」
「おいさ。早く取っちまえ！」
「じゃあ行くよ！」

二人で五千円擦りました。
「わ。わわわ。ねぇしのぶちゃんアユムくん。助けてっ」
メダル落としゲームで訳も分からず大フィーバーした姫ちゃんが、ぼくらに助けを求める声がする。何と無く気になったので遊んでいたら、ボーナスゲームが連チャンし続けて、メダルが攫え切れなくなったらしい。
「何これ怖い。ねぇしのぶちゃん。わたし怒られないかなぁ」
「……大丈夫だろ」
メダルなんてお金に変えられる訳もない。弱気な声で言う姫ちゃんに、憔悴した様子のしのぶちゃんがそう言った。大分、懲りたらしい。
『もうちょっと上の方に引っ掛ければ倒れるんじゃねぇか？』『もっと真ん中の方が……』『ここで台を叩くと言うのはどうよ？』『左側から引っ掛ける必要もないような……』『この足のところ、狙えないか？』『頭の上からクレーンで潰すようにすれば、弾みでどうにかなるかも……』などと問答しつつ試行錯誤。姫ちゃんが決めていた上限の五千円を突破した時は、二人とも割に清々しい気分で『諦めようか』と顔を見合わせたものである。
「わわわ。まただ」
ボーナスが続きすぎて、すっかり台を離れられなくなってしまった姫ちゃんの手伝いをしながら、自分の煩悩の深さに打ちひしがれる。しのぶちゃんも似たような表情で、放っておいても次々と台に

満ちて行くメダルを見守っていた。
「……これ。放っといて良いんじゃないか？」
しのぶちゃんが言う。だがしかし、そんなことをすれば台が詰まる危険が十分にある。
「ダメだよ。お店の人に怒られちゃう」
もう幾つ目になっただろう箱を積み上げながら、周囲からの好機の視線に身を縮こまらせる姫ちゃん。顔を赤くしていて動きも少しぎこちない。
「あの。後やっときましょうか？」
そう言ってくれた大学生くらいのグループの好意に甘え、ぼくらはメダルゲームコーナーを離れた。メダルの譲渡って認められているのかなぁとか思わなくもない。
「……怖かったよぅ」
「ああ。本当に、恐ろしかったね」
与えられたいと願う者に潤いはなく、無欲な人間が扱いきれぬ富に振り回される。そんな不条理を垣間見た気がした。
「さっきの人達に見られてる。そろそろお昼だし、早く出ようよ」
「待て」
ぼくとしのぶちゃんは同時に言って、姫ちゃんの肩をがっちりと掴んだ。
「すぐに来て欲しいところがある」
「速やかに移動願えるかな？」
「……へ？　な、何ですか？」
僅かに怯えている姫ちゃんをＵＦＯキャッチャーの前まで連行し、百円玉を投入する。
「……これをやれば良いんですよね？」
「如何にも」
自信なさげに、しかし友人の為に真剣に、姫ちゃんはかちゃかちゃボタンを操作する。
そして、一発で取りやがったのだった。

「色々あったけれど。結果として、取れて良かったのかな？」
姫ちゃんから進呈されたスヌーピーを抱いて、しのぶちゃんは頭を絞るように顔を顰める。
五千百円かかったけどな。と、口にすることは憚られる。支出の半分近くはぼくだったりするので。これに懲りて、ギャンブルとかは絶対しないことにしよう。
昼食を取ったのはそのあたりの定食屋。二人がいつも使っているのだという、安くて味の良い店だが、絶対に女の子が来るところじゃないと脂ぎった店内でそう思った。とりあえず店主、そんなでかいテレビでプロレスをしかも大音量で放送するのはやめろ。
姫ちゃんはあまり気にしていないようで、しのぶちゃんはぼうっと眺めながら「すげー」などと呟いている。
あいも変わらずカロリーメイトだけをぼりぼり食べている姫ちゃんに、余り物ということで親子丼を進呈し、ぼくはうどんを食べる。しのぶちゃんもそれに習っていた。
「姫ちゃん、お金はあるんだろう？　もっとちゃんとしたものを食べなくちゃ」
と、つい口をついたぼくに、しのぶちゃんはどこか哀れむような視線を向ける。その表情は悔しさに歪んでいた。
「良いのよ。こうしないとわたしは気分が悪くなるの」
寂しそうに、痛々しい微笑みを浮かべる姫ちゃんだった。
「……ごめんなさい。変なことだっていうのは、分かっているの」
きりきりと、しのぶちゃんが歯を噛み締める音が聞こえた。

そして、腹ごなしにと向かったのがボウリング場である。
「やったことねぇんだけどな。こないだ読んだ本でおもしろそうだったから」
と言って提案したのがしのぶちゃんである。
「わたしはちょっと自信あるよ。お兄ちゃんと来たことあるから」

姫ちゃんも乗り気である。ゲームでやったことのあるぼくも、実は楽しみでもあった。

最初の手続きから三人組は要領の悪さを大いに発揮し、レーンを人数分用意してしまいそうになったり、ボールとシューズを購入しそうになったりしながら、どうにかこうにかプレイへと漕ぎ付ける。

経験者の姫ちゃんが最初のプレイヤー。「それで、これをどうやるんだ？」と訊くしのぶちゃんに、「これを転がして、あれを倒すの」と酷くざっくりした説明をしたと思ったら、球を抱えてしゃがみ込みレーンに向かって転がした。

のろのろ進む球をにこにこと見守る姫ちゃん。しかしコントロールは妙に正確で、真ん中から申し訳無さそうに割り行った球は、ピンをぱたぱた倒しながらレーンの奥へと吸い込まれて行く。ピンは十番を残して九本倒れた。

「姫ちゃん。それ、違う」

突っ込むか突っ込まないか、かわいいから良いかなぁとか思いつつ、甘やかすから余計に変になるんだと自分に言い聞かせ、ぼくは指摘した。

「はい？」

「その穴に指を突っ込んで、下側からレーンに投げるんだ」

「……そうなんですか？」

首を傾げる姫ちゃん。君のお兄さんはいったい君に何を教えたんだと、と言うか周りがやっているのを見て気付けよと、言いたいことは色々あったがまあこのあたりは姫ちゃんなら仕方が無い。

「これを、投げるの？」

僅かに顔を顰めながら、右手の指を突っ込んだ球を左手で抱えて立ちあがる。１６と数字を振られた茶色いボールは、確かに姫ちゃんの手には余るのだろう。姫ちゃんのことだから、どういう意味かは分からないけれど、せっかくだから数字の大きな奴を選んだ、というところか。

「こっちでやってみて」

「はい」
４ボンドのボールを渡すと、姫ちゃんは相当に真剣な表情でレーンを見据える。「えいや」ぎこちなくボールを放った。
先程と比べれば壮快に、流れるようにボールはレーンを滑って行き、残りのピンを弾いて奥へと消えた。「やったぁ！」満面の笑みを浮かべる姫ちゃん。うん、才能あるかもね。
「ようし。次はあたしだ」
何の躊躇も無く１６ボンドのボールを鷲掴み、穴に指を入れる工程を忘れている。すかさず姫ちゃんが得意げにそれを教える。「おまえ良く知ってるな」おまえは人の話を聞け。「アユムくんに教わったの」照れたように言う姫ちゃん。ごめんそれ常識。
「んじゃ。行きますか」
乱暴に球を放り投げるとガタンと音がしてロフトボール。あちこち軌道を変えながら球は何度もバンパーにぶち当たり、十本のピンへと横薙ぎに突っ込んだ。その素晴らしく力任せな威力にピンは壮快な音を立てて一毛打尽。
「やったぁ！」
「しのぶちゃん、すごい！」
手を取り合う二人。そんなのありかよと思わなくも無いぼく。バンパーってあれ相当威力吸われるはずだよな、いったいどういう投擲力だったのだろう。
「次はアユムだぜ」
しのぶちゃんにそう言われ、立ち上がるぼく。
「がんばってね」
声援が心に染みる。しかしこの状況、見得を貼ろうと思ったら最低でもスペアを取らなければならない。どこを狙えばどう倒れるのか、テレビゲームの知識を再確認。……とは言え、嵌まりこんでいたのは確か小学六年生の時で、一回不登校になってから絵ばかり描いてゲームなんてする暇なかったんだよなぁ。いやしかし待て、いくら昔の話とは言え、確かぼくはあのゲームでパーフェクトを獲得

したことも、何度もあったはず。自信を持て。
などと。
そんな風に考える自分に気付いて、ぼくは苦笑する。
いつの間に、ぼくは女の子の前で格好付けようなんて、そんな当たり前のことを考えるようになったんだろうなぁ。
「おいおい。そんな考えたって一緒だぜ」
と、背後からしのぶちゃんの声がかかる。
「それもそうだね」
言って、ぼくはボールリターンに駆け寄った。
「アユムくん。がんばって」
姫ちゃんの声援。ぼくはとても充実した気分で、球を拾い上げた。
運動不足のぼくにはそれはとても重たくて、それだけに、どんなピンでも倒せそうな頼もしさがあった。
「それじゃあ」
目一杯ピンを睨んで、腕が千切れそうになるのを感じながら、ぼくは不恰好にボールを投げ付けた。

「しかし。まさかこんな盛り上がるとはな」
一番は１７５点を獲得したしのぶちゃん。二番は１５２点の姫ちゃん。ぼくは三番で１５０点。
無論と言うか最初っからこんな記録を打ちたてられる訳もなく、日が暮れるまでゲームを繰り返した結果である。しのぶちゃんなど、最初は１００点に届かなかったが、もともとの体力と飲み込みの速さで、熟練者にも難しいその記録を獲得した。最初から最後まで得点が変わらなかったのが姫ちゃんで、最初のゲームではしのぶちゃんに「すげぇ！　天才だ！」としきりに言われていたものである。
「でもアユムくんも、すごく記録伸びたよね」
「まぁね」
ゲームの知識を現実で使えるようになったのだ。とは言え、もともとぼくは運動音痴で向上心の無い根暗少年、これ以上記録が伸び

ることもないことだろう。
「汗かいた」
そう言って服の中に手を突っ込むしのぶちゃん。はしたない。
「それは同意だね」
「風呂入りてー」
「それじゃ、今日はお開きにしますか」
「おー」
「そうだね」
「アユムさん。明日は寝坊しちゃダメですよ」
「面目ない」
などと言いつつ店を出る。夜の涼しさが肌に心地良い。「それじゃ、わたしこっちなので」という姫ちゃんの脇に、ぼくとしのぶちゃんが付ける。
「はえ？」
「こんな夜中におまえ一人じゃ絶対に心配だ」
と、渋い顔をするしのぶちゃん。絶対に、のところに力が入っている。以前何かあったのだろうか。
ボウリング場と西条デパートは公園を挟んだ目鼻先の位置にあり、姫ちゃんの家から数分の距離だった。すぐ傍にコンビニもあるし、姫ちゃんの家は、相当に立地条件に恵まれていると言える。
暗闇の中に黒塗りの屋根が溶け込み、槍の付いた丙が妖艶な迫力を放つ、誰が考えたんだと是非に問いたい悪趣味な装飾の家に姫ちゃんを送り届ける。名残惜しそうな顔をしながらも、姫ちゃんは清々しい笑顔で
「今日は楽しかったね。ありがとう！」
と言って家に引っ込んだ。ありがとうて。
「しかし。姫と遊ぶといつも思うんだがな」
「うん？」
「こうして家に帰す時、ものすごい罪悪感があるんだ。あいつにとって、家庭っていうのは決して居心地の良いところじゃないみた

いだから」
「……言ってもしょうがないよ」
ぼくは肩を竦める他なかった。
「これで良いのかなぁ、このままで良いんかなぁって、いつもいつも、思って、動いて、喚いて。結局何も達成しないんだよな」
「そんなことないさ」
ぼくは毅然として言う。
「そんな風に思ってくれている友達が一人でもいなきゃ、姫ちゃんは死んでしまっていたと思うよ」
「……縁起の悪いこと言うなよな」
「或いは、今の姫ちゃんはなかったかもしれない。君が達成したことは、姫ちゃんやぼくにとってとても大きい。感謝したりないくらいだ」
「ありがとうよ。……しかし」
しのぶちゃんはちょっといやらしい顔でぼくを覗き込んで、せせら笑うように
「おまえ。いつの間にあいつのこと『姫ちゃん』なんて呼ぶようになったんだ？」
あ。やっぱり指摘されたか。
ぼくが嬉し恥ずかし、今朝西条デパートに向かう途中でのことを話すと、しのぶちゃんは物珍しそうな顔で何度も相槌を打った。
「へぇ～。そうなったのか。あたしはてっきり、何のかんの言って、おまえの方からことを進展させるもんだと思ってたぜ」
しのぶちゃんが意外に思うのももっともだ。ぼくにとっても、姫ちゃんがあんなこと言い出したのは不意打ちだったんだもの。
「何と無く言うけれどさ。実は前に、姫から相談を受けたんだよ。『アユムさんに好きって言われた。どうしよう』って」
「それ先言えよ！」
つーか何と無くでカミングアウトすんな。
「それで。何て返したの？」

「ああ。『あいつはどうなったって受け入れるさ。姫の好きにしろよ』って送信したかな？　いやーあの時は焦った焦った。まっさかあいつから恋愛ごとの相談を受けることになるなんて」
その言い方だと、まるでしのぶちゃんが恋愛上級者のようである。とてもそんな風には見えないが。
「おまえらはおまえらで、ちゃんと進めるべきことは進めて、考えるべきことをちゃんと考えているんだな」
「どういうことだい？」
「このままじゃダメだと思ってさ」
物憂げな表情で、しのぶちゃんはどこか寂しそうにそう口にした。
「何だよ」
「んにゃ。おまえらのことを言ったんじゃねーぜ。あたしのこと」
「だから、何？」
「おまえにデパート来いって言われてさ。これに従っていれば、アユムの言うとおりにすれば、ひょっとしたら何か変わるかもしれない。そんなことを思ったんだが、しかし結局一日が過ぎてみれば、ただ休日に友達と楽しく遊んだだけだ」
溜息を吐くように、そう話すしのぶちゃん。
「……悪いな。これじゃ、今日一日遊んでもらったおまえらに失礼だ。……つーか、あたしが甘えすぎなんかな？　中学生の時までは、姫には指一本触れさせねーぞって粋がって、勉強はできなくてもしっかり者のつもりだったんだが。高校で姫と別れて、一人にされてダメになったのは、あたしの方だ」
「……姫ちゃん風に言うよ」
閑散とした、ほとんどの遊具が撤去され、寂れた児童公園が見えて来る。静かに光る外灯は、新鮮な光で僅かに夜を潤していた。
「転んじゃったんなら立ち上がれ。誰かは見守ってくれるさ」
我ながら、捻くれた男である。
こんな風に陳腐な文句は、ぼくみたいなのが言っても戯言だからなぁ。だからって姫ちゃんの名前を持って来て見たのは良いけれど、

結局言いたいことは完全に言えてない。誰かは見守ってくれる、何て、本当にヒネた文句だ。
まあでもこいつなら分かるだろ。ぼくら、結構似た者同士なんだからさ。
「君は学校に通う為の努力として西条デパートへやって来て、それでこのままのやり方じゃダメだって思った。学校に行こうとする意思と、自分で考える力を持っているんだよ」
「……」
「だからさ。今日家に帰ったら、布団の中で悶々と自問自答してりゃ良いさ。もしかしたら、吹っ切れるかもだぜ？　知らないけれどさ」
「ふふん」
口を尖らせつつ、しのぶちゃんが笑う。
「人の気もしりゃせんで。まあせいぜいがんばりますよ。見守ってくれてる誰かさんの為にもね」
言って、しのぶちゃんは両手を首の後ろで組んで、そっぽを向いた。その時。
鼻の先を何か丸いものが横切ったかと思うと、背後でガシャリと乱暴な物音が響いた。振り返ると、道路に設置されたゴミ箱が、何かを乱暴に放り込まれたようにがたがたと揺れている。
「ナイスシュート。自分で言うのもおかしいけれど、流石は一年生で部を全国大会に導いたポイントゲッターだけはあるよ」
気分も良さそうに肩を揺らしながら、こちらに近付いて来る影があった。
「まあ的はでかかったしぼくは滑り台の上にいた訳だから。あんまりそうそうすごいことでも、ないのかもしれないなぁ。とは言え目を瞑っていたことを考えると、神業と言えば神業かな。ねぇ舞姫ちゃん」
親しげにそう問い掛けて来る少年の胸をひん掴み、大きく振りかぶって力一杯、しのぶちゃんは少年をぶん殴る。防ぐ気も避ける気

もないようにただ目を丸くした少年は、大いに吹っ飛んで公園の丙に頭を強か打ち付けた。
「何しに来た？」
しのぶちゃんが問い掛けると、円居愛は裏返った昆虫のような動きでひょろりと立ち上がると、親しさのこもった笑みを浮かべてしのぶちゃんの頭に手を伸ばした。
「大きくなったねぇ」
はにかむように笑って、円居愛はしのぶちゃんの頭を撫で付ける。
「殴る力も本当に強くなった。昔は撫で付けるような力しかなかったのにね。背だってすごく伸びたね。百六十五センチは超えているんじゃないのかい？　スタイルだって抜群だ。男の子が放っておかないだろうね」
「触んな！」
言って、しのぶちゃんは円居愛の頬を殴り飛ばす。受身を取る姿勢すら見せず、円居愛は無様と形容しても良いくらいに、地面へと体を転がした。
「すごいねぇ。舞姫ちゃん、もう大人になっちゃったんだね」
「何でおまえがこんなところにいるんだ？」
怒気を孕ませた声でしのぶちゃん。
「つれないなぁ。ずっと一緒にいたんだよ？」
残念そうな表情をしながら、円居愛は立ち上がって体についた埃を払う。
「西条デパートに入って行った時も、ゲームセンターで遊んでいた時も、ごはんを食べていた時も、ボウリングをしていた時も。僕はずっと妹の後ろで、君達のことを見ていたんだよ」
「……」
「父と僕の食事を用意したと思ったら、妹は朝の早くから出かけて行った。僕は心配性のお兄ちゃんだから、今日一日妹を見守ることにしたんだ。ダメだねぇあんまり干渉し過ぎると、妹に嫌われちゃうかもね」

それで。姫ちゃんが家に帰るのを確認して、ぼくらにちょっかいを出しに病院で待ち伏せていた、という訳だ。
「落ちているボールを見付けて、ひさしぶりにやってみたんだ、バスケ。でもやっぱりおもしろくない」
「……」
さて。どうしたものか。
この男を警戒しない理由は最早無い。とは言え、下手に手出ししたり、この場を逃げたりしたら、その所為で姫ちゃんに被害が及ぶ可能性も、ひょっとしたら存在しているのだ。
「妹さんから、あなたは部活動はしていないと聞いたことがあるんですが」
ならば。とりあえずは和解の糸口くらい探ってみるべきだろう。そう思っての発言だった。
「ああ。一年生の内にやめてしまった。大会終わったら途端に飽きちゃって。同じことを何年も続けるなんて、そんな忍耐力はぼくにはなかったということかな」
「それでも。実力はあるそうですね」
「努力したから、チームで一番だったよ」
当たり前のことのように、さらりと口にする円居愛。
「人の言うことが聞けない性質で。だからこうして、昼間にやらない分を夜中に一人で練習することが多かったんだけど。しょっちゅう文句を言われたんだ。でもそれで正解だったと思うよ。体育館で僕を見付けて、良い顔をする部員はほとんどいなかったしさぁ」
話を聞いて欲しい中学生みたいな言い方だった。円居愛は隠す気のない愉快さを発散させながら、ぼくに話しかけて来る。
「スポーツのことは、良く分かりませんね」
「僕もだよ。ちょうどバスケが流行っていたし、学校で一番強い部活動がそれだったからって入部したのは良いが、自分の思った通りにはならなかったねぇ。ただ目立ちたいだけなら、チームプレイのあるスポーツはしない方が良いよ」

「本当ですねぇ」
「そもそもさぁ。バスケットボールって、あれは由来はどんな儀式だったんだろ？　サッカーの由来は豚の頭の骨を蹴り回すことで、フットボールの由来は豚の腸を投げ合うことだって、訊いたことがあるんだけど。首無しバスケットボーラーとかいう都市伝説を聞いた時、ぼくはバスケの由来を切り落とした人首を使った遊びだと思ったんだよ。抗争の後とかでさ、ありそうじゃない？」
自分で言ったことがおもしろいと思ったのか、円居愛はそのままけらけらと笑う。無垢で、無邪気で、愛嬌のある、人好きしそうな笑い方だった。
「そんなことを考えながら、バスケットボールをやっていたんですか？」
「突飛なことを妄想するのは楽しいじゃないか。例えば今朝妹は魚を焼いて出掛けたんだけれど。もしも人間を丸焼きにしたとして、どこにどう箸を伸ばせば効率的に食べられるのかなんて、僕はそんなことを考えながら魚をおいしく頂いたんだ。と言っても、人間を食べるなら、丸焼きより部位ごとに調理した方がおいしいとも思うんだけれどね」
とんでもないことを思いつくままに、と言った具合である。しかしその表情を見るに、僕らを不気味がらせようとこんな突飛なことを言っている訳ではなさそうだ。その声調から読み取れるのは、ただの好意と親しみであって、悪意などは一切含まれていない。
考えるに。きっとこの男は、こんなことくらいしか話せることのない程度に口下手で。
でも妹の友達としての僕らに無限の好意を向けているから。それでどうにかコミュニケーションを図ろうとして、結果としてこんな途方も無いことを口走るのだろう。
こういうところが、ほんの少しだけ姫ちゃんに似ているような気も、しないでもない。
「そういうナンセンスな思考は、確かに楽しいですね」

「そうだろう。人間はね、ただ何もせずに思考しているだけでも尊いんだ。ところで歩君は絵が描けるんだったよね。一度、生きた女の子の周りを食器を持った人間が取り囲んで、拘束された女の子が悲鳴をあげるのを構わず、もぐもぐ箸を伸ばしているみたいなイラストを描いてみてくれないかな？　何なら忍をモデルにしてくれてもかまわないよ」

ぼくが応答に困っていると、円居愛は僅かに眉を顰める。しかし次の瞬間には気持ちの良い笑顔を作った。

「悪い悪い。僕はあまり話すのが上手な方じゃなくてさ。君みたいに真面目に頷いてくれる人がいると、ついつい饒舌になって……。ありがとう歩君、僕はやっぱり君のことが大好きだ」

「それは光栄です」

ぼくはそう言って、唇を僅かに歪めた。

「妹さんとは、良く話をされるんですか？」

「ああ。そうだね」

円居愛は照れたように笑った。

「妹は優しいからね。時にそれは違うと首を振りながらも、真剣に話を聞いてくれるんだよ」

「妹さんとは仲が良い？」

「ああ。世界でただ一人だけ、僕のかわいい忍だよ」

陶酔したように語る円居愛。彼にしては言葉が端的なのは、それだけ純粋な好意であることを意味しているのだろう。

「何だよ。それ」

と、そこでしのぶちゃんが地面を踏みしめながら口を挟む。

今まで良く黙っていてくれた。しかし、親友のことが話題になり始めると、彼女を止める術はない。

「おまえが一度でも、あいつの本当の幸せを願ったことがあったか？」

「そう言われると、もしかしたら、それはなかったのかもしれない」

円居愛は甘んじて受け入れるように、神妙に頷いた。そして
「だがこれだけは確かだ。僕は、忍を愛している」
そう、誇らしげな口調で言ったのだった。
「……赦さねぇぞ」
しのぶちゃんは円居愛を睨みつける。
「おまえが姫にしたことを一つでも、あたしは赦さないからな」
特定の人物をここまで強い嫌悪を向けることが、はたしてできようかという、純粋な敵意に満ちた面相。今にも円居愛を殺しにかかりそうな、そんな気迫さえ、今のしのぶちゃんには備わっていた。
「ありがとう」
円居愛は感動したようにはにかんだ。
「そこまで強くあの子のことを思ってくれる人がいて、僕は本当に嬉しいよ」
しのぶちゃんは円居愛を殴り飛ばした。
円居愛は避けようともしないで、地面に転がった。
「……しのぶちゃん」
「あいつには何を言ってもダメだ。とっとと帰ろう」
「……」
しのぶちゃんは振り返って、僅かに肩を震わせながら歩き始める。
一文字に結んだ唇は、何かを押し込めるように震えていた。
ぼくは円居愛の方を振り返った。
純粋な好意に満ちた笑顔で、円居愛はばいばいと、こちらに向かって手を振っていた。

四章

鏡の前に立ったのはただの感傷だった。根暗は昔読んだ漫画のことなど思い出しながら、鏡の前でポーズなどとってみたりする。

すげぇ不気味だ。

不健康な生活で乾燥し切った唇に、表情の無い頬、深くクマの刻まれた瞳、何らかの魔物が潜伏していそうなボサボサの髪。シニカルな笑みを浮かべているつもりであるその顔は、ハルシオンか何かで陶酔する麻薬中毒者にしか見えない。細いばかりの腕が挿す斜め上方には、ディズニーアニメのキャラクターが描かれたカレンダーがあった。

鏡に映る自分の姿に噴出して、ぼくはけらけら笑いながら足元に顔を伏せる。僅かに窺えるその時の自分の表情は、少しはマシになったかな、と自分で思える程度にはあからかだった。

さて。時刻は朝の五時十七分。

暇だ。

早く起きすぎた。というか昨日は一睡もしていない。

退屈しのぎに天気予報でも見ようかとテレビの前をうろついたのは良いが、画面の点け方が分からない。買い換えたということは知っていたのだけれど、だがテレビジョンというものは、画面の前側に電源があるのがふつうではないのか。

リモコンでしか電源が入らないようになっているのだろうかと思い、手に取ってみたのは良いのだけれど、これも反応しない。はてこれはどういうことか。¥

悶々と考えていると、チャイムが鳴り響く音が聞こえた。

扉を開けた。

「やあやあ」

円居愛だった。

「おはよう歩君。こちらは綺麗な良い一軒屋だね、羨ましいよ。

僕の家なんて、何だかギャングのアジトみたいな装飾ばかりだからさ。お父さんのセンスなんだが、あまり良い趣味だとは言えないだろう？」
ぼくに何かを言う隙を与えることもせず、視線だけはこちらに向けてべらべらと話し始める円居愛。
「聞いて驚いてもらいたいのだけれど、あの家、空調設備は整っているのだけれど、窓はほとんどないんだ。一階の窓なんか全部ガムテープで閉じちゃっていてね。それから家の鍵が一つしか無くって、それをお父さんだけが持っているものだから、あの人が出かけていると僕らは二階から家に上がるしかなくなっちゃう。まったく困ったものだと思わないかい？」
「……そうですね」
「ところで歩君。今はまだ五時だよ、良く起きていたね」
飄々としてそんなことを言う円居愛。ぼくは苦笑いすることもせずに、目の前の男に尋ねる。
「何しに来たんですか？」
「君を迎えに来たんだよ」
円居愛はにこにことして応える。
「昨日は妹が君の家を訪ねたそうじゃないか。だったら、今日は君があの子を連れ出すのが道理だと思ってね。そうしてもらう為に、僕はここにこうしてやって来た」
「……そうですか」
どこまで本音で言っているのかは分からないが、全てが本音ではないことは確かだろう。
「少し待っていてください」
「君がそういうなら、いつまでも待つよ」
円居愛は綺麗に微笑んで言った。
ぼくは部屋の奥へと引っ込んで、最低限の身支度が入っている机から、家の鍵とペンとメモと催涙スプレーをポケットの中に放り込んだ。そしてしのぶちゃんにメールを一通、送ろうかと迷う。

「うん。これではまるで、本物の芸術家の部屋だな」
部屋の隅っこ、いらなくなったものを押し寄せた場所に座り込んで、円居愛はそう言った。
「家財用具に勉強机、その上に置かれたコンピュータ。鉛筆画なんかは、こちらのボードに向かって描いているようだね。これじゃまるで、君が絵画とパソコンとベッドで寝ること以外、何もしていないように見える」
いつの間に部屋に上がりこんでいたらしい。こうしてぼくの部屋についてあれこれ口にするのは、無礼に対する開き直りのように思われた。
「おうや。こんなものがあるじゃないか」
言って、円居愛はゴミ箱の中から将棋盤を摘み上げる。
駒のデザインが格好良いので買って、遊び方も分からず捨てたものだった。円居愛は駒を盤の上にぶちまけて、子供のおもちゃ遊びのようにそれを指先でいじくりながら、楽しげにいう。
「なぁ歩君。都合が着くならでかまわない。時間もあることだし、僕とこれで遊んでみないかい？」
「ぼく、ルールも知らないのですが」
「問題ないよ」
円居愛は楽しげにそう言って、駒の中からいくつか図体の大きなものを選び、盤の端と端にそれぞれ並べ始める。
「これを順番に指で弾いてさ。相手の駒を全て盤から出した方が勝ちだ」
「それ、どれが自分の駒だったか、分からなくなりませんか？」
円居愛は愉快そうに首を振った。
「君に限って、それはないよ。君は、映像や風景をそのまま記憶することに関しては天才的だ。意識さえしていれば、駒についた微細な傷まで正確に暗記ができるはずだよ。かと言って、別に観察力や注意力があるという訳でもないのが、君のおもしろいところなんだけれどね」

「そんな風に言われたのは、初めてですよ」
「そのはずだ」
円居愛はシニカルに笑った。
「だが君の絵を見れば、誰もが君を直感像素質者だと気付くはずだ。それは類稀なる才能だよ、大切にしたまえ」
「絵画の役に立つのなら、嬉しいですけれどね」
ぼくは曖昧に笑って、将棋盤の前に座った。
「先行、頂いて良いですか？」
「かまわないよ」
しばらく真剣に思案して、ぼくは自分の駒のいくつかを纏めて将棋盤の中央に弾き出した。
円居愛はそうしたぼくの駒をすかさず攻撃する。早くも一体、やられてしまった。
ぼくは残りの駒を盤の中央に集める。円居愛は訝しそうにしながらも、自分の駒を鋭く弾いた。
会話も無く、表情すら変化しない、静かな攻防戦の中で、ぼくは何と無く、円居愛という人間を理解しようとしていた。でもそれ以上に、お互いこのゲームに勝つために、一生懸命であるに違いない。

円居家に辿り着いたのはちょうど七時を回った頃合だった。円居愛は家の前で丙に背中を預けるなり、ぼくに微笑んでこう言った。
「ぼくは先に西条デパートへ着いておくから。君は忍を連れて出て来ると良い。もう起きているはずだから」
「……今日もぼくらを尾行するつもりですか」
「当然だよ」
ぼくの質問を意外とさえ、感じていそうな円居愛の声だった。
「何か不都合でもあるのかな？」
無邪気で無責任な、そんな疑問が含まれた質問だった。
「いいえ。そんなことは、ありませんが」
ぼくは小さく首を傾げて、曖昧に口にする。

「でもそれだったら、ぼくらと一緒に行動すれば良いだけの話でしょう？」
円居愛は一瞬、ぼくの言動が心底解せないといった表情をして、次に寂しそうに顔を伏せた。
「ならないよ。僕は舞姫ちゃんに蛇蠍の如く忌み嫌われているからね。君らの楽しい休日に、影を落とすようなことはするまいさ」
どうやら本気で口にしているようだった。
「二人が小学生だった頃くらいまでは、舞姫ちゃんとも良く遊んだんだけれどね。今じゃすっかり、どうしてだか、顔を見ただけで殴られるような関係になってしまった。哀しいことだよ」
今度は彼は、嘘を付いている。さもなければ自分を誤魔化している。
少なくとも、その原因が自分自身に起伏していることは、気付いてはいるのだろう。
「一度、真剣にお話をなさってはどうですか？」
「僕はいつも真剣だ」
憮然とした調子で、そう言い返される。
「……まあ良い。僕はデパートが開店したら、この間の喫茶店に行くから。できたら、店の前でも通ってくれると、後ろを付けやすくなって助かる」
「……てっきり、デパートの前で、ぼくらが来るのを待っているものかと思っていましたが」
「昨日はそうしたよ。でも、今日は事情があるんだ」
円居愛は人懐っこい笑みを浮かべて、それから円居家の玄関を手で指した。
「それじゃあ。……妹をよろしく頼む」
「分かりました」
言って、ぼくと円居愛はお互いに背を向けた。
「……わざわざありがとう。とても嬉しいよ」

玄関のチャイムを鳴らすと現れたのは寝巻き姿の白い妖精だった。寝ていたのを起こしてしまったかな、と思って、彼女が手の平に白い靴下を握っていたことでそれが杞憂だと分かった。

着替えてから出てくれれば良いものを、何の躊躇も無く。しのぶちゃんと言い姫ちゃんと言い、寝巻きで人前に登場することを恥と思わない性格らしい。もしかしたら、ぼくに気を使って早く中に入れようとしてくれたのかもしれない。

「それじゃあ。まだ早いし入って」

「うん」

綺麗に磨かれた、しかし脇には本やおもちゃの積まれた廊下を進み、急な階段を登って姫ちゃんの部屋は二階のもっとも奥の場所にあった。二階の廊下には爛漫な表情をした悪魔の木造や、ぼくの身長の半分はありそうな動物のぬいぐるみ類が壁にかけられており、部屋の外から姫ちゃんを監視するようでもあった。

「……これらはいったい？」

「ぬいぐるみはお兄ちゃんの、そこの木造はお父さんのです」

そういうと、姫ちゃんは外側に鍵の取り付けられた扉を引いて、ぼくを中に案内する。いくつかの理由から物怖じする自分を意識しながら、恐る恐る姫ちゃんの部屋に足を踏み入れた。

カーテンの無い大きな窓と、床に直轢きのふとん。その上に転がった白い携帯電話。隣には衣類とノートパソコンと学習鞄、学校の教科書に筆記用具が、これまた床に直接。女の子らしくかわいらしい雑貨が部屋を包囲するように、壁際でじっと立ち尽くしていた。どうもこれは、円居家の癖ということらしい。

「この部屋の外に、姫ちゃんの持ち物はないのかい？」

「うん。この家で自分の部屋があるのは、わたしだけだから」

と、僅かに誇らしげに姫ちゃんは言った。

しかしだとすると、色々とおかしいんだよなぁ。

何せ女の子の部屋だというのに、化粧棚どころか化粧具の一つも転がっていない。お母さんはもういないというし、この家に女の子

は姫ちゃんだけのはずだったから、人から借りて使うこともできない。
　というか化粧棚以前に棚というものがこの部屋には一つとしてない。机も椅子も無い。そして六月も半ばを過ぎたこの時期に、エアコンも扇風機もこの部屋には設置されていなかった。ぼくの観察力が追いつかないだけで、他にもおかしな点はいくつかあるのかもしれない。
「ごめんね。持て成せるようなこと、わたし、ないんだ」
　せめてとふとんの上に座るように勧められる。確かに、真白い床がむき出しに成っていないのはこの部屋でそこだけだ。何と無く背徳的なものを感じながら、姫ちゃんが寝ていたふとんの上に腰掛ける。
「いいや。それは全然構わない。しかし姫ちゃん、家ではいつも何をしているの？」
　ぼくの質問の意図が掴みかねたのか、姫ちゃんはかわいらしく首を傾げて、そして頭に思い浮かべながら、という風に
「お料理とお洗濯とお掃除と。しのぶちゃんとメールでお話したり、一緒にネットゲームをしたり、カロリーメイト食べたり、ちょっとだけお勉強したり」
　そうか。パソコンがあったか、とぼくは銀色のノートパソコンの方を見やる。思えば、いつかネットゲームに誘われたこともあったか。その視線に気付いたのか、姫ちゃんはどこか嬉しそうに笑いながら
「それ。しのぶちゃんが買ってくれたんだよ」
「へぇ。どうして？」
「あのね。小学生の時に、しのぶちゃん、いつかわたしに暖房器具買ってくれるって言ったんだ。寒いからね。でもわたし、それだったら夜にもしのぶちゃんと話がしたいから、パソコン欲しいなってわがまま言っちゃって。中学生になって、それが叶ったの」
「へぇ」

そこは暖房優先しろ中学時代の久重里舞姫。
……まあでも、この子が自分の望みを口にするなんてこと、滅多になかっただろうしな。しのぶちゃんとしては、何を置いてもそれを叶える他になかったのだろう。
「学校でもお話できるから、今は携帯電話の方が便利なんだけれどね。高校生に成った時買っちゃって」
「お金はどうしたんだい？　今度もしのぶちゃんが？」
「ううん。お兄ちゃんに頼んだら、くれた」
「……そう」
だったら先に暖房器具買えよ、と思わざるを得ない。
「なあ。姫ちゃん」
「何かな？」
かわいらしく首を傾げる姫ちゃんに、ぼくは精一杯言葉を選びつつ、どこかおずおずと、物怖じしたような訊き方で、こう尋ねた。
「あんなお兄さんで、苦労しない？」
「……そうね、ちょっと大変なこと、あるけど」
姫ちゃんは珍しく、曖昧な感じの笑みを浮かべた。
哀しそうな、寂しそうな、そんな笑みだった。
「でも。優しくて面倒見てくれる、大切なわたしのお兄ちゃんだから」
それは確かに、本心からの好意の言葉で。
ぼくは何とも言えず、ただ曖昧に相槌を打つだけだった。
「……アユムくんは、変わらないよねぇ」
くすくすと、姫ちゃんはおかしそうに笑う。
「……変わらない？」
「うん。入学式の日に、わたしに声をかけてくれた時から、ずっと、変わらないよ」
そう言って、それから取り繕う風でもなく
「でもわたしは、そんなアユムくんがずっと、好きだよ」
その言葉が何故か、ぼくの心臓に限りなく近い部分を、鋭く抉っ

たような気がした。
「……なぁ。姫ちゃん」
「何かな？」
姫ちゃんのようにはいかず、少し歪に笑いながらぼくはこう言った。
「君ってさ。世の中に一つでも嫌いなこと、あるの？」
ぼくの質問に、姫ちゃんは小首を傾げて
「多分、ないよ。なくちゃダメなのかな？」
無邪気な疑問を口にした。

「……なぁアユム。あたしらって、ぜってー他に友達できないよな」
「何だよ唐突に」
言って笑って頬を歪めて、ぼくはしのぶちゃんから視線を逸らした。
「いや、何と無くだよ」
言って、しのぶちゃんはそっぽを向いた。隣り合って歩いているのに、お互いに違う方向を向いているという形になる。お互いに考えていることが同じであるだけに、顔を見ることができないのだ。
西条デパートに着く前にしのぶちゃんの家に寄るという考えもあったのだが、デパートに向かうことの趣旨を思い出してそれはやめた。
しのぶちゃんは今度は一階のパン屋の試食コーナーで、だらだら菓子パンを貪っていたところ発見された。はしたない。それから特に目的もなく、三人でデパート内をふらつきまわって早数分。
意見を言わない三人組である。場の状況を観察するだけでどんな風に物事が転んでも楽しめてしまう性質のぼくは、しかし今回は自分の希望を口にしてみることにした。
「行きたいお店があるんだけれど、良いかな？」
「良いともさ。そうしよう」

言って、ぼくは地下一階、いつかの喫茶店の方へと足を運ぶ。姫ちゃんが「ここ、知っているんですか？」と弾んだ声で口にするので、ぼくは笑顔で首肯した。

ぼくら三人が店に入ると、どういう訳か巨大なキャリーケースを脇に置いて、さも楽しそうに机の上でお絞りの袋を裂いてあそんでいる円居愛がこちらに気付く。信じられないものを見るような、恐怖するかのような、そんな表情だった。

「お兄ちゃん！」

両手を合わせて、爛漫な表情で叫ぶ姫ちゃん。ありったけの嫌悪を視線に込めて、円居愛に向かって射出するしのぶちゃん。ぼくはそんな二人に構わず、キャリーケースをどかしてから円居愛の隣の席に滑り込む。

「どうも」

「……ああ。奇遇だね」

言って、円居愛は人好きする綺麗な笑みを取り戻す。非難するような視線を向けるしのぶちゃんと、それに気付いて困ったような顔をする姫ちゃん。ぼくが目配せすると、しのぶちゃんは憮然としてぼくの隣に座った。

「何か欲しいものはあるかな？　何でも言ってくれよ」

メニューを差し出しながら貫禄たっぷりに、円居愛は言った。

「本当？」

姫ちゃんがそこで目を輝かせる。

「ああ。お兄ちゃんが何でも好きなものを食べさせてあげるよ」

にこにこと、円居愛は妹に笑いかけた。姫ちゃんは照れたように笑って、親にものをねだる子供そのものの態度でメニューを指差して注文を決める。その様子を、円居愛は心底満たされた、まるで良いお兄さんですらあるかのような目で見詰めるのだった。

「君達は何か？」

「それじゃあ。オレンジジュースください」

喉が渇いていたぼくは迷わずそう答えた。喫茶店に来といて難だ

が、コーヒー紅茶の類はあまり好かない。というかほとんど飲んだことがない。
「舞姫ちゃんは？」
「いらない」
憮然として、自分の肩に首を横たえたまま、敵意のこもった声色でしのぶちゃんは言った。
「そうか」
これ以上追求しても無駄だと悟ったのか、円居愛は店員を呼んで注文を済ませてしまう。それから、ぼくとしのぶちゃんの方を向いて、笑みを浮かべて言った。
「いやぁ。こうして四人で会うのは初めてだったかな。僕はとても新鮮な気分で、そして嬉しいよ」
「そうだね」
しのぶちゃんの方を窺いながら、姫ちゃんがおずおず同意した。
「わたし、びっくりしちゃった」
「それは僕もだよ。しかし忍、いつの間にこんな素敵な友達を作ったんだねぇ。お兄ちゃんは嬉しいよ」
「ありがとうお兄ちゃん。でもねお兄ちゃん、いつものことだけれど、どうして一人でこんなところにいるの？　ここ、そんなに好き？」
「あはは。昔、おまえと良く来たところだからねぇ。最近、僕は生徒会の仕事が忙しくておまえと遊べていないだろう？　そのことでちょっぴりセンチメンタルになるとねぇ、ついここに来ちゃうんだ」
「お兄ちゃんてば」
「あはは」
「ふふふ」
「あはは」
ガツン、と。
ガツンと、しのぶちゃんが拳から血が出そうな勢いで、テーブル

を強か殴りつけた。
「……なぁ」
円居愛はけらけらとおもしろがるように、姫ちゃんはおろおろと困ったように、しのぶちゃんの方を見やる。
「何だい？　舞姫ちゃん」
「……てめぇじゃない。アユムだよ」
頬杖をついて兄妹の茶番を傍観していたぼくは、瞳だけをしのぶちゃんの方に転がした。
「どうしたの？」
「何でまた、この兄貴がいるのに席に着いたんだ？　……つーかおまえ、もしかしてここにこいつがいるの、知っていたんじゃなかろうな？」
「そうだよ」
流石はしのぶちゃん。勘は鋭いのだ。
「……分かっているのか？　姫には悪いが、あたしはこの糞兄貴のことが心底嫌いだ。反吐が出る。それが分かって、こんなところにあたしを連れて来たんだろう？」
「そのとおり」
ぼくは努めて飄々と答えた。
「何故だ」
「お兄さんのいるところからは、姫ちゃんの身にほとんど左手しか届かない」
そう言うと、円居愛が僅かに表情を歪めてこちらを向いた。
構わずに、話を続ける。
「そしてお兄さん左隣にはぼくの体が、右隣には店の壁がある」
「何が言いたい？」
「しのぶちゃん。君は安心して、このお兄さんに言いたいことが言えるんだ」
ぼくが言うと、円居愛はどこかしら寂しそうに笑った。
「歩君。君のその行為には、僕に対する思いやりが僅かばかり含

まれているものだと、僕は捉えてしまいたいのだけれど」
「かまいません」
「何がしたい？　おまえは」
しのぶちゃんは怒りと疑問と、ぼくのことを理解しようという思いを込めて、ぼくにそう問い掛けた。ぼくはしのぶちゃんに甘えることにして、努めて飄々と言葉を吐き出す。
「ぼくだって。一回くらい、皆で真剣に話し合う場を設けたかったのさ」
「……」
しのぶちゃんは呆れたような哀れむような、そんな視線をぼくに寄越す。姫ちゃんは困ったように顔を伏せた。この状況を、受け入れようとしているのだろう。
「相談も無しにか？」
「相談していたら叶っていたのかい？」
「まあそりゃ、ねぇわな」
くっくと、しのぶちゃんは薄く笑った。
「姫がいるあたりが傑作だ。おまえ、頭悪いのか？」
でもしのぶちゃん、君は言っていたじゃないか。
姫ちゃんのことで、何にもできないことが悔しいって。何も達成できないことに嫌気が立つって。
だがしのぶちゃんはすごく友達思いの良い奴だ。だから今まで、彼女を傷付けるだろうと思って、姫ちゃんの前で円居愛と相対することはなかったのだろう。
でもそれじゃダメなんだ。
ここに姫ちゃんがいないと、ここで姫ちゃんが変わらないと、ダメなんだ。
「……ふうん」
けらけらと、円居愛はそこでおもしろがるように笑った。
「良いだろう。僕にも少しなら時間がある。だから、舞姫ちゃん。言いたいことがあるなら言ってごらん？」

「まずその舞姫ちゃんやめろ」
忌々しげに、しのぶちゃんはそう口にする。
「円居愛……てめぇは一体どういうつもりなんだ？　まさか本当に、自分のことをただの良い兄貴だと思っているんじゃないだろうな？」
「思っているよ」
円居愛は飄々として答えた。
「円居紫子……あの母親が死んで、親父は今まで以上に気がおかしくなって、僕は忍に言ったんだ。おまえの味方は僕だけだ、おまえは僕の言うことだけを聞いていれば良い」
陶酔したように、円居愛はうっとりと甘美な表情を浮かべる。
「それから、なぁ忍。おまえは一度としてその約束を違えたことはないし、僕だって、それからおまえ以外のことを考えたことは一度だって、ない」
「……じゃあ何で、おまえの妹は平気で生ゴミを食べるんだ？」
しのぶちゃんは隣に座る姫ちゃんを見ないように、僅かに顔を伏せながら円居愛に問う。
「おまえの妹はおまえが認めない限りまともな食い物を一つも口に入れない。おまえの妹はおまえから届いたゲテモノメールを一件も削除しない。おまえの妹はおまえが薦めたもの以外一冊も本を読まない。おまえの妹はおまえが買ったもの以外一着の服も持っていない」
「……何？」
姫ちゃんは困惑した様子で、隣の親友の方を見た。
「……何を言っているの？　いったい、今から何が始まるの？」
「姫ちゃん」
ぼくは言った。
「君は何もしなくて良いから。ただ、ここにいてくれれば良いんだよ」
「……だって。そんな」

姫ちゃんは泣きそうに顔を伏せる。
「良いんだよ。忍はとても良い子だ。何も恥じることはないし、自分のことを欠陥人間みたいに思わなくたって、良いんだよ」
包み込むように優しく、同時に、独善的で残酷な円居愛の言葉だった。
……欠陥人間みたいに。
そんな言葉を、姫ちゃんは一度も言ったことがない。それがどうして、円居愛の口から出てくるのか。
だがしかし、ぼくはそれに、何も言い返すことができなかった。
「僕が妹に求めたのは、たった一つだけ。『良い子であれ』ということさ」
円居愛は、どこか誇らしげにそう言った。
「他の誰よりも、完璧に」
「……それと、おまえが施した意味不明の教育と、どう関係があるっていうんだ？」
「母が死んだ当事、僕はまだ小学五年生だったんだよ」
恍けたような言い方だった。
「多少、やり方が分からなくて失敗しても、仕方がないじゃないか」
「……」
しのぶちゃんは不愉快をあからさまに歯を軋ませた。
「だって怖いんだよ」
円居愛は姫ちゃんをいとおしげに一瞥して、いたわるように目を細め
「妹が変なものを口に入れたらどうするんだ。妹が悪い友達を作ったらどうするんだ。危険な本を読んだらどうするんだ。全ては僕の責任だ。そういうことがないように、だから僕はきちんと、妹を躾けたんだ」
しのぶちゃんは溜息でも吐きたそうに頭を振った。
こいつは何を言っても無駄だ。と、そんな独白が伝わって来る。

この男の言うことは、きっと事実なのだろう。
妹のことを愛していたから、円居愛は妹に対して大変な努力をした。その努力は誰にも冒涜されるべきではない。
だが。
「だったら、あなたはどうして、姫ちゃんに酷いことをするんですか？」
ぼくが言うと、円居愛は僅かに顔を顰める。
姫ちゃんは声も無く唇を揺らしながら、机の端っこを視線で捉えていた。
しのぶちゃんが複雑な表情を浮かべてぼくを見る。
彼女としても、本当は何も言わずに突っ伏すか、ふざけるなと言って暴れたいところなのだろう。
煮えた油にでも漬かっているような気分だった。こんなのは誰に対しても優しくない。姫ちゃんに対して、この状況はあまりに酷すぎる。
それでもぼくは、三人を同じテーブルに座らせたのだ。
姫ちゃんに気持ち悪い画像を送り続ける円居愛も、きっとぼくのような心情だったに違いない。
「ねぇ姫ちゃん」
びくりと、銃でも向けられたように姫ちゃんは竦みあがった。
「君は、お兄さんのことが本当に好きなのかい？」
ぼくがそう訊くと、円居愛は勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。
「……うん」
「絶対に離れたくない？」
「……そうです」
「そっか」
ぼくは笑った。
姫ちゃんは良い子だもんね。
自分のお兄ちゃんのことを、少しでも嫌いだなんて、絶対に口に

できる訳が無い。心の片隅ででも、そんなことを考えられる、はずがない。
酷く理不尽な事実だった。
どうしようもなかった。
「そっか」
ここでこれさえ覆せたら、いくらでも取れる方法があるというのに。
頭の悪いぼくなりに考えたんだ。姫ちゃんにだけ優しくて、姫ちゃんだけが幸せになれるはずの、多分最悪の方法を。なのに。
「それなら、しょうがない」
この席に座ったのは大失敗だった。大事なはずの姫ちゃんをこんなに傷付けて、しのぶちゃんには呆れられる。
ぼくじゃなかったら、もう少し上手くやれていたかもな。こんな遠回りはしなくて良かったのにな。
「……もう後二十分はあるんだけれどな」
円居愛はそう言って、愉快そうに腕時計を確かめる。
「ひょっとして、もう終わっちゃったかな？」
時計の針を一つずつ眺める。
「帰ってしまって大丈夫かな？　九時までにここを出て行かないとまずいんだよ。九時までに」
円居愛が勝ち誇った笑みでそう言う。その時だった。
何かが爆発したとしか思えないその音が響いたのは。
「……！」
天井から鳴り響いた轟音が、コップの水を揺らした。体の芯まで響き渡るような、『どっかーん』というある種間抜けなその擬音。
そして巨大な積み木を倒すようなガラガラという音が、天井から喫茶店へと降り注ぐ。
「あいつら！」
円居愛が叫んだ。
「あいつら！　あいつら！　あいつら！」

この男の表情が、これほど分かりやすく変化したことがあっただろうか。激しい怒りと驚きと、そして限りなく純粋な憎悪が彼の中で爆発している。

「あいつら！」

何が起こったのか分からなかった。しのぶちゃんが咄嗟に姫ちゃんを抱えて机の下に潜り込む間に、円居愛は目にも留まらぬ動きでぼくを跳ね除けると、机の脇に置いてあったキャリーケースを足で強く蹴飛ばした。キャリーケースは立ち竦む店員とベビーカーを引く母親の慌しく擦り抜けて、店の外の広い通路に放り出される。

「動くなよ」

円居愛がそう絶叫して、何事かとホールから顔を出した店員を睨みつける。店員は呆けた顔で円居愛の方に歩いて行く。円居愛は机の下の二人を一瞥して、それから店内を観察するように見回した。

「あいつら……」

どこか悲しそうに円居愛は顔を顰める。

「おい、何が起こって……」

キャリーケースが爆発して、先程とは比べ物にならない至近距離の轟音が、爆風と共に店内に吹き荒れた。

目も眩むような、暴力的な空気の流れに、ぼくは吹き飛ばされそうだった。円居愛が体を抱えてくれたから助かったようなもの。テーブルの下に隠れなければ、小柄な姫ちゃんなど今頃向こう側の壁に叩きつけられていただろう。

「何が、起こって……？」

しのぶちゃんが呆然と口にする。状況を言葉にするのは簡単だ。やってみよう。

キャリーケースが爆発して、天井や壁に大きなクレーターらしきものができて、削げたコンクリートが瓦礫となって通路の床に降り注いでいる。

誰もがそんな理不尽な状況を、呆けたように、まるで映画館のスクリーンでも覗くように、呆然と眺めている。そんな中で、円居愛

は一度肩を竦めると、どこか演技かかった足取りで店の真ん中へ赴いた。
「……なんてこった！」
表情を崩し、頭を抱え、怯えた声で円居愛は喚きたてる。
「デパートの中で何かが大爆発した！　さっき上の１階でも似たような音がしていた！　地上階はもうダメかもしれない！　きっとこの階ももうダメだ！　早く逃げなければ爆発に巻き込まれてしまう！　それに何時地上から火事が届くかもしれない！　外に出なければ窒息して死んでしまう！　なんてこった死にたくない！　非常口はどこだ！　逃げ出さなければ！」
混乱を煽るような円居愛のその台詞に、店内の人間は悲鳴をあげて店の出入り口に飛び込んだ。「落ち着いてください！」と落ち着いていない声をあげて、店員が彼らを追い駆ける。そんな風にして店内から人がいなくなるのを確認すると、円居愛はいったん息を吐いて、それから元の席に腰掛けた。
「さて……ね。あの店員。注文したジュースとケーキを出さずに逃げやがって。この店はダメだな」
冗談っぽく言って、円居愛は一人でけらけら笑った。
「何を言ってるんだよ！」
そう言って、しのぶちゃんがようやく机の下から這い出す。
「おまえが持っていたキャリーケースが爆発した！　これはどういうことだ？」
「何バカなこと訊いてんだよ？」
円居愛はうんざりした風に首を回した。
「僕が爆弾魔だからに決まっているだろう？　唐突な展開でごめんねー。まさか誰もキャリーケースが爆発するなんて思わないよねー」
「ふざけんな！」
しのぶちゃんは机に拳を叩き付けた。
「毎度毎度ふざけたことをする奴だと思っていたが！　今度はデ

パートの爆破か？　何を考えているんだおまえは？」
「何熱くなっているんだよ。そんな喚いたってしょうがないだろう？　君、ちゃんと冷静に判断しないとこのまま生き埋めだよ。死ぬんだよ？　さっさと逃げようよここから」
「……それは、良くないんじゃないかな？」
と、そこで、姫ちゃんがおずおずと、机の中から体を半分だけ出して言った。
「……だって。爆弾はきっと、一つだけじゃないよね。だったら、店の外は絶対に危険だよ」
「確かにね。この店に仕掛けるはずだった爆弾は、さっき通路の方で爆発しちゃったし」
円居愛は首を捻って言った。
「流石僕の妹。賢明だよ。構造的にこの天井が潰れる心配は薄いし、空気が残っている内は安全かな」
姫ちゃんはふらふらと机から這い出す。
「あの人達、無事に非常口にたどり着けていると良いんだけど」
「どうかなー」
円居愛が時計を見やる。そして指を五本開いて、一本ずつ折りたたんで行く。
「ご、よん、さん、にー、いーち」
ぜろ、で、三度目の爆発音が轟いた。
「……何、今の？」
「今のは大きいよね。みんなは多分、もう非常口のところに辿り着いてるかなー？　辿り着いていると良いねー。……辿り着いていたとしてもー、非常口はとうに使えなくなっているから無駄だろうけれど」
「……どういうことだ？」
しのぶちゃんが訊くと、円居愛はどこかかったるそうに
「爆弾魔だってバカじゃないよー。被害を出したかったらふつうは逃げ場を無くすさー。最初にどこを爆発させるかって、そりゃあ

非常口の扉の向こう側に決まってる。あの扉は分厚いし、音だってほとんど漏れないから、誰も気付かなかったかもだけれど」
僕は分からなかったなー、と円居愛は能天気に言った。
「今の爆発って……」
「通路のどっかじゃない？　ひょっとしたら非常口に行った連中と分断されたかもね」
「……おい。行くぞ、アユム」
しのぶちゃんが出入り口の向こう、瓦礫の山を指差して言った。
「様子を見に行くのかい？」
ぼくは肩を竦めた。
「やめときなよ。危ないし、行ったところでどうにもならないさ」
「……いいえ」
姫ちゃんは糸で操られるような歩みで瓦礫に近付いて、耳を澄ませるように目を閉じた。
「……声がします。誰かが、助けを求める声が」
「……アユム」
ぼくは嘆息して、次にこれみせよがしに肩を竦めて見せて、それから言った。
「分かったよ。姫ちゃんが言うなら仕方がない。行って来るよ」
「……はあ？　おまえ一人で行くのか？」
「そうだね」
姫ちゃんを行かせる訳には行かないし、姫ちゃんを一人にする訳にもいかない。しのぶちゃんに行ってもらう手もあるが、この子は冷静な判断ができないだろうしな。必要以上に人助けをして、その挙句にけがをされても困る。
「……紳士だねぇ」
くっくと、円居愛は笑った。
「でも僕は自分以外の男が自分より格好良いのは大嫌いだからねぇ。ここはね、僕も一緒に行こうじゃないか。女の子二人は、残って」

「……でも」
「残っているんだよ、忍」
円居愛は姫ちゃんの頬に手を伸ばして、優しく微笑んで言った。
「何もかも全部、お兄ちゃんが何とかしてあげるから。だからおまえは、僕の言うことだけ、聞いていれば良いんだ。分かるね？」
「良く言うぜ」
しのぶちゃんが肩を竦める。
「話は後でたっぷり聞かせてもらうからな。アユムに変なことするんじゃねぇぞ」
円居愛は笑顔で片目を閉じて見せると、そのままぼくの前を楽しげに歩き始めた。ぼくはその後ろをなぞるように、彼の後を付けていく。
ずんずんと瓦礫の山を踏み越えていく円居愛。そんなに大きな山ではないが、足の力だけで超えようと思えばそこそこ体力がいるだろう。よじ登るように瓦礫を進んでいると、崩れた瓦礫に足を取られ、後ろ向きに放り出されそうになる。
そんなぼくの手を、円居愛が掴んで持ち上げる。お陰で転げずに済んだ。
「大丈夫かい？」
「……」
愉快そうな顔をする円居愛。まったく、何て様だろう。
「いやいや、すまないね。僕がデパートを爆発させたりしなければ、こんなことにはならなかったっていうのにねぇ」
「……一つ、聞かせてもらって良いですか？」
「何かな？」
にこりと、円居愛は微笑んで僕に問うた。
「どうして。爆破を実行したあなたが、デパートに閉じ込められちゃっているんですか？」
円居愛なら、無関係の事件を自分が起こしたものだと嘯くくらいのことはするかもしれない。だが、彼の所持していたキャリーケー

スが爆発したということは、この目で確認した事実だった。
「いやいやいやねぇ。僕ってば、ひょっとしたら人望がないのかもしれないなぁ」
寂しそうに笑って、しかし円居愛は飄々と
「最初の計画ではね。僕は九時までにキャリーケースを放置してあの喫茶店を出る。そして九時半に最初の爆弾が起爆して、僕らはそれを高笑いしながら眺めている、という感じだったのだけれど。……どういう訳か、予定より一時間早く一階の爆弾がドカン。地下にいたから連絡も来なかった」
「……人望ありませんね」
「ああ。どうもぼくには、人望がないらしい」
へへ、とやんちゃ坊主のように笑う円居愛。
「生徒会長に立候補した時も、候補者は二人しかいなかったのに、僕には八票しか入らなかった。すげぇムカついたから、色々して無理矢理会長になったんだけどさ」
「色々て」
「具体的には、相手候補に転校してもらったりとか」
「……そんなことしてるから、人望無くすんだと思いますよ？」
「そうかなぁ。そうかもねぇ。あははは」
ここでもう一つ爆発音。どっかーん、なんて擬音がこの世に本当に存在するとは思わなかった。空気が割れて耳に突き刺さるような暴音。
「そもそも、どうして高校の生徒会長になりたいなんて思ったんですか？」
「そこは君、生徒の会の長だよ。目立つじゃないか」
少年のような笑みで、誇らしげに円居愛は言った。
既にどこかに避難しているのか、瓦礫の向こう側に立っている人はいなかった。今度は裂けた天井から降り注いだ瓦礫が通路に降り注いでおり、向こう側と完全に隔絶してしまっている。そして瓦礫の山の前には、赤子が転がって泣いている。

「……誰かいますか？　誰か！」
瓦礫の向こう側より女性の声がする。どうやら、降り注いだ瓦礫の所為で、赤子と分断されてしまったらしい。こんな状況だ、何に驚いて赤子を手放してしまってもおかしくない。瓦礫に埋もれなかっただけ幸運というべきだ。そう言えば、途中でベビーカーが放置されているのを見たな。
「はいはーい、いますよー。私立動堂学園高校三年一組三十四番、生徒会長の円居愛ちゃんですよー。気軽に愛ちゃんって呼んで下さーい。ところで奥さん、何かお困りですかー？」
ふざけた態度で瓦礫の向こうに呼びかける円居愛。赤子の鳴き声が轟く。
「息子が、息子がそこで泣いて……」
「安心してください」
円居愛にうんざりとしながら、ぼくは言った。
「赤ちゃんのことは任せて、避難してください。……非常口は使えますか？」
「……いいえ。瓦礫に埋もれていて……皆さんでどかしているところなんですが」
「そうですか。上手く出られたら、ぼくらがこっち側にいること、外の人達に伝えてくださいね」
赤子を抱き上げ、ぼくは瓦礫に背を向ける。これを背負ってあの山を登るのか、そう思うとうんざりした気分。
「その子は僕に任せてくれたまえ」
円居愛が頼もしげに言った。
「大丈夫、取って食ったりはしないさ。僕は自分のしたことに責任の持てる爆弾魔だからねぇ」
「……そうですか」
とんでもない戯言である。……どうもこの男には、こういう明らかにおかしなことを分かって口にして、人の気を引こうとする癖があるような。デパートを爆破しようという試みも、そういう心理に

よるものかもしれない。
「ところで。どうして九時半なんて、半端な時間に起爆を設定していたんですか？」
「……どういうことだい？」
「いいや」
ぼくは言葉を選ぶこともせずに、その歪な考えを口にする。
「だって。人を巻き込みたいのなら、もっと昼間とか人の多い時刻を選ぶのがふつうでしょう？　何だってこんな早朝に」
ふむ、と円居愛は感心したように
「それに気付くとは、なかなかあくどい考え方ができるじゃないか」
「どうも」
「理由は簡単だよ。人の多い昼間を選びたくなかったのは、多くの人が被害にあうのが嫌だったからだ」
「……はぁ」
ぼくは首を傾げる。
「じゃあどうして、わざわざ日曜日に」
「みんな忙しくってねー。全員の都合が付くのが今日の日曜の午前中だったんだよー」
「……はぁ」
あっけらかんと言う円居愛に、ぼくは顔を顰めて嘆息する。何ていい加減な連中だ。何がしたいのかも分からない。
円居愛は赤子の体をぬいぐるみのようにぞんざいに扱いながら、器用に瓦礫を乗り越えて行く。途中でベビーカーが落ちているのを発見したが、目もくれずに元の喫茶店へと、軽快なスキップで飛び込んだ。
「……アユムくん、お兄ちゃん」
喫茶店に戻ると、姫ちゃんが机の下からのそりと顔を出した。隠れてたんだ。
「無事で良かった……ありがとう」

「いや」
ありがとうて。この子の言動も、結構不可解なんだよな。
「ところで何で机の下？　いや気持ちは分かるけれどさ」
「……その。しのぶちゃんが」
机の下を覗き込んでみると、しのぶちゃんが奥で頭を抱えてぶつぶつ言いながら震えていた。右手は姫ちゃんの服の裾を摘んでいる。なるほど、そういうことか。
「かわいいなぁ」
円居愛が赤子を机の上にぞんざいに放り出して言った。
「かわいいよ舞姫ちゃん。大丈夫、机の下にいようがどこにいようが死ぬときゃ窒息して死ぬ。そんな風に机に隠れる必要なんてないさ」
「……うるせぇ」
忌々しそうに、しのぶちゃんが円居愛を睨む。
「誰の所為でこんなことになった！　誰の所為で！」
「ごめん。猛省するよ」
言って、壁に手をついて猿の反省してみせる円居愛。
「おまえ……自分のしたことが分かってんのか？　本当にもう取り返しがつかないんだぞ！」
「取り返しつかないって？」
「……だから。このデパートの中の奴ら、何人死ぬと思ってる？　爆弾は止められないし、逃げようにもおまえが言うことが確かなら非常口は既に……」
「止められるよ、爆弾」
あっけらかんと、円居愛は言った。
一瞬、喫茶店からは赤子の鳴き声以外の音が消え失せた。
おぎゃー。おぎゃー。おぎゃー。おぎゃー。おぎゃー。おぎゃー。と、息継ぎをしながら赤子は六回分泣いた。赤ん坊は母を求めてか、腹が減ったのか。それは分からないが。
「……はぁ？」

「いやね。デパートに仕掛けた爆弾なんだけれど、起爆時間は操作できるし、不発にしようと思ってできないこともないんだよ、実は」
言って、円居愛は携帯電話を取り出した。
「仲間に連絡を取って交渉すれば、或いはこれ以上の爆発は防げるかもね。今時地下でも電話通じるからねー。ネットで会った連中だけど頭悪い奴ばっかだし、今すぐ１１０番におまえらのこと言われたくなきゃ爆弾止めやがれーって、そう言えば良いことだよ」
おぎゃー。おぎゃー。赤子が泣くのを、机から半身を出した姫ちゃんがあやそうと試みる。子供の扱いに慣れていないのか、たどたどしい手つきだった。
「……だったら早く止めろ。てめぇだって、このまま生き埋めはごめんだろう？」
「どうしよっかなー。僕悩んじゃうなー。困ったなー」
「てめえ！」
しのぶちゃんが叫ぶ。円居愛はけらけら笑う。けらけら笑って、鳴き声をあげ続ける赤子の方を一瞥する。表情を変えずにその首を掴んで、姫ちゃんから赤子を引っ手繰った。
「……お兄ちゃん？」
首をひん付かんで、円居愛は天井に向かって掲げるように赤子を持ち上げた。そしてへらへらと笑いながら。
「ちょっと待ってね。舞姫ちゃんをからかうのもおもしろいんだけれど。とりあえずその前に、この子うるさいから黙らせるから」
「……何をするの？」
姫ちゃんが円居愛の体を掴んで、その長身をあやすように揺する。目には困惑と、それから深い絶望が浮かんでいた。
絶望。
この兄の手にかかってしまった以上、赤子はもう助からないと、そんな思いが窺えた。
「やめて。……やめてよ」

「まぁまぁ忍。こんなうるさいのがいたんじゃ、話もうまく進まないだろう？　せっかくこんなスリリングな駆け引きが起こっているんだ、バックコーラスが乳飲み子の声ってんじゃ、ねぇ」
泣きながら縋りつく妹を、円居愛はどこか煩わしそうに、少しばかり腹立たしげに見やる。首を絞められた赤ん坊は、目玉がとび出さないまでに目を見開いて、舌を吐き出しそうに口を開いていた。
「お、おい。てめぇ、それマジでやってんの……」
「……ねぇ。やめてよ。お兄ちゃん」
悲しげに、寂しげに。搾り出すような声で、姫ちゃんが懇願する。
「お兄ちゃん、優しいでしょ。わたしの優しいお兄ちゃんでしょ？　だったら何でそんなことするの？　どうしてわたしのお願い、聞いてくれないの？」
眉を顰め、頬を歪め、瞳を強い苛立ちに濁らせる円居愛。
「ねぇお兄ちゃん。お兄ちゃんはそんなんじゃ、なかっちゃはずだよね。こんなことするの、お兄ちゃんじゃないよね」
「うるせぇな！」
足に縋りつく姫ちゃんの腹を、円居愛は力の限り蹴飛ばした。華奢な体はいとも簡単に、喫茶店の床にしりもちをつく。
「おまえは黙って見ていろよ！　僕の邪魔をするな。僕の意に沿わないことをするな！　分かってんのか！」
言いながら、円居愛は姫ちゃんの頭に足の裏を何度も振り落とす。姫ちゃんは抵抗もなく、頭を何度もぶつけながら、床を舐めるように絶え絶えの言葉を吐き出した。
「……ごめんなさい。……ごめんなさい。……ごめんなさい。……ごめんなさい」
円居愛は容赦しない。人格が豹変したように、普段の穏やかさの一片も感じられない激しい暴力を、妹に向かって何度も加える。その表情は、苛立ちと困惑と、陶酔するよう名愉しさに塗られているように見えた。
「……ごめんなさい。……お願い、何でもするから。何でも言う

こと聞くから赦して。その子を殺さないで。何でもするから……」
姫ちゃんがそういうと、円居愛は愉快そうに、満足そうに、姫ちゃんを蹴飛ばす。
「何でもするってか」
円居愛は頬を歪めながら呟いた。
「おまえのことだから、それこそ本当に何だってしてくれるんだろう。……おまえのそういうのが気に入らないんだ。自分のことを顧みないで、まるで人間のなりそこないみたいに、ひたすらに優しいところ」
机から這い出したしのぶちゃんが円居愛に飛び掛り、その頬を思うさま殴り飛ばす。円居愛は避けようともせずその拳を頬で受け止めると、赤子を取り落としながら床に転がった。
「……あんた、いったい何がしたいんだ？」
赤子を受け止めながらぼくが言う。円居愛はへらへらと笑うだけで、ぼくの次の言葉を待っているようだった。
「結局、あんたはこいつの泣き声なんて、本当はどうでも良いんじゃないか？」
姫ちゃんの後ろを付けていた時にも。
姫ちゃんの机の中にヘビを入れた時にも。
ぼくの姫ちゃんへの手紙を裂いた時にも。
口にした通りの理由なんか、あんたのどこにもなかったんじゃないか？
「……あはは」
不気味に笑って、円居愛は吊り上げられるようにして立ち上がる。
「理由なんてありません。目的なんてありません。ただ、むしゃくしゃしてやりました。って、こう言ってみれば君は満足するかい？」
「……しませんよ」
ぼくは肩を竦めた。
「あなたのことで、ぼくが不満や満足を抱いたりしません」

「……手厳しいな」
円居愛はへらへらとして笑う。
「……好きだったのにな。君のこと。悲しいな、そんな風に言われると」
そういう円居愛に、ぼくはただ首を振るだけだった。
「……お兄ちゃん」
「安心してよ忍。きっともうその子を殺そうとしたりなんか、しないから」
円居愛は優しげな表情を浮かべて、ポケットの中に手を入れて、中から黒っぽい金属を手の中で弄ぶ。
「……おい。それって」
悪戯っぽく微笑むと、円居愛はそれを姫ちゃんの前に放り投げた。
「……これは？」
「仲間の一人がくれたんだ」
誇るように、円居愛は語る。
「使いどころがあるようには思ってなかったんだけれどね。なんかほら、おもしろカッコ良いじゃないか。だから貰ったんだが、ちょっと手にとってみておくれよ」
兄に言われるがまま、姫ちゃんはその黒い金属におずおずと手を伸ばした。
「……拳銃？」
呆けたような顔をする妹に、円居愛は裂けるように笑った。
「回転式のハンドガンで装弾数は六発だったか。まあ良いや。とにかく忍、君にやってもらいたいのはあれだよあれ。ロシアンルーレットって言う奴」
裂けるような笑みを浮かべて、円居愛は言う。
「準備はもう完了している。ただ自分の頭に撃ってもらうだけさ。一発撃てればお友達をみんな助けてあげる。三発撃てれば地下にいる人をみんな助けてあげる。五発撃てれば、地上階の人をみんな助けてあげる」

「本当なの？」
姫ちゃんの顔が急に明るくなる。
おいおい、何嬉しそうにしているんだよ。
「お兄ちゃんが約束を守らなかったことがあったかい？　きっと、行ったとおりにしてあげるよ」
慈愛に満ちた表情を浮かべる円居愛。すると、姫ちゃんはどこかぎこちない手付きで、躊躇なく自分の頭に拳銃を突き付ける。
「……ふふう」
目を瞑り深呼吸をする姫ちゃん。
「大丈夫。大丈夫です。わたしはこれまで、ずっと良い子にして来たんだから……。だから大丈夫」
ぐりぐりと、震える拳銃を自分のこめかみに突き当てる。
「だから、たとえ死んじゃっても、きっと大丈夫」
目を見開いたその時には、姫ちゃんの手からは震えさえ消えていた。
ぼくはすぐに動いた。
「バカ言え」
赤子を机に放り出し、ぼくは姫ちゃんから銃を引っ手繰る。戸惑うように目を見開く姫ちゃんの頭に、グリップを力の限り叩き落した。
ガコン！　と子気味良い音。その場に悶絶する姫ちゃん。頭を抱えて、涙を浮かべてこちらを見る。
「痛い。何をするの」
「何をするのはこっちの台詞だよ」
殴りつけてしまったのはわざとじゃない。思いっきり衝動に身を任せてのことだ。
というか言っちゃうけど、ぼくは姫ちゃんに、一度こうしたかったんだと思う。きっと。その権利がぼくにはあるだろう。
「へぇえ。歩君、君も随分と人間らしい行いをするじゃないか。恋は盲目って言うけれどさ、どう？　思い知った？」

「うるさい」
言って、ぼくは円居愛に拳銃を突き付ける。
「何のつもりだい？」
円居愛はあくまでも飄々と、余裕の態度を崩さずに肩を竦める。
「僕を殺しちゃったら、助かるチャンスがなくなってしまうと思うんだけど」
「あなたと同じ空間に生きてるより、ずっとマシです」
そう、ずっとマシだ。
こいつと同じ空間で、こいつに支配されて暮らすくらいなら。
「こうするって決めていたんですよね。ぼくは」
「……アユムさん、何を？」
「姫ちゃん。ごめんね、ぼくはまた君のことを傷付けてしまうらしい」
それでも。きっと君は、ぼくのことを嫌いになったりしないんだろうね。
その時ぼくは、はたして君の傍にいることができるのだろうか。
「本当に撃つ気？」
「ええ。後のことはその時考えます。それでは」
そう言ってぼくは、円居愛の頭に拳銃を突き付けて、素早く引き金を引いた。
カチカチカチカチカチ。カチ。
「……」
六発撃った。
全て空砲だった。
というかこの拳銃、どう見ても装弾数は五じゃねぇかよ。六発入るホーススペシャルなんてこの世にない。何ていい加減な奴だ。これを姫ちゃんにたせたら、確実に弾が出るじゃねぇかよ。
壁に背を向けた円居愛は、へらへらとした笑いを浮かべる。
「あはは。僕が妹に拳銃なんて危ないおもちゃを与える訳ないじゃないか」

愉快そうにそう喚いて、呆然とするぼくから拳銃を取り上げた。
「妹の仕返しだ」
言って、円居愛は拳銃のグリップをぼくの頭に思うさま叩きつける。
ぼくが姫ちゃんにやった時とは比べ物に成らない鈍く大きな音が鳴った。頭蓋骨にグリップの角が突き立ったような気分で、ぼくはそのあまりの痛みに喫茶店の床に倒れ付す。
「あはは。この拳銃はモデルガンさ。さっきおもちゃ屋に行った時にさ、なんか格好良かったから買っちゃたんだよ。いやしかし歩君。驚いたよ、まさか君が、妹の前でこの僕を撃ち殺そうとするなんてねー」
言いながら、円居愛は大事そうにポケットに拳銃をつまえこむ。モデルガンを買うのは良いとして、それを持ち歩くというのはどういう神経だ。
「ふざけやがって」
しのぶちゃんが歩いて来て、円居愛の胸倉を掴みあげた。
「別に銃を使わなくたって、おまえを殺すことはできるんだぜ？」
「それは怖い。それは実に怖いねぇ。……勝てると思う？」
挑発するように、円居愛。
「君は優しいからねぇ。増して、僕を殺すということは、このデパートの中のほとんどの人達を、見殺しにするっていうことだよ？
いくら君に体力があるって言っても、そんな迷いだらけの暴力で、バスケ部のワイルドホープを殴り殺せると思うのかい？」
「うるせぇ帰宅部」
「今はそうだったかな？　いやぁ生徒会の仕事とか受験勉強とかで忙しくって。こんなんじゃちぃっとストレスがたまり過ぎて、デパートの爆破くらいやっちゃったってしょうがないよね？　マスコミのみんなそう言ってくれると思わない？　『爆弾魔少年、心の肖像』なんて本が出て、ベストセラーになっちゃったりしてね？　そう思わない？」

「それが、おまえの望みか？」
へらへらと、円居愛は頷いた。
「ああそうだよ。意味なんてないのさ。ただ目立ちたいんだよ」
「ふざけんな」
言って、しのぶちゃんは胸倉を掴んだまま円居愛を殴りつける。
やはり円居愛は抵抗をしない。訝しげな表情を浮かべつつ、足を引っ掛けて円居愛を床に押し倒す。
「……しのぶちゃん。ダメだ」
「何言ってんだ」
しのぶちゃんは円居愛の頭を持ち上げて、床へと叩き付ける。「うげっ」目を回す円居愛に、しのぶちゃんはそのまま幾度となく拳をぶつける。中学時代は喧嘩ばかりしていたというしのぶちゃんの、馴れた硬い拳だった。
「てめぇ。さっさと爆弾を止めろ。じゃなきゃ、このままおまえを絞め殺す」
「それは無理な相談だね」
円居愛は余裕の笑みを浮かべた。
「だって、このデパートにはもう使える爆弾なんてないんだもの」
けろりと、円居愛はそう口にして見せた。
「……へ？」
一人呆然とするしのぶちゃん。そこに畳み掛けるように、円居愛は企むような笑みを浮かべて
「だいたいさ。ネットで集まった有象無象、面識こそあれ信頼関係も結束力もない烏合の衆。全員が全員自分の仕事を果たして所定の場所に爆弾を配置するなんてこと、できる訳がないじゃない？」
「……だったら」
「かれこれ長いこと爆発音がないよね。予定通りなら今頃爆弾全部起動してなくっちゃいけないんだよねー。まー、多分だけど、もうまともに起爆するのはないなぁ」
「……それって、本当……？」

「しのぶちゃん！」
やめろ。
その男の言うことに耳を傾けるな。その男はそれだけ望んでる。その男に少しでも反応を示せば、そのまま何をされてしまうか分からない。
「お兄ちゃん」
床で震えていた姫ちゃんが、搾り出すように声をあげた。
「しのぶちゃんに……何をするつもり？」
そう言われた時に、円居愛は酷薄な、裂けるような笑みを浮かべて姫ちゃんを振り向いた。
「ねぇ忍。この子のこと。もしかして僕よりも、好きかい？」
こくん、と。
姫ちゃんは何の躊躇も疑いもなく、兄からの問いに、素直な回答を示したのだった。
「そっか」
円居愛は笑った。笑って、しのぶちゃんの腹に銃を突き付けた。
「――――！」
銃声。
しのぶちゃんからたくさん真っ赤が飛び跳ねてぼたぼた床に飛び散った。だくだくと水道蛇口が水を吐き出し続けるみたいにしのぶちゃんから液体が広がって行く。内臓を潰された芋虫みたいに、血液を撒き散らしながら狂ったようにのたうち始めた。
「まぁ。撃ったのかお腹じゃ、きっと苦しむよね」
馬乗りになっていたしのぶちゃんから浴びた血液を、ばっちぃとでも言いたげに振り払いながら、淡々と立ち上がって円居愛は言う。
「さてと。いい加減に遊び飽きたところだな。僕だって才能あって将来有望な若者だから、こんなことで捕まりたくはない。爆弾の残ってないっつーのは嘘だし、この様子じゃ死者も増えるだろうし、僕はもう十八歳な訳から、多分死刑だし。証言者はみんな殺さなくっちゃな」

ねぇ、と円居愛はぼくと姫ちゃんの方を向いた。
「銃は残念でした、本物だよ」
「……言われなくても分かる」
「そうだねぇ。しかし歩君、君は偉く冷静だねぇ。まるで、何か確信したみたいな」
「……そうですか」
どうやらぼくは自分の感情さえ人任せにしてしまえる性質らしい。この男が酷薄な人間未満だというなら、それはぼくにも言えることなのだろう。
「まあ良いさ」
くっくと、円居愛は勝ち誇ったように笑う。
それはどこか、寂しそうで、名残惜しそうでもあった。
「最後に。忍。君がどれだけ人間のできそこないだったのか……君がどれだけ良い子にしていたのかを、テストしたいと思う。良いね」
円居愛は微笑みを浮かべて、ポケットから二挺目の拳銃を取り出して、姫ちゃんに向かって放り投げた。
「今度こそ弾が入っているよ。ロシアンルーレットだ。やってみろ」
にこりと笑って円居愛は言う。
「こっちの拳銃で証言者を全て殺し終えた後、僕はおまえの渡した拳銃でまったく関係ない人を殺して回ることにする。その人数を、おまえが自分に向かって撃った回数だけ、差引いてあげる。分かるね？」
「……お兄さん」
「前から言おうと思っていたのだけれどね。君、お兄さんは止してくれよ」
円居愛は人懐っこい笑みを浮かべた。
「僕を心配してくれているのかい？　でも妹が僕を撃つなんて天地が翻ってもないじゃないか。それとも、僕に妹をいじめるのを、

やめて欲しいっていうのかい？　悪いけど、ほら」
言って、円居愛は姫ちゃんに拳銃を突き付ける。
「妹から銃を奪ったりしたらこうだよ。僕は素敵なものは妹の分を合わせて二つ買う主義なんだが、その銃を二つ合わせれば、君の動きをこうして封じながら妹と遊ぶこともできるって訳だ。素晴らしいと思わないかい？」
傑作だ。
拳銃を突き付ける先が、ぼくじゃなくて姫ちゃんなあたり、本当に傑作だ。
「僕はこの子だけは助けてあげるつもりだよ。ああ。せっかくここまで丹誠尽くして育てたかわいい妹なんだ。一生手放せるものか。一生手元に置いて可愛がってあげるのさ。ここを生き残ればだけれどね」
「……」
「それとも何かい？　妹に代わって君がこれをやってくれるのかい？　その場合は君には最後の一発だけになるまで撃ってもらうことになるけれど、良いのかい？」
「……冗談ですよ」
ぼくは嘲笑した。
円居愛。おまえは本当に、救いようのない男だよ。
かわいそうに。
「あはははは。やっぱりね。君だって真実忍のことを愛している訳じゃないんだ。この子を本当に愛しているのは、世界でただ一人この僕だけ。……この僕だけなのさ」
円居愛は促すように姫ちゃんを見やる。
姫ちゃんは緩慢な動きで、唇を震えさせ、床の方を向きながら拳銃を持ち上げた。
「さあてね。忍、一発も撃たなくたって良いんだよ。お兄ちゃんが赦してあげるよ。おまえが撃ちたいだけ撃てば良いんだ。おまえはずっと良い子にしたいたね。だけれどね、忍、おまえはちょっと、

他の誰よりも自分を選ぶことを覚えた方が良い」
と。円居愛が最後に言ったその言葉だけは、真に妹を愛する兄の言葉だった。
だが。
「……？」
円居愛は信じられないものでも見るように、姫ちゃんに向かって竦みあがる。
持ち上げられた拳銃は、姫ちゃんのこめかみではなく、円居愛に向けて突き付けられていた。
「……何のつもり？」
「死んじゃえ」
カチリと、姫ちゃんは引き金を引いた。
「死んじゃえ。死んじゃえ。死んじゃえ」
カチ、カチ、カチ。と、姫ちゃんはさらに三発の引き金を引く。
円居愛の顔が、困惑と恐怖と、絶望に染まる。世界で唯一つ絶対に信じていたものに裏切られたような、受け入れがたいものを見るような表情だった。
「……そんな」
最後の一発、姫ちゃんは円居愛の頭のあたりに狙いをつける。
円居愛は絶望し切った表情で、この世界中のあらゆるものに疑問をぶつけるような叫び声で、喚く。
「あり得ない！　ある訳が……。だっておまえが……おまえが僕を殺そうとするなんて、そんなこと絶対にある訳が――――」
ダメなんだよ。
あんたはしのぶちゃんを殺そうとした。しのぶちゃんの腹に向かって発砲した。
それだけは、そういうことだけは、この子の前でしちゃダメなんだよ。
「やめろ。おまえが、そんな目で、僕を殺そうとするのは、絶対に――――――」

最後の引き金が引かれた。
「……姫ちゃん？」
銃を降ろし、穴の開いた腹から血を流し続ける親友と、自分自身に銃を向けた兄を順番に一瞥し、最後にぼくの方に視線を固定させる。
姫ちゃんは泣いていた。
何か言葉を口にしようと思っているのだろうことは理解できた。わなわなと唇を震わせて、縋るような声で言葉にならない呟きを漏らしている。
赦しを請いているように、ぼくには見えた。
「……大丈夫だよ」
ぼくは姫ちゃんを正面から抱いて見せて、それからそっと拳銃を取り上げる。
姫ちゃんは涙を流し続ける。
そのいとまに、「ごめんなさい」という、消え行くような言葉が聞こえた。
「大丈夫だから。君が失ったもの、全部取り戻すから。だから、今は笑って」
言うと、姫ちゃんは泣きながらぼくを正面から見据えて、何かが裂けるような笑みを浮かべた。
「そうだよ」
ぼくは笑い返した。
「それで良い。眠れ」
言われたとおり、成すがまま。姫ちゃんはぼくの体にしがみ付いたまま、どこか拗ねたような寝息を立て始める。
姫ちゃんをその場で寝かせ、ぼくはふらりと立ち上がる。血を吐いてもがき続けるしのぶちゃんの姿を、自分でもぞっとするほど冷静な心で見下ろした。
保健体育の授業で習ったことを思いながら、即席の道具で応急処

置を試みる。発見される時間によっては或いは、と言ったところだろうか。
「……アユム」
搾り出すような、しのぶちゃんの声がした。
「ご苦労様」
「あたし……死ぬのかよ？」
「大丈夫だよ、しのぶちゃん」
彼女には是非生き残ってもらわねばならないと至極打算的に思考して、それからぼくは言った。
「今この瞬間に生きているんだ。すごいことだろ。だから君は後百年死なない」
酷い理屈だったが、どうしてか自分で納得してしまう。人は儚く死ぬとか何とか、実際に死んだ奴に対してだけ言うべきことだ。
「……けらけら」
と。
いつの間にか止んでいた赤子の鳴き声が再び響くと同時に、円居愛のせせら笑う声が喫茶店に響いた。
彼は生きていた。
「……失敗だった。何もかも失敗だった」
「そのとおりですね」
ぼくは答えた。
最後の最後まで、この男は妹に弾の入った拳銃を渡そうとはしなかった。それは自身の保身の為でもあったのだろうけれど、弾の入っていない拳銃にその魂まで打ち砕かれてしまったのでは、ざまあない。
「あなたのこと。人間として終わってるとは思いますけど、そこまで大嫌いだとは思えなくなりましたよ。人の相手にされようと色々する癖、実は何も考えてないあたり」
「歩君は優しいね」
蛍光を掴み取るように天井に手をかざして、円居愛は言った。

「まーでもですよ。あなた、ネットで作ったっていう爆弾魔グループには見捨てられたみたいなもんですし、学校じゃさぞかし嫌われ者って感じでしょうし、社会的には全てのものを失ったといった具合ですし、唯一相手して貰えてた姫ちゃんには死ねとまで言われちゃったし。はっきり言って破滅じゃないですか？」

「……ぶっちゃけ。どうでも良い」

円居愛はどこか寂しそうに言った。

「何でも良い。僕は早く死にたい」

うん。それはそうかもね。

「ぼくに殺してくれって言うのは無しですよ。あなたにはそれだけの価値もありませんから。それとも、ロシアンルーレットなんかしてみますか？」

「冗談言え」

円居愛はくすくすと笑った。

「じゃあどうするんですか？　お兄さん。円居愛さん。あなたまだ偉大なる未成年で在らせられる訳だし、グループでの犯行だった訳だし、温情処置でもしかしたら死刑免れちゃうかもですよ。その時は、どうする気で？」

「知らんよ」

円居愛は目を逸らすように乱暴にそう言った。

「なーんも知らん。何を隠そう僕は何にも考えていないんだ。知らない知らない」

積み木を壊すようにデパートを爆破させておいてから、円居愛はふざけた風もなくそう口にした。まったく持って性根っから腐りきった奴だった。

……まあ。突き詰めて言えば、ぼくだって同じようなもんだが。

「……あのですね。お兄さん、円居愛さん」

ぼくは肩を竦めてから、だらだらと喋り出す。

「これはぼくにはとてもその気力が無く、しのぶちゃんには難解で、姫ちゃんにはそういう感覚がまるでなかったから、全然できっ

こなかったことですが。ふつう、人は、どんなにつらくてもしんどくてもどんな犠牲を払っても、人に好かれるには好かれるだけの価値がある人間になるものです。できなきゃ根暗です、底辺でぼっちでダメ人間です。蛇蝎の如く忌み嫌われて唾を吐かれて肥溜めに落ちて死ぬ運命です。でもあなたはぼくらなんかと違って、実力と才気に溢れる将来有望な若者でしょう？　ちょっとは人に好かれるよう、がんばってみりゃ良いじゃないですか？」

嘲るようにぼくがそう言うと、円居愛は拗ねたようにそっぽを向いたまま、暗く、か細く、肉親に大切なことを訊く小さな子供みたいな拗ねた声色で、ぼく尋ねた。

「……僕にできるのかな？　それ」

「ぼくは無理だと思いますよ」

ぼくはすごく正直に思うところを話した。

「あなたの場合、マイナスからのスタートに過ぎますからね。まあ応援だけはしますから、せいぜい無様に無駄な努力をしてください」

「……分かったさ」

円居愛は言って、それからかちゃかちゃとした動作でその場を立ち上がると、ぼくに向けて親指を立てて見せた。

「そんじゃ僕はここを逃げて姿をくらます。いつか会おう。……歩君、僕は君のことが好きだよ」

はきはきとそう言って、円居愛はホールの方へ飛び込んで行った。もしかしたら、ぼくらは知らない出口を知っているのかも、知らないのかもしれなかった。どちらにしても、ここにじっとしているのは得策ではあるまい。

「……ふざけた野郎だ。きっとぼくより幸せにはなるなよ」

一人で呟く。

ぼくはポケットに手を突っ込み、この二年間どんな局面においても糞の役に立たなかった催涙スプレーを取り出して、どこかその辺に放り投げた。

ぼくがこいつを持っていたことを知るのは、ホームセンターの店員の他には、円居愛を数えるのみだ。瓦礫の中に封印してしまえば誰にも分からない。そして、誰にも分からなければ、それで良いしそれまでなのだ。

エピローグ

目的を持って鏡の前に立つのはもしかしたら人生で始めてかもしれない。はたしてぼくの目の前に出現しているのは、如何にも喧嘩の弱そうなちょこまい不良の下っ端であった。

薬物をやっていそうに痩せ細った肢体、ナイフを持たせられそうな目の下のクマ、不摂生を絵に描いたように荒れっぽくそこらに跳ねた金髪。習慣的にきちんと着た学生服が如何にもミスマッチしている。

鏡の前で数秒、もしかしたら数分ほど立ち尽くして、ぼくは肩を竦めることさえできずに、口の中でこう呟いてその場で崩れ落ちた。

「バカだ……」

どうしてこうなった。

昨日気が向いたという理由で部屋の片づけをしていると、何故か出てきた髪染めの道具一式。母親がぼくの部屋に捨てて行ったのだろうか、でもこれ男用だしなとか考えて、ぶらぶらと入ったホームセンターで何故か購入してしまった記憶に辿り着いた。

感傷的に鏡の前に立ち、あいも変わらずうだつのあがらない自分の格好を、手っ取り早くどうにかできるかもしれないと使ってみたは良いものの、結果としてはヤンキー初心者の中学生である。

かといって、元に戻すのも面倒だというのが本音だ。というかどうすれば戻るのかも分からない。しょうがねぇ今日はこのまま学校行くしかないかなぁとか、だらだら準備を進めているとチャイムが鳴る音がした。

仕方がなく出る。

姫ちゃんだった。

ぼくの姿を見ると、まず最初、部屋を間違えましたすいませんという顔で僅かに視線を落として、もしかしてアユムくんですかという顔でぼくと視線を合わせて、最後に唇の端で困惑を表すと若干後

ろに仰け反った。
「……姫ちゃん」
「……はい？」
「……坊主にしてくるよ」
ぼくは父の工具箱はどこだったかカッターは入っていたかなと、そんなことを思案した。
「や。ややや。や」
アユムくんそれは思いきり過ぎじゃないでしょうか？　そういう髪型にしたかったアユムくんが過去にはいるんだから。思い付きで取り返しの付かないことだけはしないで。大変だから。と言いたげな表情でぼくにすがり付いた。
「アユムくんっ。思い切ったねっ。わたしあなたのこと少しは知ってるつもりだったけど、それは意外だよすごく予想外」
姫ちゃんに予想外とまで言われた。
これは重態だ。
「アユムくんがすることだから間違いないよ。うん、それで学校行こうよ。しのぶちゃんも……みんなびっくりするよ」
「……どうしてそこでしのぶちゃんの名前が出てくるの？」
ぼくが尋ねると、姫ちゃんは僅かに引き攣った顔をして
「わたしお兄ちゃんとアユムくんと他にそれくらいしか、人の名前知らないし」
「……そうか」
博愛主義のこの子だけれど、だからって、努めてクラスメイトの名前を覚えようとはしないんだよなぁ。
「とにかく。学校いこっ。今何時かわたし分かんないけど、ちょっと急がなきゃだよね」
「……まぁ。そうかも」
いつもの時間に起床していつもと違って鏡の前で髪を染めていたのだから、時間は押しているはずだと言える。遅刻の危険が有るほどではないが。

「アユムくんちまでもうちょい近いと思ってたな。でも良かった、家で会えて」
「姫ちゃん。どうして今日に限って、ぼくの家を訪ねて来てくれたんだい？　一時間弱かかったろうに」
ぼくが訊くと、姫ちゃんは少し困ったように
「……そうですね。今日はちょっと、素敵なことが起こる日だから」
そう言って、綺麗な笑顔を浮かべたのだった。
「……そう。それじゃあ、早く行かなくっちゃな」
ぼくは言って、自分の部屋に引っ込む。全ての教材が入った鞄を肩に引っ提げて、それから姫ちゃんを隣に立たせて家を出た。
登校中という昔なら一番気分の悪かったこの時間帯。好きな人がすぐ隣にいる。
それだけでこんなにも違う。変わったのだ。
「……アユムくん」
姫ちゃんが、そこでおずおずと口を開いた。
「カッコいいよ。それ」
悪い気分ではなかった。と言うか、バカ丸出しの金髪振り乱して、その場で小躍りしたいほど嬉しかった。

廊下ですれ違った担任教師にすごい注意を受けた。
もともと先生方からの受けも良くはなく、何をしでかすか分からない性格の暗い奴というのがぼくの認識であった。それが校則破りの金髪で登校してきたのだから、気合を入れて取り締まるのは当たり前である。
だがしかしクラスメイトの反応はまだしも芳しいもので、誰からともなく「それ、自分で染めたの」という問いを受けたのだった。今朝、と答えると声が沸く。もちろん、それに悪い気分は起こらなかった。
ホームルームの始まりで担任教師はぼくの頭を再びなじると、今

日は大切な話があると言って教室をざわつかせた。席替えは何度かあったが相変わらず姫ちゃんの隣の席、しかしその斜め後ろに新しい席が設けられていたことから、どんな話かは大方予想が付いた。関係ないとは思わなかった。

が、それは予想外であった。

「おうや？　なんだそこの焼きプリン、もしかしてアユムか？」

言ってげらげら笑うのは、妙に端正な文字で黒板に苗字はカタカナ、名前の方は堂々と『忍』と記入した、一週間前仮退院したばかりのぼくの友人であった。

「……なんでさぁ。バカのおまえがこの高校に来ているんだよ？」

と、ぼくはこの際ではっきり言ってやった。

「おりょりょ。ここってそんなに頭の良い高校だった？　入院中ちょちょいっと勉強しただけで、転入試験はちょろかったぜ。欠席日数すごいことになってるあたしを受け入れてみたり、レベルとしてはそうでもないだろ？」

そのあまりレベルの高くない高校の生徒達の前で、しのぶちゃんはそう言ってくすくすと笑ってみせる。まさに天衣無縫、やりたい放題という奴だ。

休み時間、転校生相手の質問攻めにいちいち得意げに解答するしのぶちゃんの脇、ぼくはこそこそと姫ちゃんに尋ねてやる。

「……知ってた？」

「サプライズ、かな」

しのぶちゃんにそうしろって言われた、ということが表情から伝わって来る。うん、あのバカのやりそうなことだ。

「どうして転入して来られた？」

「……集中力はあるでしょ？　あの子。それに、あの子警官目指してやってた勉強って、実はわたし達の授業のレベルとは比べ物にならないようなのだしね」

「……悔しいが認めよう。あいつ、潜在能力はまずまずだ」

腹に穴開いてる癖妙に勉強ばかりやってるなぁ出席日数の埋め合

わせか、とか思っていたら。酷く突飛なことを思いついていたものである。
「あの子、自分なりに考えたんだって。それで最後の結論が、自分が学校に来れないのは、学校がつまらない所為だっていうの。だから……」
「うん。なるほど良く分かった」
ぼくが意味もなく髪の色を染めてみたように、あの子もあの子なりに思うところがあって、端から見れば意味不明な行為に走っていたのだろう。ぼくらは似たもの同士だから。普段は妙な理屈で妙なことしかしない癖に、たまに気が向けばやはり妙な理屈で、平凡で陳腐な行動に走る。
だけれど、まあ。
ぼくもしのぶちゃんも、昔と比べて少しは変われたのは事実だと思う。
見た目に気を使うことと、きちんと学校に通うこと。どちらも良いことには違いないのだ。

などと。マイペース姫のサプライズによって、ヤンキー初心者が謎の転校生と運命的な再会を果たすことだなんて、毎朝友人と一緒に登校して体育が好きで修学旅行が好きで放課後部活で汗をかいた後みんなでラーメンを食べるような連中でも、きっと妄想さえしないだろう昭和なストーリーを平和に楽しんでいられるのは、それはもちろん、ぼくらが爆弾魔との決着をつけたからに違いない。
『ああー君？　シスターラバーの言ってた歩君？』
『……はあ』
シスターラバーて。
『それで。これはラバーのシスターちゃんの携帯電話だよね？それに出るのは、君こと、開道歩君』
『……そうですが』
『端的に言う。爆弾がもうない』

『そうですか』
『だから君は助かる。君らの居場所は伝えて置いた、救急隊も真っ先に駆け付けてくれるだろう。良かったね。ところであのうるさい赤子は元気かな？』
『……あなた。ラバーさんですか？』
電話が切れた。
本当にふざけた野郎だった。
ぶっちゃけその電話がかかる頃にはぼくらはとっくに救出されていたので、ラバーの精一杯の誠意は完全に無駄だったことになる。まあせいぜいがんばれ。
何れにせよ。しのぶちゃんの腹の傷は綺麗に回復。他に死傷者は奇跡的にというべきか、まともに起動した爆弾の数から言えばそうでもないのか。まったく皆無。死人怪我人まるで零。ただ施設の方は結構深刻なところにダメージが入っているらしく、自然崩壊の危険を回避する為すぐに解体された。ちなみにペットショップの生き物は全員無事だったが、音のショックでほとんどのヘビが白ヘビになったらしい。
あの西条デパートは、姫ちゃんとしのぶちゃんが出会ったところでり、ラジオと話をしながら暴れる父から、兄妹が良く逃げ込んだ場所でもあるのだそうだ。ついでに言えば、ぼくの催涙スプレーが眠るところでもある。どうでも良いが。
「よぅ」
と、いうことで平和な日常に戻り、いつかの中庭で姫ちゃんが来るのを待っていたぼくの背を、いつぞのいじめっ子少年が叩く。
「豊彦のところ行こうぜ」
こそこそと、まるで密談でもするような声色だ。何と無くスパイ映画っぽい雰囲気。つーか豊彦って誰だよ。
いじめっ子少年から窺えるのは、僅かな恐怖と中くらいの期待と大きな好奇心と、耳掻き人掬いの好意。推察するに、おまえは髪を金髪に染めたんだから、一度そういうことをする連中のボスに顔を

出すべきだ、ということだろう。
もしかしたらこれは、根暗少年から不良少年へのランクアップのチャンスかもしれない。ドロップアウトとも言うが。
「……すまない」
ぼくがそう言った時、校門から姫ちゃんが現れてまずは笑うと、それからいじめっ子少年を一瞥して不安な顔になり、ぼくの表情を見て安堵したような息を吐いた。
「彼女待ってたのかよ。悪いな。……豊彦には俺が言っとくから」
そういうと、いじめっ子少年は姫ちゃんから目を逸らすようにしてその場を離れて、一回だけ後ろめたそうに姫ちゃんを振り返って、また走り出した。もしかしたら、頭が悪くて常識がなくて乱暴で下品でナンセンスというだけで、根っこは良い奴なのかもしれないとか、ぼくはそう愚考した。
「あの人と何を話していたの？　アユムくん」
あの人、の響きには僅かな恐怖が含まれているが、しかし疑問の方が割合として大きい。ぼくは少し考えてから「三囚人問題について話していたんだ」と答える。
「それよか。姫ちゃんはどうしたの？　寄るところがあるとか言ってたけど」
「料理クラブなんだけど……」
姫ちゃんは少し恥ずかしそうに言った。
「今日、家庭科の授業があったでしょう？　それからずっと、料理クラブに入らないかってずっと言われてて。……それで、ちょっと挨拶に」
「そうか」
割った卵の殻を手なりで口に入れないかと、そんな心配は、もうなかった。
「おうアユムに姫。待っててくれたか」
と、部活見学と携帯電話のアドレス交換といじめっ子少女との挨拶などをしていたしのぶちゃんがやって来た。

「偉く早かったね」
「早く済ませたからな」
姫ちゃんは携帯電話を何やら操作しながらそう言った。その体に怪我はないが、制服が僅かに乱れていた。
「偉く社交的だねぇ」
「本当だね」
ぼくが言うと、姫ちゃんは嬉しそうに何度か頷いた。
「昔だったらしのぶちゃん。きっとそういうの怒鳴って帰しちゃうでしょう？」
「そうかな。……そうだったな」
しのぶちゃんは言って、シニカルに笑う。
「んま。連中と会えたのもあの時死なずにすんだからだ。そう考えると、一週間に一言ずつ言葉を交わしてやるくらい、良いかなって」
しのぶちゃんの性格を考えると、そのような邪な考えを隠す気もなく吐露したことだろう。そんな彼女を仲間として受け入れようとは。あのいじめっ子少女とは流石に一悶着あったようだが。そういや姫ちゃんの時も、直接手を出してきたのはあいつらいじめっ子グループだけで、基本的には社交的で懐の広いクラスなのかもしれない。忍ちゃんを通じて、姫ちゃんがクラスに受け入れられていくようなことも、もしかしたら期待できる。
「それじゃ。行こうか」
「そうですね」
女の子二人が頷きあい、ぼくがそれに続く。三人はこのまま別々の帰途に付き、その後港で落ち合い同じところに向かっていく。
本日は夏祭りである。

勉強は少しできるようになってもやはり頭の良くないしのぶちゃんと、できることが絵画しかない初心者ヤンキーのぼくと、頭を使って行動をしないマイペースな姫ちゃんの三人で散々要領の悪さを

発揮しながら縁日を巡り、港のベンチに腰掛けてそれぞれ屋台の食い物をむさぼった。
姫ちゃんは以前とは違い、リンゴ飴など不器用に齧っている。もちろん誰の残り物という訳でもない。
変わったというなら姫ちゃんだ。何かを選択すること、何かを愛さないこと、何かを拒絶すること、何かと戦うこと、何かから逃避すること、何かを忘れることを、姫ちゃんはほんの少しずつ、覚えて来ている。どれもこれも円居愛の願った良い子とは違っていて、しかし絶対に必要なことだ。
もちろん、色々人間らしさを取り戻しても、姫ちゃんは姫ちゃんで、優しくて天然でマイペースだった。取っ付き易くもなっているかもしれないので、悪い虫にはこれまで以上に注意しなくてはならないだろう。
……と、その時だった。
ひゅー、と間抜けとも言える音がして、ばつん、とけたたましい音と共に花火があがった。
「おおー。すげー」
感心したように感動したように、しのぶちゃんが目を輝かせて無邪気にそれに見入る。
いいや、こんなプログラム、なかったはずだぞ？
つーか。あれって絶対近所の公園からあげてんだろ。どこのどいつだ。バカなのか。
「すげーすげー。すげーことする奴がいるもんだなー」
港のみんな、そのサプライズに沸き立ってはしゃいでいる。花火打ち上げの犯人もさぞ満足だろうに。ぼくは思い、その美しい花火にしのぶちゃんが気を取られているのを確認しつつ、隣の姫ちゃんに尋ねた。
「……ねぇ。姫ちゃん」
「何かな？」
カロリーメイトではなくリンゴ飴を口に含みながら、姫ちゃんが

首を傾げる。
「ぼくのこと、好きかい？」
「はい」
姫ちゃんはすぐに答えた。
「それは異性として？」
我ながらぶしつけな訊き方である。
「異性として、という言い方は少し違うけれど。でもこれが、恋なのは確かだと思う」
花火が上がる。姫ちゃんが笑う。
「だけれどね。最近、気付いたんだよ」
「何だい？」
「あの時、アユムくんが初めてわたしに好きって言った時、わたしの方からも同じことを言えなかったのは、きっとわたしが、しのぶちゃんに恋をしていたからだと思う」
……。
……？
「……へ？」
「しのぶちゃん。かわいいじゃない」
姫ちゃんは照れたように笑う。
「繊細で、真っ直ぐで、たくさん間違えて、たくさん悩んで、たくさんがんばって。わたし、そういうこと、したことなかったから。人間らしい人っていうのは、あんな子のことを言うんだって、ずっと憧れてた」
下を向き、小さく微笑んで姫ちゃんは言う。
「わたしのこと守ってくれた。助けてくれた。すごくまっすぐに、すごく至近距離で、すごくたくさんの気持ちをくれたの。わたしにとって、しのぶちゃんはわたしのお家みたいな人。だから」
恋をした。
なるほど。
これはただ、姫ちゃんがまだ少し、人とずれているからだと言い

切ってしまう訳には、いかないことだろう。
「だけれどアユムくんも好き。死んじゃうくらい好き。しのぶちゃんと良く似ているけれど、やり方と、目的が、全然違うの。全然違うあなたが好き。わたしに恋をしてくれた、わたしに恋を教えてくれた、赤裸々で真っ直ぐで、何があっても美しいものを絶対に失わないアユムくんだから、わたしもあなたに恋をしたの」
姫ちゃんは困ったように笑う。
「だからわたし。がんばって選ぶの。アユムくんかしのぶちゃんか、真剣に考えぬいて、今度は絶対に間違わないで、一人だけ選ぶの。そうしなくちゃいけないって、アユムくんのお陰で分かったから」
「そうか」
ぼくは言って、笑った。
最高に良い気分だった。
だってぼく、姫ちゃんに好きって言ってもらえたんだ。
「だから。きっと負けない」
ぼくは言った。
絵を描こうと思った。生まれて初めて、自分じゃない誰かの為の絵を。他の何よりも、誰よりも最高に素敵なものを考えて、何としても、何をしても、それを姫ちゃんに送ろうと思った。
「それはわたしもです」
「姫ちゃんが？」
「ええ。……アユムくん、人の表情見るのは好きなのに、結構鈍感です」
姫ちゃんはくすくすと笑った。
「きっと負けないよ。わたしもね」
少し感覚を置いて、大きな花火があがった。
これからクライマックスだ、と、根拠もなくぼくは思った。
「すっげーなぁ。すげぇ」
すげぇすげぇと、しのぶちゃんは先程からそればかり呟いている。

姫ちゃんの言うことはまだ分からない。
だけれどとにかく今は、空で弾け続けるその芸術を目に焼き付けることに集中しよう。
きっとぼくの作る絵画が、これに劣ることのないように。

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただいて本当にありがとうございます。
人生でもっとも楽しく書くことのできた作品です。気に入っていただけたでしょうか？
どうか感想よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2755q/

姫様のご採択

2011年1月26日04時07分発行